

然りとす、以爲らく人心の弱點、大人高士に適せざるなりと、即ち彼等は終始尋常人民の心情行爲に戻りて、悲喜の情を顔色に顯さるるを以て、英雄豪傑の眞面目となすあり、嘗て之を聞く、昔者羅馬の聖賢カトン、一細民の罵詈訕笑を受けて、太く打撃せらる、然るに彼れは雷に堪忍を以て此民の不義を黙忍したるを以て足れりとせず、又雷に正心坦懷を以て此下輩に遠く超越する事を示すを以て足れりとせず、傲然睥睨して曰く、此民我に不義を加へず、蓋しカトンは余りに大なり、此民は余りに小なり、故に此民の凌辱我に達する能はず云々と、是れ實に過當の言なり、斯の如きは人性に戻る者なり、何となれば人として厚遇虐待に感ずるは、人情自然の然らしむる所、然るを故さら不感不覺を装ふて、喜怒の情を見はさるるは、眞理以外の所爲と云ふ可し、故に徳の名を以て稱するを得ざるあり。

我耶蘇基督に至りては大に之と異なり、人性は決して斯く迄強むられず、唯だ眞と善の定規によりて制せられたるのみ、故に耶蘇基督に於ては、人たるの點皆發露して、一々容易に識別するを得、尋常人間の感ずる悲喜憂樂の情は、彼も亦均しく之を感じ

たり、彼れの喜びたる、彼れの悲みたる、彼れの苦痛を感じたる、彼れの涕淚を流したる、毫も尋常人間に異なる所なし、又此悲喜憂樂の情も、他の人々と同じ程度、同じ強弱に感じたるや明なり、彼れの他の人間に異なりたる點は、彼れの不感不覺を装ふたるに在らずして、單だ悲喜憂樂の情如何に深且大ありしも、理非を辨識せる彼れの心を擾亂するに至らざりしに在るのみ、彼は始終公明正大なりき、始終虚心坦懷なりき、始終晴天白日なりき、彼は如何なる大喜大憂の場合に際しても、又如何なる至痛至感の境遇に接しても、決して眞と善と及び言動上に於ける美との一定せる範圍を出でたるとなかりき、彼は感情なきが爲めにはわらざりき、彼れの愛したる、彼れの惡みたる、他の人間に毫も異なるなし、唯だ其異なりたるは、其感情の始終正理に服従奉事せる事のみ、是れ豈に怪むに足んや、人間と云ふ動物に最も適合する事なり、蓋し人間は正理と感情とを同時に兼有する者なればなり、基督の感情は善く正理に服事したり、決して之に先だゝざりき、決して之を凌がざりき、況んや之を逸出するが如き事をや、彼は愛す可き者を愛し、惡む可き者を惡み、其赦すや赦す可き人に、其怒るや怒る可き

時にのみ、而して如何なる場合にも、義の程度と、美の程度と、又其比例とを善く守りたるが故に、吾人今潜心熟思して其一生の言動を逐一考究するときは、感驚交々迫りて、禁せんと欲するも得ざるなり、隨て吾人の念頭に自然浮び出づる事あり。

神若し吾人人類の眼前に完全無缺の人間の標本を示さんと欲し、是れが爲めに身躬ら人間の靈魂と肉身を以て、眞と善の理想を人性の堪ゆる限りまで實行せんと欲するも、福音書に畫かるゝ耶穌基督より至れり盡せる言動は、斷じて爲す能はずと云ふ事即是なり。

然らば則ち縱令耶穌基督を神にあらすと假定するも、縱令福音書に畫かるゝが如く言動せざりしと假定するも、良し同耶穌基督に關する凡ての歴史、凡ての傳記を架空の虚説、福音者等の想像説なりと斷定すと雖、言決して吾人に満足を與へざるものあり、何となれば果して斯くの如くありせば、四人の粗朴愚庵なる猶太人は、如何にして斯くも善盡し美盡せる完全無缺の人物を想起するを得たると云ふ一大疑問は、忽ち吾人の心に發起すればなり、若しも此一大疑問にして庖丁の牛刀に解剖せらるゝを得ば、吾人

は甲冑を脱して右の假定説に服従すべし、然れども吾人は此事の斷じて能はざるを知る、何となれば耶穌基督以前には斯の如く善盡し美盡せる完全無缺の人物は何處にも見出さざればあり、豈啻以前と云はんや、以後に於ても亦然り、試に古來の高尙幽遠なる哲學者の遺書を徹始徹終せよ、耶穌基督に類似する人物とは云はず、其幻影のみにても之あるや否や、吾人は歴史ありてより以來、斯の如き人物の世に出でたるを見ず、後世幾百千年を経過すと雖亦然るべし、彼は實に天地剖判以來、一ありて二なき人物なり、是れ實に福音者の外には、如何なる碩學鴻儒にも想起案出せられざる所以なりとす、反對論者は如何なる論辨を費すも、如何なる假説を累積するも、望むも望まざるも、確然牢乎として抜くべからざる事實、較明顯著にして掩ふべからざる事實あり、即ち耶穌基督の傳紀は、載せて福音書に在りと云ふ事はなり、若し耶穌基督の實在にして信すべからずんば、此書は如何にして編成せらるゝを得たる、若又此書の實在をも疑はんと欲せんか、今日世界萬民の掌中に在るを如何せん、嗚呼若し基督の實在にして疑ふべくんば、基督の實在なきの此書の存在は、猶更に不可思議と云はざるべか

らず、善ひ哉ルーソーの言や、曰く「若し福音書にして真ならずんば、作者は書中の豪傑よりも尙ほ感すべきもなり」と。

福音者の
提出した
る基督は
猶太人民
の希望思
想に全く
反対せり

試に福音者は耶蘇基督を提出して、猶太人民の古來翹望したる救世主に仰がしめんと欲したりと假定せよ、猶太人民に此事を信せしめんが爲には、其提出する耶蘇基督に如何なる天職を負擔せしめ、又如何なる特性を賦與せしむべきぞ、言ふ迄もなく、當時の猶太人民が、來るべき救世主に就て、抱懷したる思想希望に應せんことを務めたるや明なり、而して當時の猶太人民は、救世主に就て、如何なる思想希望を抱懷したるや、夫れ往時の隆盛榮昌を追懷するは、零落失墜したる國民の常なり、而して當時猶太人民の状態は如何、ダビド、サロモン王の盛時より失墜して、外國の羈絆の下に呻吟し、屈辱を蒙り、獨立を失ひて、終焉の恥辱を吞み居たりき、其王として仰ぎ居たる者は、最早猶太人にはあらずして、海外の出に係り、尙又此王すらも、王權の形影のみを握りて、國の全權は全く羅馬人の手に在りたり、蓋し羅馬人は當時世界の羈權を掌握して、武勇を宇内に逞ふしたればなり、此時に當り猶太人は往時の隆榮を追想

し、ダビド、サロモン王の盛時を回想して、嘗膽臥薪、早晚海外の壓制を破却して、自由獨立の王政を回復せんことを夢想したり、是故に救世主の光榮に關する豫言の如きも、皆斯る思想希望に依りて解釋し、救主一たび降らば、武威を天に假り、郷國イスラエルを屈辱の域より救ひ、宿怨の仇敵を虛無に歸し、以て猶太の國威を宇内に振はするに至らんと思料し、翹望景仰して大旱の雲霓を望むが如き感をあし居たり、當時猶太人の思想希望は實に斯の如くなりき、(否寧ろ其救主に關して抱懷したる先入誤謬は、實に斯の如くなりき)、夫れ斯の如き思想希望に應せんことを謀るは、一朝一夕の業にはあらざるなり、然り、猶太人の政治的境界を倏忽の際に一變して、失敗の民より勝利の民に至らしめ、納税の民より徴税の民に至らしむるとは、洵に容易の業にはあらざりしなり、却て之に反して耶蘇基督をして往時の聖王の裔となし、天此民の危急を憐んで、此人を遣はしたりとなし、猶太人民を塗炭の苦より救出して、凱歌の壯榮に至らしむる者は此人なりと云ひつゝ、救主の榮名を掲げて、同人民に于戈を執らしめ、羅馬政府に反軌を企てしむるとは、眞に易々たる事業にして、又洵に時機に投合したる

となりき、去ればこそ耶蘇基督崩去の後、幾多の權謀家起り、稱して自ら教主と揚言し、猶太人民の怨望を應用して、反旗を羅馬政府に翻したる者往々之ありたるなれ、余が前編に記述したるバルコケバの如き、蓋又其一人なりき、然れども是等權謀家の企圖は何れも皆水泡畫餅に歸し去りて、管に其國を救ふ能はざりしのみならず、却て其國民の頭上に益々大害を來すに至りたり、若し耶蘇基督の弟子にして亦斯の如き陰險の手段を取りたらんには、其企圖亦必ず彼等陰謀家と同じ結果を食むに至りたるべし、然りと雖人々を欺んが爲には、(斯の如き境界を利用せんと欲する人間より見る時は)、斯る陰謀畫策は、蓋し當然の事なりしならん、故に若し耶蘇基督が手に劔を執りて同國人民の前に出で、我はダビド王の後裔なりと揚言して、率先羅馬政府に反旗を翻さんと欲したりとせば、彼は時勢必致の業をなしたりと思惟せられて、不平なる民を已れに同意服従せしめたりしならん、去れど耶蘇基督と其弟子は、此人間的必致の業を執らずして、全く反對の方向に出でたり、是れ實に一考を要すべき所ありとす、福音者の言に據るときは、耶蘇基督はダビドの後裔にして、同大王の族中より出でた

る者なるには相違なきも、此事を榮として、人々に之を誇示するが如きとは、毫も之なし、寧ろ師も弟子も此一事は全く忘却し居たるもの、如し、彼等福音者の耶蘇基督を畫くや、設令富強なる王族なりと云はざる迄も、高貴寛大、祖先の忠勇豪氣ありて、眞個に父王に恥ぢざるの概ありとでも稱揚すべきに、言毫も茲に出でざりき、若くは世の驚嘆景仰する不世出の英雄とでも稱して、民人の欽崇愛慕を惹起せしむべきに、又敢て之れをもなさず、彼等福音者の提出したる耶蘇基督ある者は、實に猶太國の一隅に偏して、同國民より最も蔑視せられたる僻邑より生れ出でたる尋常の謙兒、工匠の一子にてありにき、名譽もなく、權勢もなく、信用もなく、財産もなく、又一定の居宅もなく、否其頭を枕する所だもなき者なりき、(マテオ傳八の二十)、嘗て學校に入して學びたるともなく、嘗て國老に交りて議論を上下したるともなく、榮譽に誇りたるとは一も之なく、名聲を露ふせしめたるとは更に之なく、遠く榮耀歡樂の地を去り、尙に名利喧歴の土を離れ、偶々雲霞の如き群衆其跡を慕ひ來れば、直に寂寞の野に遁れ、(マルコ傳八の十八)、民人其高説に敬服驚嘆して之を王に仰がんと叫べば、寂

然山に避けて通宵祈禱に従事したり、(ルカ傳九の五十四)、秋毫も硬強の手段を執りたるとなく、寧ろ其弟子の容氣を誡めて、義を過當に行ふを禁じ、(マルコ傳三の十七)、防禦の地に立てるも劔を抜くを嚴禁し、(マテオ傳二十六の五十二)、其跡を慕ふ後進の者に對しては、己れを忘るゝを命じ、十字架を擔ふて隨從するを命じ、(マテオ傳十六の二十四)、當時の弟子に對しては、一生世に痛苦あるべきを豫言し、(ジヨアン傳十六の三十三)、萬民より其名の爲に嫌棄排斥せらるべしと先言し、(マテオ傳二十四の九)、彼等に最後の勝利者(同章三十三)たるべきを告げたるも、是れ武器を執りて戦ふの意にはあらずして、堪忍を以て之に勝つての意にてありたり、遂に其王國は此世に在らざると(ジヨアン傳十八の三十六)を公然斷言したる後、羅馬政府、即ち猶太人の希望によりて彼が反抗すべかりし羅馬政府、の遣はしたる猶太の知事より死刑に處せられて、萬事茲に休したり、夫れ斯の如く事皆當時の猶太人の思想希望に正反對して出来したり、然り、當時の猶太人が來るべき救主に就て抱懷したる思想と、福音者の提出したる耶蘇基督の言論し、行動し、死去したる方道とを比較するときは、其反對豈啻

氷炭のみならんや、猶太人の先入的思想を悉く破却し、其凡ての希望を全く畫餅に歸し去らんと故意に務むる者ありとするも、此外には出づる能はざるべし、然れども記せよ、若し果して福音者は猶太人民に、耶蘇基督を救世主ありと信せしめんが爲め、其歴史を空中より案出したるものなりと假定せば、其結果果して如何ぞや、吾人は眞個に解釋すべからざる一大機密なりと思考す、何ぞや、一方より觀察して、彼等福音者は一大智能に長けたりと云はん、何となれば彼等は天下唯一、世界無比の異人物を想起するを得たればなり、耶蘇基督の如きは、余の前述せる如く、實に歴史ありてより以來、人の想像に起らざりし人物なり、蓋天地開けてより以還、斯の如き異様の人物他にあらず、然るを彼等之を想像して腦中より案出す、是れ其の一大智能に富みたりとあす所以なり、然りと雖他の一方より考察するときは、此一大智能に富みたる彼等は亦一大狂漢なりしと云はざるを得ず、何となれば斯る異様の人物を猶太人に信せしめて、同國の救主と崇尊せしめんとするが如きは、管に成功に達する能はざる事業なる而已ならず、(同人物の言動及死生と同人民の思想及希望を見て然か云ふ)、實に誠

に狂氣の沙汰と思ふより外なければなり、若し果して彼等が斯の如き異様の人物を空中より案出したりとせば、又之を正反對の思想を有せる人民に信用せしめんとを務めたりとせば、是れ實に故さら己れと此人物を公衆に示して、天下の笑を招かんとを欲したりと謂はざるべからざるなり、斯る矛盾、斯る撞突は、果して如何にして之を解釋するを得べきや、吾人は是に至りて玄の玄、妙の又妙ありと叫ばざるを得ず、余は茲に再言す、果して斯の如き假定にして眞なりとせば、吾人は福音の一頁毎に、否一句毎に、智能の極點と狂愚の極點と相合調し居るを見るなり、吾人が眞個に解釋すべからざる一大機密と斷言したる所以、亦實に是が爲なり、然れども請ふ猶一步を進めて論せん。

特に奇怪なるは、彼等福音者は斯る異様の人物を提出して、管に之を猶太人にのみ信せしめんと欲したるにあらず、進んで全世界の萬民にも之を救主なりと景仰せしめ、之を天主なりと尊拜せしめんと欲したり、若し果して福音者にして欺騙者なりせば、又其提出せる耶蘇基督にして果して天主にあらずとせば、如何なる手段、如何なる方

福音者の提出したる基督は當時の外國國民の常態に於ても撞突せり

道に依りて、彼等は其目的を達するを得たりと思ふや、此事の言ふ可くもあらず行ふべくもあらざるを證明せんが爲に、請ふ余をして耶蘇基督の時代に當り、泰西諸國の狀態如何なりしやを概記せしめよ。

是時に當り、世の學者は何事をも信せざりき、詳言せば、宗教上に就き確信すべきと一も之なしと思惟したりき、何となれば當時哲學者の意見は各相撞着し、隨て其議論も各相反對して、凡ての人の腦髓は、萬事に就ての懷疑主義に満たされたればなり、祝祭日等に際しては、時俗に諂ふて人民と共に公然祭典に出席したれども、實際自己の心中に於ては、最早毫も宗教上の信仰は有せざりき、若し夫れ當時の人民に至りては、因襲の久しき未だ外部の信仰は失はざりしも、其所謂信仰なるものは、眞の宗教的信仰にはあらずして、寧ろ迷信的慣行と云んこそ其當を得たり、何となれば彼等は其原因を知らずして、唯だ習慣に依りて之を行ひたればなり、彼等は其意味の何たるを解せずして、唯だ其迷信に驅られて動きたるのみ、彼等の尊拜したる神なる者は、往々皆自國の創立者若くは擁護者として、久しく欽崇せられたる古代の人物ありき、新

しき人物に至りては、敢て之を神とせざりき、偶々之を神として祭るの發議を提する者ありとするも、人民すら尙且之を信するの質直を有せざりき、當時羅馬の皇帝の崩去するや、直に之を神に列して、祭祀尊拜するの習例ありたれども、是れ實に公然の阿諛にして、心中より之を信じ、之を拜し、之に祈りたる者は、羅馬人中一人もなかりき、蓋し歴史の證明する所に據るときは、是等皇帝の大半は、臣民を赤子の如く視たる仁愛深き君王にはあらずして、往々民を溝壑に陥れて、塗炭の苦を嘗めしめたる惡逆無道の怪獸なりしを以てなり、狀勢既に斯の如し、去れば此時に際し當時の人民に或神を提出して、之を中心眞實に拜せしめんとするが如きは、全く夢幻の企業にてありたり、蓋し民の宗教的禮拜を有したるは、全く習慣上の情性に驅られたるものにて、固より一定の宗教心、確乎たる信仰心のありたるにあらざればなり、況んや從來尊拜し來れる神佛を破却して、之に代ふるに三十三年以前、猶太小國に於て磔刑に處せられたる耶蘇基督なる者を以てするに於てをや、換言せば、各國古代の神の代りに、近く生死して當時の人々に知れ渡りたる人間を立て、之を神として尊拜せしめんとする

るが如きは、狂愚の極點にてありたり、況んや十二人の漁夫若くは四人の小説家なる者が、之を企圖せんとするに於てをや、試に思へ、今斯る漁夫若くは小説家が日本帝國に漂流し來りて、同國歴代の帝王を排し、之に代ふるに五十日以前に死したる人間を尊拜せしめんと企つるあらば如何、見る者聞く者必ず直に之を狂人と見做して、敢て之を齒牙に懸くる者なからん、其人物の死期を九年乃至十年以前とするも、事毫も變ることなし、若それ其人物をして凡ての神に凌駕せしめ、其一たび世に現出するや、直に從來の神の威靈を消失せしめんとするに至りては、愈々益々事の困難なるを見るなり、然りと雖此困難なる事業を、狂愚至極の人間が、企圖したりと假定せよ、又其人間が遂に奏功して、世の崇拜信仰を、己れの提出したる人物の上に、吸集したりと假定せよ、彼等は果して如何なる手段を取りて、此目的を達するを得たりとすべき、如何なる狂愚の人間と雖、其目的に達しらるべく思はるゝ手段を取るべきや明なり、然るに彼等福音者は全く之に反して、出來得べからざる總ての方道を使用したるなり、如何なる人の眼より視るも、彼等の手段は決して其目的に達せらるゝ所以にあら

すと裁判せらるべきものあり、請ふ余をして再び茲に之を言はしめよ、彼等が時の人民即ち希臘人の如き、羅馬人の如き文明の民に、其尊拜すべき獨一無二の神として提出したる者は、當時尙は人の記憶に新らたなりし異邦の人間にてありたり、福音者は斯る異様の人間を提出するに當りて、何處に生れたる者と云ひたるか、羅馬か將た希臘か、否々、當時の人民が野蠻國と見做したる猶太國に生れたりと云へり、然らば則ち耶穌基督なる者は、乃ち彼等福音者の獨一無二の神として提出したる人物は、羅馬希臘の人民が、視て以て奴隷供給國となしたる處より生れたる者にて、右二國の人民には、一匹の人間とも見做されざりし者にてありたり、而して此「人間とも見做されざりし者」は、如何なる身分に畫かれたりしぞ、富者か、否、極めて貧困なる窮兒に畫かれたり、夫れ穢多非人の如き者と雖、山なせる財産あらば、尙は以て事を擧るに足る、然るに彼の富貴を以て一代の榮となし、否、眞誠の徳行と迄見做し、貧困の如きは人間一生の耻辱、終焉の羞辱となし居たる當時に在りて、卑下せられたること穢多非人の如く、赤貧なること掃然洗ふが如くなりし者が、果して如何なる事をかなし得べき、然れども如何に赤貧なるも、材あり學あらば、尙は頼むに足る、然るに彼の人間は、決して文學者にてあらずれば、哲學者にてあらず、單だ平々凡々たる一個の工匠なりき、而かも學術枝藝は正人君子の耽る所、工匠の如き勞動的職業は、奴隷の甘んずる所と見做されたる當時に在りては、尙更事の困難なるを覺ゆ、彼は喜怒色に顯はれざる的英雄豪傑の如く、鐵石の心腸を有したる者の如くならんには、或は前途望を囑せらるべし、然るに彼は通常の人間の如く、極めて感じ易き者にてありたり、彼は泣きたり、彼は苦みたり、彼は其死の近づくを見て、震慄して血汗を流すに至りたり、之に反して彼の希臘人中に在りては、哲士賢士と稱せられたる者は、至痛大苦をも堅忍して、毫も苦痛の容を示さず、其身恰も剛鐵の如しと云はれんとを務めたり、彼の羅馬人に至りても、死を鴻毛の輕きに比し、故なく自殺を志し、或は浴中血脈を割いて死する等、是れ彼等の常事となし、遊戯となし居たる所なり、斯る國に於て彼の人物は、人よりも感じ易き性情を以て提出せられたり、然れども彼にして若し戰場に名譽の戦死を爲したる者と云はれなば、尙は或は尊崇するに足らん、然

し得べき、然れども如何に赤貧なるも、材あり學あらば、尙は頼むに足る、然るに彼の人間は、決して文學者にてあらずれば、哲學者にてあらず、單だ平々凡々たる一個の工匠なりき、而かも學術枝藝は正人君子の耽る所、工匠の如き勞動的職業は、奴隷の甘んずる所と見做されたる當時に在りては、尙更事の困難なるを覺ゆ、彼は喜怒色に顯はれざる的英雄豪傑の如く、鐵石の心腸を有したる者の如くならんには、或は前途望を囑せらるべし、然るに彼は通常の人間の如く、極めて感じ易き者にてありたり、彼は泣きたり、彼は苦みたり、彼は其死の近づくを見て、震慄して血汗を流すに至りたり、之に反して彼の希臘人中に在りては、哲士賢士と稱せられたる者は、至痛大苦をも堅忍して、毫も苦痛の容を示さず、其身恰も剛鐵の如しと云はれんとを務めたり、彼の羅馬人に至りても、死を鴻毛の輕きに比し、故なく自殺を志し、或は浴中血脈を割いて死する等、是れ彼等の常事となし、遊戯となし居たる所なり、斯る國に於て彼の人物は、人よりも感じ易き性情を以て提出せられたり、然れども彼にして若し戰場に名譽の戦死を爲したる者と云はれなば、尙は或は尊崇するに足らん、然

るに彼は全く之に反して、一大汚辱の刑罰に處せられて、非業の最後を遂げたり、即ち彼は國人より罵倒せられ、兵士より鞭撻せられ、羅馬の知事よりは遂に死刑に處せられて、其衣裳迄悉く剝奪せられたる後、盜賊二人の間に磔架に釘せられたり、事茲に休したるか、否々尙ほ云ふべきものあり。

耶穌基督の地位身分は、一見設令卑賤の如く思はるれども、彼は遲疑躊躇なく、千遍萬回己れを神の子と稱したり、否己れ自らも神なりと公言憚らざりき、曰く「天父の爲す所、我亦之を爲す、」(ジョン傳五ノ十九)、「我と天父とは一なり、」(同一の三十)、「我を見る者は天父を見る、」(同十四の九)、「天父は我に在り、我亦天父の中に在り、」(同十の二十八)、「我教は我自らの教に非ず、我を遣はせし者の教なり、」(同七の十六)、「我を受くる者は、我を遣はしたる者を受く、」(同十三の二十)、「天父は世界を裁判するの權能を我に與へり、」(同五の二十七)、「天に對し地に對せる凡ての權は、我に與へられたり、」(マテオ傳二十八の十八)、「世界の終局に當り、人々は我の生ける者死せる者を裁判せんが爲めに、恐ろしき大威能を以て再び天より下降するを見ん云々、」(同廿五

の三十一、二、三)、嗚呼是れ實に耶穌基督の己れ自身に就て、公然斷言したる所なり、人間の口より出でたる言としては、奇怪千萬、妙不思議、實に開闢以來聞見したる例のなき言なりと雖、福音書を讀んで此言の耶穌基督の口より發せらるゝを見ることは、毫も不思議の感を與へざるは、洵に不思議と云ふべし、彼れの一言一語、一舉一動、其教訓も其性行も、皆共に謙遜と尊大、質直と威嚴、天主の全知と神の萬能とを示しつつあるを以て、彼が「我は神の子なり」と云ふ極めて尊大の言を吐くと雖、毫も不可思議の言と思はれず、此言の斯くまで他の言動と合調し居るは、實に奇と云はざるべからず、蓋し彼が「我は神の子なり」と云へるの當然なりしは、猶ほ今日の人々が「我は何某の子なり」と云ふの自然なると同じく、更に奇怪の感を與へざるなり、凡そ人其父に就て云々するや、先づ其句調語氣によりて、彼れの果して工匠の子あるや、將た君王の子なるや、容易に識別するを得、蓋し工匠の子と君王の子の語氣句調には、自然高下尊卑の別あればなり、然れども我耶穌基督に至りては、此二事毫も區別するを得ず、彼れ工匠の子なるにも係らず、一たび口を開ひて「我は神の子なり」と云

へるときは、高崇尊貴の容自ら其言語の間に顯れて、聞く人更に奇怪の念を起さず。然りと雖彼が卑怯の死去を見るときは、此高貴の現象を如何にして解釋するを得るや、彼は自らを神の子なりと稱し、又其言語舉動に於て、珍らしく之を證明したるにも係らず、一朝捕はれて謀叛者と見做され、遂に尋常の犯罪人の如く死刑に處罰せられたり、是れ此二事如何にして解釋するを得るや、其最も怪訝に堪へざる所以は、基督の受難と死刑は、彼が思はず知らざるの間に出來したる不時不慮の禍にはあらずして、却て彼は一生の間之を觀想し、之を表白して、言語の上に示したるとすら五六回に及びぬ、彼は其時期をも明に語りたり、曰く「ゼルサレム城に上らん、人の子に就て豫言せられたることは悉く成就せられん」(マテオ傳二十の十八)、彼は受難の重なる仔細を自ら畫きたり、曰く「猶太人より訴へられん、海外の人に渡されん、打擲せられん、磔架に釘せられん云々」(同章の十九)、彼は屢々之を待望し、屢々之を切望したり、曰く「我は血の洗禮を受けざるべからず、此洗禮の成就せらるゝ迄は、苦悶に堪へず」(ルカ傳十二の五十)、又曰く「我は受難の前、爾等と共に「パスカ」(最終の宴)を食する

を太く渴望す、(同廿二の十五)、一言以て之を敵へば、彼は自己の受難と死去とに就て、其心意精神を回らしたるの甚しきは、彼れの世に降れる全く此二事即ち苦むと死ぬるの二事を觀想切望するの外、他に其生息し居たる目的なきが如く然り、乃ち記せよ、自ら稱して神と公言し、世界萬民よりも神として尊拜せられんとを希望したる彼れ耶蘇基督は、一生の思出に驚天動地の大事業を企圖して、坤輿球上の人民をして驚嘆止む能はず、尊拜措く能はざらしめんとを想像せずして、却て己れの一生を終局せんが爲に、最も嫌惡すべき死刑を觀想して、奴隸の如く、犯罪人の如く死せんとを欲したりと云ふ事なり、神にありながら磔刑に處せられて死すと云ふ事は、天と地との懸絶せるよりも猶ほ甚しきものあり、何となれば此二事の間には無限の區劃逕庭あるを以てなり、是故に基督の斯の如き言動を以て、若し福音者等の發明より案出せられたる結果なりとするときは、到底人道の常理を以て論ずべからざる空前絶後の不可思議なる事業と謂はざるべからず、若し強て人間の智能を以て之を解釋否想起せんと欲せんには、先づ左の二事を認定せざるべからず、曰く彼等福音者は人間の常識を喪失し

たる狂漢なりと云ふ事はれ其一、然れども此事は前來述ぶる所に據りて、其決して然らざるを見るに足るなり、何となれば彼等の一大智能に富みたるの明證は、其著述したる福音書の中に歴然たればなり、曰く然らずんば耶蘇基督と云ふ人物には、人間の智能と遠く相懸絶せる否人知には測り知るを得ざる一大異様の智能ありて、此の異能によりて先づ其總ての言語舉動の上に、已の人間の肉體を被れる神なることを證明したる后、一轉意表の反對に出で、磔刑と云ふ人意の外に出でたる死を故さら撰擇したるものなりと云ふ事はれ其二、何となれば耶蘇基督を目して、世界を欺ひて己れを神拜せしめんとしたる奸物となし、又其弟子等を見て、此奸物に與したる同臭一味の徒黨として考ふるときは、彼等師弟の云爲行動の餘りに奇怪千萬にして、馬鹿にも程があると思はるればなり、然り、神にして磔刑に處せられ、一大知能の徒にして愚狂千萬の方道を取りたることは、是れ實に人間の常道を以て論すべからざるなり。然らば福音書の意の在る所を解せんと欲し、且は耶蘇基督の此世に於ける天職を人智の及ぶ限り迄知了せんと欲せば、須らく先づ卑劣千萬なる欺騙者と云ふよりは、數層

高尚悠遠なる思想を起して、余が前條に述べたる所を逐一想起せざるべからず、何となれば耶蘇基督の歴史と彼が此世に於て言動したる事柄は、人類一般の歴史と又其地上に生息する状態に、一大關係を有するを以て、福音書は宛然世界萬民の公著とも稱せらるべきものなればなり、請ふ余をして其詳なるを云はしめよ。

人間の此世に於ける状態果して如何、一言以て之を云へば、墮落せる者の状態なり、若くは殘敗頹壞せる築造の遺跡の如き觀ありと云ふを得べし、試に考一考せよ、内に在りては彼れ其靈魂の上に非常の頹敗を來したるを以て、擾々たる欲情起るも、正理の光を以て之を制御するに力なし、さりとて正理は決して其罪惡を放許せず、外に在りては彼れ其肉身の上に病難苦死及凡ての禍害を招きたるを以て、始終是等の禍害に圍繞せられて、須臾も安んずる能はず、彼は現在の苦難に腦まざるゝよりは、寧ろ將來の苦想に驅逐せらるゝが爲め、一層の痛苦を感ず、彼は犯罪の民にして而かも不朽の人間なり、是を以て愈々其將來の運命に就て、其心を慰撫する能はず。

人間の狀態實に斯の如し、是故に人あり、其言語を以て、就中其行爲の龜鑑を以て、

之に教ゆるに其心海に和平の秩序を立てんとを以てし、又之に曉すに現世の病苦艱難を堪忍して勳功を立るの道を以てするとは、蓋し一切人間に取りて最大の急務なりしなり、何となれば逃るべからざる將來を眼前に待望しつゝ、心毫も畏怖の念に苦められざらんがため、或は忘却若くは放散等の道を以て、成るべく禍害を避けしめんと云ふとは、是れ實に古今東西の人民の苦心憂慮し來れる所なればなり、然れども不幸にして此目的を達せしめて、希望せる安心立命の地に到らしむる者は一人もわらざりき、是を以て天下の有生日に此切望に苦められて呻吟し居たり、余は「人間の機密」と題せる論文中に述べたる如く、古來の詩人賢哲等が痛く人類の頭上を歴したる艱難憂苦を泣き叫びたるは、全く是が爲にてありしことを知るなり、又余が「希望の慰藉」と云へる論題の下に記したる如く、世界の有衆が犠牲祭祀等の道を以て、天に獲たる罪を贖ふて、心海の平安を求めんがために、種々様々の方道を案じたりと云へるも、亦全く是れが爲にてありしを見るなり。

一般人類の歴史は大略斯の如きものにてありぬ、即ち罪に泣き、禍に泣きて、一刻も早く救世主の降來を翹首渴望し居たる事はあり、是實に余が「古事新論」に於て記述したる骨子なりとす。

若それ耶蘇基督の出現は、此渴望に應ずるが爲なりしとせば、又彼れの此世に於ける言動は、全く此世界人類の墮落を救治せん爲の目的に歸すとせば、彼れの生死は如何程妙不可思議なりと謂はるゝと雖、其實毫も怪むべき性質のものにわらざるを知らん、又隨て彼の福音書あるものは、是に於て自ら解釋せらるゝを得て、畢竟神の全智全能ある攝理の珍らしく成就せられたる事實を記載したるの書なりと、一見直に了解せられて、吾人に感銘の念をこそ起さしむるなれ、毫も奇異怪訝の思は起さしめざるならん。

又果して斯の如き點より耶蘇基督を観察するときは、彼れの死生言動は、秋毫も吾人を蹶かしめず、却て吾人をして事皆固より斯くあるべかりしと思考せしめて、其降來出現の誠に珍らしく世界人心の要求に應じたるを感驚せしむるなり、試に遂一詳細に之を檢覈せよ、果して觀察の點を斯の如き地に置くときは、彼れの生るゝや柔弱、貧

困、薄命なりしは、理固より斯の如くなるべかりしを見る、彼れ若し之に反して富貴に生れ、強健に生れ、榮耀に生れたりとせば如何、世界の人類のため、其生誕は如何なる慰藉を與ふるを得べき、人の子の生るゝや決して歡樂富貴に生るゝにわらず、裸體にして、貧弱にして、叫聲を放ちつゝ生るゝなり、然らば則ち世界の人民に慰を與へんがために生るへぎ彼れ耶蘇基督が、貧弱の極、薄命の極に生誕して、世界中彼れよりも貧弱に生れたる者、彼れよりも薄命に生れたる者なきを示すに至るときは、人心之を見て初めて自らを慰るに至るなり、以爲く救主既に斯の如く生る、吾人の斯く生るゝは、固より其分あり、否救主の生誕に比して、忸怩に堪へざる次第なり云々、彼れの長ずるや卑賤ある大工の職を執りたり、若し吾人傲慢の眼を以て之を見ば、怪訝の念忽ら心頭に湧起せん、然れども少しく思慮を靜めて、世界人類の大半は如何にして生活し行くかを視よ、往々其手を動かして、勞働的の業を取りつゝ、其生を送るにあらずや、又設令如何程高貴の地位に立つも、又如何程巨萬の財産を蓄ふるも、己れをして有益ならしめ、己れをして幸福ならしむるには、勞働の外果して如何なる道かある、富貴の如き、歡樂の如き、人々既に充分嘗め盡したり、怠慢の如き、逸居の如き、羨望の如き、嫉妬の如き、是れ皆世界の秩序を紊亂して、國家を滅亡に歸せしむる原因となるものなり、世界の人民に示すべきもの、天下公衆の龜鑑となすべき者は、其地位身分の高下に係らず、怠慢なく、嫉視なく、依然として、坦然として、忠誠に其義務を竭す者にわらずして何ぞや、是れ實に尊大なる者あり、是れ實に幸福なる者なり、功勳名譽は位職の高卑にわらず、義務の遂行如何に在り、即ち耶蘇基督の傳を讀んで、彼が喜怒哀樂の感じ易き人物なると、毫も通常の人間と異ならざりしを見れば、吾人が英雄豪傑と稱する人物に就ての思想は、忽ち攪亂せられて、傾倒するが如き感あり、然れども記せよ、若し彼をして不感無覺あると木石の如くならしめば、多感多情の動物なる世界一般の人民に取りて、彼は果して如何なる影響を及ぼすを得たりとする、然り、果して如何なる標準となるを得たりとするや、天下の人間は皆總て悲喜愛憎の念に驅らるゝものなり、喜怒哀樂の情なきは人間にわらざるなり、世の所謂豪傑なる者が、平然として其喜怒を色に見はさざるが如きは、是れ其性を強ゆるの然らしむる

所決して人間の本性にはあらざるなり、果して然りとせば、彼れ基督が自からを棄して、罪過を除くの外、凡て皆吾人同様の人間となり、如何にせば喜怒哀して罪なく、如何にせば哀樂して道と徳との範圍を出でざるを得ると云ふ事を、自身實際の言行を以て、龜鑑を吾人々類に示すべかりしは、蓋し至當の事なりしなり、基督の性行に就ては實に如斯く解釋せらる、然れども彼が生死の際に迫りたる場合に至りては、事頗る困難なるを見る、何となれば生れてより死に至るまで、屢々自らを稱して神の子なりと揚言し、彼の法官の前に出でたるときも、嘗て此揚言を更へざりし耶蘇基督にして、闔國の人民より有らゆる罵詈譎笑を蒙り、打擲呵責の雨飛霧散の下に立てられ、卑賤極りなく、悲惨限りなき磔刑に處せらるゝを見るときは、吾人の心忽ち迷亂して、毫も其理の有る所を解する能はず、若し強て常理を以て之を論せんとするときは、彼が「我は神の子なり」と云へる揚言は、適ま彼が狂愚の至りあるを示し、又其死の悲惨卑劣なるは、正しく彼が馬鹿なる自慢に適當したる罰と見做さるるなり、然りと雖他の一方より考ふるに、彼れの如き公明正大なる言動、彼れの如き美盡し善盡したる

生命、然り、其智能、其徳行の古今東西に類例なく、吾人をして感驚措く能はざらしむるものにして、其終るや斯の如く悲惨卑劣なる最後に歸すべかりしとは、到底承領理會するを得ざるなり、然らば則ち如何にして之れを解釋するを得べき、基督の受難と死去とを解釋して、之れを其實際有りし如く會得せんと欲するには、須らく先づ之れを大にしては世界一般の人民の一大急務、之れを小にしては個々人々の一大急務は、自己の罪惡の赦を求めて、上神明の怒を和げ、下良心の責を慰して、神人和解の春を見んとせるに有りし事を想起せざるべからず、余の前述したる如く、古代の人民が凡て事贖罪の一端なりと信じたる者は野田の菓實、家畜の動物に係らず、悉く之れを犠牲に供し、供物に獻じて、天を祭り神を祀り、概して云へば、彼等が人間萬物の中に最も粹なる者、最も純なる者、最も潔なる者、又最も己れの性情に近接したる者を犠牲供物となし、甚しきに至りては、清淨潔白なる己れの子女をも供するに至りたる事は、世界何處にも行はれたる彰明較著なる事實なりとす、人類の救贖の爲めに、犠牲の血は世界の全土を染めたりと云ふも、過當の言にあらざるが如し、然れども世界の人民は

尙ほ其心を慰する能はずとして、絶へず百事百物を犠牲に供しつゝ、神人の間に和解の勞を執る救世主の降來を翹望しつゝありたり、然り而して耶蘇基督にして果して福音者の腦中より案出せられたる人物あらで、實際に存在したるものなりとせば、彼は則ち正しく神人の間に立つて、和解の勞を執りたる中裁者にてありたり、彼は自身を呈して從來の犠牲に代へ、爾後世界の凡ての犠祭を廢止せんが爲めに出現降來したるものなり、事跡以前の歴史即ち彼れの降生以前の歴史に於て、夥多の預言者より天下の人民に報道せられたるや、亦斯る資格ある者として報道せられたり、故に曰ふ「燔祭及び贖罪の犠牲は、御身の聖意に愜はず、是を以て我れ降來し、御身天主の聖意を行はんとす、」(詩篇二十九の七)、即ち彼は天父の聖慮に適する犠祭を行はんが爲め降來せり、新約の時代となり、彼れ初めて公然世に出でたるるとき、先驅者若翰洗者は彼を群衆に紹介するに當りて、預言者と異語同義の言を以てしたり、曰く「視よ神の羔、視よ世界の罪過を双肩に擔ふ者、」(ジョアン傳一の二十九)、此は實にジュルダン河の邊に行はれたる事にして、當時若翰洗者は頻りに後悔を勸めて、道を耶蘇基督に開きた

り、耶蘇基督の神の羔と稱せられたるは、蓋し羔は世界一般に使用せられたる犠牲なればなり、故に「視よ神の羔」とは「視よ神より遣されたる犠牲」と云ふ意と同じ、而して此犠牲善く神の聖意に適すと云ふときは、耶蘇基督は實に萬民の爲めに神に供せられたる好個の犠牲と云はざるべからず、然り而して耶蘇基督の神として其事業を成就するや、毫も缺如する所なく、毫も不完全なる所なし、故に彼が身を呈して從來の犠牲に代へ、其双肩に萬民の罪過を擔ふに當りてや、完全に其義を拂へたり、別言せば、人間の靈魂肉身の状態を以て爲し能ふ丈けは、萬民の罪過を悉く贖へたりたり、若し果して神の攝理によりて耶蘇基督の身を以て行はれたる贖罪的犠牲は、萬民の犯したる罪過に適合せりとせば、彼れの受難と彼れの死去とは果して如何なるべきかを知るに難からざるなり、(其苦罰の如何程殘逆、如何程酷薄ならざるべからざるかの意)、何となれば世界に於ける人々を考ふるに、彼等は其肉體に於ては凡ての支体を濫用し、其靈魂に於ては凡ての能力を冒役して、彼此の中に罪惡を犯すの機關となし、媒妁となさざるもの一も之あらざればなり、人間以外に散在する萬物に就て考ふるも亦

然り、人が罪惡を犯すが爲めに使用せざるもの、果して覆載間に一事一物だも存するや否や、天よ逆ふの機會となさざるもの世果して之れあるや、神に戻るの方道となさざるもの天下果して之れあるや、之れを要するに、凡そ罪として人間の犯さるる罪はなく、隨て凡そ罰として人間の蒙らざるべからざる罰は亦一つも之れなかるべし、人間は實に斯くまで罪人なり、斯くまで惡人なり、罪惡天地に貫盈すと云ふも、決して過言にわらざるあり、果して此の如しとせば、耶蘇基督が斯る罪惡を一身に擔ふて、世界萬民の爲めに贖罪的犠牲となるに當りて、其苦難死去の悲絶慘絶なる、古今に類例なき程ありしは、毫も恠むに足らざるを見るあり、請ふ記せよ、一身以て萬民の救助を計らんと云ふ事なり、一國一代の民を塗炭の苦より救治するとは、事大に異り、彼は其双肩に萬國萬代の人民の罪惡を負擔したる者、而して彼れの如何にして此一大事業を行ひたるや否やは、手に福音書を採りて、心に耶蘇基督の受難し死去したる狀況を回想するときは、事明かに知るを得、請ふ先づ注目して耶蘇基督を視よ、次に世界一般の人間を視よ、而して又彼と此とを接比して考一考せよ、人間を一般にして考ふるときは、彼等は己れの四肢五體中一として罪惡を働くが爲めに濫用せざるものなしと云ふ、是故に人間の贖罪的犠牲となりたる耶蘇基督に於ても、上は頭の頂より、下は足の爪先に至るまで、各其格別なる苦痛を感受せざるものは、一支隻体だもなきあり、今茲に其苦痛を感受したる四肢五體を一々數へ擧げざるも、打擲の末十字架に釘せられたる彼れ基督の身体を一瞥せば、事自ら瞭かあらん、次に人間の靈魂に就て考ふるも亦然り、彼等は其靈魂の能力と智識と自由とを問はず、記憶と感情とを論せず、一として之を犯罪の爲め冒用せざるはなかるべし、是を以て耶蘇基督に於ても、各々其特殊の苦腦を覺へざる能力は一も之れなきなり、深く此事を知らんと欲せば、須らく手に福音書を採りて、彼れの苦難の情を一々熟考せよ、人間の方面より視察するときは、凡そ罪として犯さるるものは、彼等之を犯さるるもの一も之なし、是れ即ち耶蘇基督に於て、各自其苦罰を食まざる罪の類一も之れなき所以なりとす、窃盜罪、殺人罪に至るまで、其苦罰を受けたり、何となれば彼は盜賊二人の間に磔せられたればなり、畢竟するに人間に於て、凡て其の肉身其靈魂を以て、罪惡を働くが爲め濫用冒役せら

れたるものは、耶蘇基督に於て悉く其の苦罰を受けて、彼を腦殺せしめたり、是を以て彼れの贖罪的功業は、人間の罪惡に全く比例するを得たるものなり、蓋し耶蘇基督は前段に述べたるが如く、總ての罪人の代りとなりて、世界萬民の罪惡の苦罰を一身に負擔したる者あるが故に、斯の如く弱質を受け、斯の如く屈辱を受け、又た斯の如く苦罰を受けたる所以なり、然らば則ち彼れの受難と死去の酷且大なる事、一見甚だ奇怪千萬の如く思はるれども、殊に自ら稱して神なりと揚言したる彼に於て、斯の如くなるを見るときは、彌々益々福音書の不可思議なるを思惟せらるれども、以上述べたるが如くに考察し來るときは、其奇怪不可思議なる苦死は、却りて神の珍らしき攝理を吾人に示して、其全知全善全能の盛徳明に基督の言動の上に發揮せられたるを知らしむるなり、彼は完全無缺の人間となりて人々の間に立ち、斯の如く感じ、斯の如く働き、斯の如く行ひ、又斯の如く人々の爲に死去して、優に救世主として景仰したる世界萬民の翹望に應ずるを得たり、彼は人の如何にして生し、如何にして苦み、又如何にして死するかを教へ、人の最も憂慮すべき罪惡を自ら代りて贖治し玉ひたり、彼れの斯の如き言動は、全く神の攝理のある所なるとは、豫言書を見ても、福音書を読んでも疑を容る能はざるなり、曰く「彼は吾人の苦腦を己れの上に蒙りたり、」曰く「彼は吾人の罪惡のために齧粉せられたり、」曰く「彼れ自ら好んで犠牲に供せられたり、」又曰く「彼は羔の如く死地に率かれたり、哀訴するがためには、敢て口をも開かざりき云々、」(イザヤ書五十三章參看)、是れ實に彼に付て事跡前後の歴史の記載したる所なり、而して彼れ自らは斯の如き苦死を一生の一大事業の如く豫想したり、準備したり、彼は一回も之を遁れんとを夢想したるとあし、彼れの言に曰く「誰も生命を奪ふ能はず、我自ら之を呈するなり云々、」(ジョン傳十の十八)。

果して以上述るが如しとせば、又復た茲に彼の四人の猶太人が、自國の人民の先入と、他國の人民の思想とに正反對して、空中より斯の如き不可思議なる歴史を帶る耶蘇基督を案出するを得るかと論ずるが如きは、最早無用の言ならん、上來層々開陳したる理由によりて之を観るに、往古今來、彼の耶蘇基督の如く死生したる者は一人もあらず、然るに福音者が耶蘇基督の苦難と死去とに就き、斯の如くに語りたる所以のものは、

全く耶蘇基督が實際斯の如く苦難し、斯の如く死去したるがために外あらざるを知るなり、彼等福音者は唯其聞見したる所を有の儘に言顯したるに過ぎず、何となれば若し基督の歴史にして真ならずんば、斯の如き奇怪千萬なる事柄は、天下一人も之を想出するを得ざればなり、況んや彼の四人の愚漢をや、然り而して若し果して耶蘇基督にして事實福音者の語るが如く苦難死去したりとせば、天下如何なる人にも、苟も正意あり、常識ありて、基督教に反對する先入的思想なくんば、福音書を熟讀玩味して、耶蘇基督の斯の如き苦難死去は、全く彼が人間以上の人物なるを示すと云ふとを識別する能はざる者はなかるべし、既に其識見茲に至れば、自ら稱して神ありと揚言したる基督の、斯く悲惨を極め、斯く卑劣を極めたる死去は、決して没理の所業にもあらず、決して人を駭かしむるの道にもあらず、又決して彼が自餘の歴史を疑はしむるの基にもあらずして、却りて彼れ基督は全く尋常の人物にあらず、神にてありしとの明白顯著なる證據なるを知見するに至るべし、是れ實に理に由りて斯の如し、而して實際に於ては、世界の人々は實に斯の如く識別知見しつゝあり、何と云へば今日基督

の信徒となり居る者は、孰れも皆其初めは神にして磔刑に處せられたる事實の奇怪千萬なるを訝りたれども、よく心思を静めて熟考したるとき、嗚呼是れ實に人間にあらず、神なるに相違なしと認めたる故、遂に之を尊拜するに至りたる者なればなり、即ち世界中の基督教徒なる者は、基督が斯く死したるが爲めに眞誠の神なりと識別し、斯く死したるが爲めに古來翹望せられたる救主なりと知見して、毫も疑はざるに至りたるものなり、是に於て乎基督死後幾許ならずして、彼の注目すべき一大壯語は、果して實行せらるゝに及びぬ、其壯語とは「我れ地上より昇天せば、萬事を収攬せん、」(ジヨアン傳十二の三十二)と云ふ事是なり、語を換へて之を云へば、「我れ十字架に釘せられて後は」と云ふ意味なり、而して事實其十字架が一たびゼルザレム城に屹立せられてより、忽ち世界萬國にも公然屹立せらるゝに及びぬ、勿論傾倒せられ、蹂躪せられたるとも屢々之ありたり、然れども彼は直に再立せられて、始終其勢力を保ちつゝあり、彼の死去を實際に目撃したる人民が、胸を打つて後悔しつゝ、「彼は眞に神の子なりき、」(マテオ傳二十七の五十四)と白狀したる當時より、爾來十字架を觀望

する人々は、皆同一の言を發して、彼を神なりとして尊拜せざる者はなし、耶蘇基督にして若し果して欺騙漢なりせば、斯の如き死去は其名を忘却と恥辱の墓所に葬らしむべきに、左はなくして却て最後の勝利者となりて、基督の爲めに赫々たる光榮の御代を開くに至りたり、然り、實に赫々たる光榮の御代なり、古來の英雄豪傑が企圖する能はざる御代なり、彼等にして若し之を企圖せんには、世界の萬民に嘲笑放棄せらるべきや必せり、何となれば嘗に世界の萬民の尊拜を引きたるのみならず、其愛慕の心をも惹き取りて、億兆の民人をして、彼に不忠ならんよりは、寧ろ辛苦艱難の中に千死萬死せんと欲するに至らしめたる者は、耶蘇基督を除くの外、世界一人も其人あらざればなり、請ふ見よ、死後二千年の今日に至る迄、億兆の人民より愛慕せらるゝと、二千年一日の如くなる者は、彼を除きて果して何處に其人ある、彼は今尙己れの爲めに千死辭せざる信徒を雲霞の如く有せり、昔者豪漢ナポレオンは語つて曰く「吾れ今や歐洲より畏服せられず、今や施すに恩惠の一物もなし、誰れか我が爲めに働くものぞ、誰か我が爲めに戦ふ者ぞ、我功業は今や學生の一問題となるに過ぎず、彼の

セザル、彼のアレキサンデルの功業と同一の非運に遭遇しぬ、今日此の二英雄の朋友何處にか存する、然るに耶蘇基督なる者は果して何者ぞ、彼は其死後一千八百年の今日に至るまで、世界萬民の中に己れの爲めに萬死辭せざる朋友を雲霞の如く有しつゝあり云々」と、是れナポレオンが權勢の絶頂より失墜し、英人の捕虜となりて、寂寥たる「オセアン」の絶島に流竄せられたる當時の感慨的遺言なり、彼は此の絶島に至りて、寂然獨居、空しく過去の光榮を想起して、心中竊に古來の歴史的英雄豪傑を引き來りて、己れと比較しぬ、然れども耶蘇基督に至りては、之を己れに比較することを敢てせずして、其前に甲冑を脱して拜服したり、彼れの爲めには耶蘇基督は人間にあらざりき、此豪漢の精神否奪る其心より見るときは、耶蘇基督の人間の人物にあらざる較明顯著なる證據は、古來彼れ獨り其企謀を成就して、一千八百年後に至るも、猶ほ且世界人類の愛心を收攬しつゝある事實にてありたり、然れども彼は他の英雄豪傑の前に立てば、蕭然敬服するの理なしと思ひ、寧ろ昂然屹立するの權ありと自負したり、何となれば彼は其の心に我は決して古來の英雄豪傑に劣りたる者にあらずと深く信任

したればなり。

福音書にして尋常一様の書籍ならんには、以上列挙したる證據は、其眞實を示すに既に充分なりしなるべし、然れども天下に類なき同書に就ては、未だ以て足れりとする能はざる理由あり、蓋し同書は歴史として論ずるときは、人皆之を事實として敢て區々の異論を挟む者なし、然れども福音書として論ずるときは、如何程明瞭なる證據を列挙するとも、如何程確固なる證據を堆積するとも、良し此の如く明瞭確論せられたる書、古今東西に其比類なしと論及するに至るも、二千年來異論囂々、駁言紛々、今尙攻撃の焦點となりて、其局を結ぶの日何れの時にあるやを知らざるときは、此點に就ては決して證據充分の語を言ふを許さざるなり、同一の書にして斯の如き相違あるは、是れ果して何故ぞ、他なし、或る一大人物の歴史として論ずるときは、其歴史眞なりとするも、偽なりとするも、事毫も吾人の言動に影響する所なし、其一大人物死去したりとするも、其事實は吾人に於て何かあらん、此人物に就て語れる事柄の精確なるも、精確ならざるも、吾人の良心は恐怖憂慮するの理なし、此點に就ては全く冷

熱を感せざるなり、是れ即ち歴史としての同書が、容易く其語る所を人に信せしむるを得る所以なり、然りと雖之を福音書若くは耶穌基督なるもの、歴史として論ずるに至るときは、大に其趣きを異にす、何となれば若し其語る所を眞なりとせんか、耶穌基督は人にあらずと云ふ結論自ら推出せらる、然り、彼は一千八百有餘年前に死去したる人間にはあらずして、全く天主なり、天地の大主として永遠活動する全能の天主なりと云ふとは、自然の斷案結言として見はる、然り而して此斷案結言の前には、人間の本心忽ち攪亂せらるゝなり、如何なる大膽不敵の人間と雖、此斷案結言に對しては、冷熱を感せざる爲を學ぶ能はず、耶穌基督は天主なるや否や、其天主なる事は、福音書明に之を證表して、炳然日星を睹るよりも明白ならしむると雖、其天主にあらずと云ふ事を證明せんが爲めには、千萬の反論、千萬の異議案出せられて、紛々藉々其底止する所を知らず、嗚呼耶穌基督の天主なる事實は、斯の如く悪人の膽を寒からしめ、斯の如く罪人の心を怖れしめて、彼等の一大障害となり居るなり。

福音者の
描寫した

昔者希臘アレキサンドリアの哲學者(否寧ろ講辨家)等は、耶穌基督を一つの權謀家と

基督に
は権謀に
は語の名を
附する能
はざるの
證論

見做し、彼は十二人の弟子と他の同臭一味の徒輩を以て、幸に其權謀を成就する事を得たりと論じたる事ありき、彼等は未だ福音書を讀みたる事もなく、又耶穌基督の人となりを知悉する由もなく、單に彼れ基督の頂上に蝟集したる罵詈訕笑の言を聞て、其一端を推測したる者なるを以て、斯の如き見解を下すも敢て怪むに足るものなかりき、然れども今日福音書を熟讀し、耶穌基督の人となり如何を知悉し得る者よりして論ずるときは、斯の如く權謀家と呼はり、欺騙家と嘗る所の曲解惡言は、決して成立するを得ざるなり、何となれば權謀家欺騙漢とは畢竟するに果して何者ぞ、自己をして事實然らざるを然りと人に思惟せしむる者はなり、彼は此目的を以て人を欺かんが爲めに、あらゆる手段を使用す、彼が自己に就て語る所の神妙不可思議なる事柄は、往々自己の外誰れも目撃したる事なきものなり、彼も亦之れを證明せんが爲め、自己の言の外他に證據を擧ぐる能はず、彼れの言ふ所は常に出來せず、彼れの約する所は彼れ之を保せず、彼れの豫言する所は往々成就せられず、彼れの目指する所は單に自己の名譽と一身の私欲との上にあるを以て、彼れ何を語るも、何を働くも、總て皆之れを己れ

の名利に歸せんとを務む、而して幸にして其己れの企圖する所の目的に達するを得るときは、己れを信用したる者を嘲笑しつゝ、其博したる所の利益を一身に收めて、驕然遁走す、否らずんば權威を逞ふして、傲然其欺かれたる人民を制御す、嗚呼是れ實に世の所謂權謀家欺騙漢の真相本色なり、大なる者としても、小なる者としても、其言動する所往々皆斯の如し、而して世間には此類の人間充塞しつゝあり、我が耶穌基督には果して此類の人間に類したる點のあるや否や、否々事皆之に反す、試に思へ、其言論は如何に高尚悠遠の智能を表明すと雖、又之と同時に諄朴眞率にして、宛かも小兒の言の如く然り、故に賢者も以て之を味ふべく、兒童も以て之を解するを得べし、其行動は如何に神妙不可思議なりとするも、彼は決して之を冥々人知らざる地に行ひたるとなし、單だ彼れの現在身を置きたる所、即ち市街、山野、海上等に於てせり、往々は雲霞の如き群衆の前に公然之を行ひたり、三人の弟子を率ゐて竊に之を行ひたるは、福音書中唯だ三回を記するのみ、他は皆衆人稠坐の前に於てせり、且彼れの行ひたる事は、空前絶後の大奇跡なりとするも、彼は之を以て誇りたるとなし、然り誇示せんが爲に之を語りたる

ことは、一回もなし、蓋し誇示なるものは人心の弱點より出づる事なれば、彼れの一生中此事のあるべき筈なし、彼が誇稱的感情より如何程遠かり居たるかは、彼が出来得る丈け己れの行ひたる奇蹟を隠蔽せんとを務め、且屢々人に之を語るとを禁じたるを見て知るべきなり、事既に然り、況んや己れの地位名聲を高めんが爲めに、事を行はんとしたるが如きは、其一生の事業中一も之なし、彼は余の前記せる權謀家欺騙漢と全く反對に出で、他人の利害のみを顧みて、自己一身の得喪は更に之を心頭に浮べたるとなし、彼が屢々行ひたる偉大なる奇蹟も、人を慰め、民を助くるの外、他に目的ありたるにわらず、彼自らを誇示し、自らを尊敬せしめ、自らを感驚せしむるが爲めには、恐くは一指だも動したるとなげん、天地萬物を支配せる彼ながらも、自己の爲めには實に一草一木をも動したるとなきなり、嗚呼斯の如き者を指して、果して權謀家欺騙漢と稱するを得るや、欺騙漢にして己れの欺かんと欲する人々に對し、「我は爾等の生命を有するが爲め、優に之を有するが爲め、に來りぬ、」(ジョアン傳十の十)と云ひ、「人が其愛を示さんとする一大證據は、友の爲めに其生命を擲つに在り、」(同十五の

十三)と云ひ、「我は善牧者なり、善牧者は其生命を群羊の爲めに放棄す云々、」(同十の十一)と語る者世果して之あるや、而して彼は言語を以て言顯したる所を、行爲を以て悉く遂行したる事は、人の皆稔知する所なり、彼は其救はんと欲したる人間の爲めに、果して其生命を犠牲に供したり、欺騙漢にして人の爲めに生命を棄る者天下に之あるや、余は再言す、人を欺かんと欲して、其人の爲めに磔上に死せんとを豫想希望し、此目的の爲めに準備し、遂に此目的を遂行して、果して磔上に死し、又其磔上に死せんとする際にも、其己れを殺害する劊吏の爲めに祈りたり、斯の如き者果して欺騙漢と稱するを得べきや否や、記して茲に到れば、耶蘇基督の言動と權謀家欺騙漢等の言動とは、全く正反對にして、其彼を稱するに後者の惡名を以てするが如きは、極めて無理なる愚言、極めて無實なる告訴なりと謂はざるべからざるなり。

然らば則ち惡意の見解を下し、狹隘なる利己心の點より、彼れの言動を觀察して、彼れ畢竟狂愚の人間なりと斷言せんか、然れども此斷言の不當なる事は呶々するを要せず、又彼れの言動の狂愚と見らるゝは、正しく大見高德の存する所なる事も、長さ

福音者の
描寫した
る基督に
は狂愚に
善の名を
附する能
はざる論
證

反省熟察を費さずして知るを得らるゝなり、吾人は彼れの言動を一見して之を狂愚の沙汰と言ふ、然れども是れ其言動の高遠なる思想を有せざるに坐するのみ、今他の方より、基督の示したる高崇遠大なる智能の證據を、福音書に就て考察するに、彼れに對する狂愚の斷言は、權謀欺騙の惡評と同じく共に成立するを得ざるを見るに足るなり、是故に現今の無神論者は、疾く茲に見るありて、最早彼に對し狂愚欺騙の惡評は下さず、時代の經過するに伴れ、事の真相の愈々發揮せらるゝに従つて、彼等は頗る正理に近き論評を下すに及びぬ、少なくとも古昔の誦辨家の吐きたる如き失敬千萬なる酷評は下さるゝに到りぬ、何となれば彼等は耶蘇基督を以て寧ろ道德家と看做せり、智能高遠、氣象絶美、開闢以來の聖人、振古以還の賢者、世界の一大啓導者、人類の一大公恩者とまで稱するに至りたればなり、尙ほ其上に公言して、彼れの降生、彼れの言動は、最近世紀に至るまで道德上に、社會上に、一大改新と一大進歩とを來したる較著顯明なる現象なりと斷ずるに及び、然りと雖彼等は一方に於て斯くまで稱揚しつゝも、彼を以て神なり、天主なりとは、決して言はず、神なりと云ひたるは、其

弟子の想像なりと唱道す、其弟子は基督の天主なるを信せしめんが爲めに、有りゆる妙らしき奇跡を案出して、福音書中に之を記入したりと云ふ、現今基督教を尊崇すと公言し、耶蘇基督を慕仰すと揚言せる或一部の論者の論評、實に斯の如し、然れども彼等は福音書なる者の分別せられざる性質を帶ぶるを知らざるなり、福音書は完備の一書なり、其中の教理と道德の部分は、感驚するが故に採用し、奇跡と神妙不可思議の事業は、放棄せんを欲するが故に事實出來得べからずと斷言して、彼此を二分せんとするが如きは、到底爲し得べからざる事なり、蓋し耶蘇基督は往々教理を教へながら奇跡を行ひ、奇跡を行ひながら其心の全善なると其靈魂の偉大なるを示したる者なればなり、福音書なるものは一半は哲學に供せられ、一半は歴史に供せらるゝが如き、半身不隨の跛書にはあらず、故に現今の論者の如く、哲學に關する一頁は採用すべく、歴史に關する一頁は放棄すべしと云ふが如き、人心の適否によりて取捨せらるべきものにはあらざるなり、同書は語れる基督、行へる基督の活きたる畫面なり、故に是非とも其凡てを採らざるべからず、否らずんば、其凡てを捨てざるべからず、二分して

一を採り、一を捨つるが如き事は、決して爲し得べからざるものなり、然り而して人は記憶するなるべし、耶蘇基督は自から稱して神なり、神の子なりと公言したる事を、又番に之を公言したるのみならず、到る處に之を證據せんことを務めたる事を、自己の行ひたる事業に就ては、一回も誇稱したる事なきにも係はらず、此の點に就ては同國の人民に深く信認せしめんが爲め、其己れが行ひたる事跡を追想回思せしめたる事蓋し一にして足らざるなり、曰く「我爾等に眞理を語る、爾等何故我を信せざるや、」(ヨアン傳八の四十六)、「若爾等我が言を信せずんば、我が業を是れ信せよ、我に就て證明する者は實に此業なりと、」(同十の三十九)、彼は確に自ら稱して神なり、神の子なりと揚言せり、去ればにや同國の民も此言を口實として彼を死刑に處したるなれ、彼は既に捕はれて敵の手に渡され、裁判官の前に引致されて、死刑の宣告早や既に其頭上に落ち來らんとせるときに當りても、爾果して神の子なりやと云ふ詰問に對して、斷然遲疑なく、忌憚なく、「然り、我は實に神の子なり、」(マテオ傳二十六の六十三)と明答したり、彼は尙ほ詞を重ねて、「爾等果して人の子(己れを指して言ふ)天の雲に

乗じ、大なる權能と大なる威嚴とを以て、再び世に降來するを見ん云々、」(同章六十四)と語りたり、彼は既に十字架に釘せられて、玉の緒の絶なんとする刻まで、此の驚くべき揚言を確證したり、何となれば彼れの最後の叫びは、實に「我が父よ、吾今我が靈魂を御身の手中に呈す、」(ルカ傳二十三の四十六)の言にてありたればなり、事實此の如し、然るを尙ほ彼をして神にあらすとせば、畢竟果して何者とすべき、狂者なりとは誰も斷言せざるべし、然らば果して何者ぞ、道德鄙く、才能秀で、眞理の其口より出づるは、水の泉源より湧出し、光の火邊に炳耀せるが如き彼を指して、神にあらすとせば、果して之れに附するに如何なる名稱を以てすべき、彼は人を教へんが爲めに降來し、而して其之を教ゆるの明截なる、「我は眞理なり、」(ヨアン傳十四の六)と自稱するも、人之を傲慢なりと訴ふる能はざる程なりき、要するに彼れの此世に降來したる天職は、人に教ゆるに神にあらざる事物、即ち天地、山川、日月星辰、若くは人間の影像等を拜せずして、天地を造成し、萬物を主宰せる獨一無二の眞神を拜せしめんと目的にてありたり、其天職の存する目的實に此の如し、然るを猶且つ神に

めらずとせば、世界中の偶像を破却するが爲めに降來したる彼は、然り、實際其教の弘布せられたる地到る處に、果して偶像を破却したる彼は、僞神の代りに自己を神と拜せしめ、他を排して己れを立て、從來の偶像の教より尙一層奇怪なる偶像教を創始せんとしたる者と云ふべきか、彼は獨一無二の眞神を拜すべしと教へたり、而して彼は「我父と我は一體なり、」(シヨアン傳十の二十)と云ひたるを見るときは、彼は漫りに神の權を僭して、自ら神にならんとの野心を企てたる者と云ふべきか、一以て萬を蔽はんに、彼れ若し果して神にあらずとせば、全く虚言者ウツクキと言はんのみ、然るときは同一の彼に於て、奇怪千萬の反對相合するを見るなり、何となれば彼は萬民の公言と實際の事跡とによりて、開闢以來の尊重なる者なると同時に、開闢以來の卑賤なる者、空前絶後の高尚なる靈魂なると同時に、空前絶後の下賤なる靈魂、歴史ありて以來の大聖人なると同時に、歴史ありて以來の大惡人、皎々として天下ニツなき眞理なると同時に、變幻鬼没、天下に比類なき術數者なりと謂はざるべからざればなり、之を要するに現今の譎辨學者は、耶蘇基督に尊拜を呈すると云ふ口實の下に、古昔の哲學者の公言

したる所を繰返し、其實矢張り彼を欺騙漢と稱するに外ならざるなり、要するに彼等は基督を僞善者なりと思考す、而して其所謂僞善者も、最も惡むべく耻づべき僞善者なりとす、何となれば彼等の意のある所を推究して云はんに、耶蘇基督は尋常の僞善者の爲の如く、單に道德者なりと見られんことを欲したるに非ずして、古來一人も爲さざる所を爲して、己れを萬有の上に位する神と見られんことを欲したる者なればなり、嗚呼現今の學者、耶蘇基督の尊拜を裝ふて、此の如く之を凌辱し、此の如く之を冒瀆す、己れ自ら譎辨家、欺騙漢、僞善者にあらずして何ぞ、彼等の所爲は、古昔の學者より一層正理に反背悖戻す、耶蘇基督の神秘に對する僞善欺騙等の見解は、福音の公明正大なる光りの前には、永く成立するを得ざるなり、彼等の僞善的見解、欺騙的難問は、如何に續々湧出せるも、如何に層々累積せるも、畢竟日光の前の雲霧のみ、日光は雲霧の上に依然其歩を運びつゝあり、彼等の雲霧の消散するや、基督の日光は忽ち赫然炳射し、彼等は如何に基督の身邊に雲集霧合して、其眞光を隱蔽せんと欲するも、眞理の光なる基督に於て亦何かあらん、一代毎に此の如き學者湧起す、而して

一代毎に彼等煙滅す、毎世紀斯の如き辨論紛出す、而して毎世紀寂然其聲息を絶つ、獨り萬古の眞理なる我基督のみは、超然彼等の上に高擧して、永遠に不朽たり、彼は人間の手腕も之を攻撃する能はず、人間の智識も亦之に接觸する能はず、安然天上に於て平隱の御代を支配しつゝ、永久悠遠に繼續す、「上主の眞理永遠に存す」と、善哉言や。

吾人の列擧し來れる證據は、積んで堆を成すと雖、耶蘇基督の二個の歴史は、其降來の前後に炳然として、日星の如く輝くと雖、又預言と福音の符合は、到底常理を以て解釋すべからざる程なりと雖、人間の傲慢は、尙ほ耶蘇基督の神なりと云ふ結言を採用するを肯せざるなり、神が人となりて世に降生し、余りに近く、余りに密に吾人々類に接近したるが爲め、吾人は之を見て太く恐怖の念に打たれたる者の如し、蓋し人間の神を恐怖する、其理一にして足らず、其原因するや遠し、人類墮落の當時、吾人の元祖は、早や既に神前を避くるが爲めに、疾に其身を隠したるとあり、後代の子孫なる人類も、亦其元祖に類し、神の尊前に出ると堪ゆる能はざる者の如し、夫れ神と

福音者の
描寫した
る基督に
神の無限
顯はるゝ
證論

人、無限と虚無との間には、測度すべからざる運庭あるものなり、されば神が世に降り、其廣大無邊の尊體を窺して、卑賤極微なる一小人間となり、萬能の力は嬰兒の弱質を取り、無上の威稜は工匠の委容を假り、性來の聖、本來の義は、罪惡に對する屈辱を蒙り、奴隸を處する極刑を甘んじ、一言を以て之を蔽はんに、永遠不朽の天主が、一時の世界に降誕して、人間の如く死したりと云ふ事實を見るとは、反對は反對と相合し、極端は極端と相接し、吾人人類の常理を以て、到底之を測知す可からざるが故に、茲に初めて一驚を喫し、異様の念に打たれ、遂に神の人となりたりと云ふ事實を承認するに堪へられざるに至りたるものなり、神と人、極端と極端との相接近せる事は、吾人の頭腦を攪乱したり、吾人の理論を轉覆したり、吾人今赫々たる日光に面するに、吾人の肉眼は其光りに打たれて眩惑し、到底眼を開く能はず、到底光りを忍ぶ能はず、見る所は唯だ混亂と暗影のみ、吾人の智識の神前に對する、亦實に此の如き歎、宜なる哉吾人々類の基督の神なる眞理を認むる事能はざるや、然れども肉眼は一時太陽の光に眩するも、後再び故に復し、遂に他の方道手段を假りて、太陽の光りを見ん

とを務む、而して又實に之を眺むるに眩暈せられざる道あるなり、吾人の智眼も一たびは神の人となりたる真光に面して眩惑するも、熟考潜思の上之を觀望するの道なくんばならず、唯々然り、吾人之を觀望して、撞突せられず、却て快味を感ずる所の一面あり、此一面は神が極小極微の極端に下降したる事是れなるを以て、一見神と云ふ高崇尊大の思想に合はざるが如くに思料せらるれども、心を静め思を潜めて深く之を考察するときは、此事却りて神の偉大なる思想に善く吻合するを認むるなり、請ふ余をして之を詳論せしめよ。

試に先づ問ふ、神は何故此世界に下降したるや、神の此下降は勿論吾人の傲慢心に背反す、然れども茲に一の拒否すべからざる事實あり、他莫し、罪惡貫盈、禍害充塞の事實是なり、罪惡は其源、禍害は其因なり、然り而して神の此世に下降したる所以は、正しく此罪惡、此禍害に腦殺せらるゝ吾人々類に對する憫情愛心に在るものなり、一言以て之を云へば、神の大御心即ち是れ其降生の眞理由にして、又其之に隨伴し來れる凡ての玄義の眞理由なり、勿論吾人今耶蘇基督の身を以て行はれたる神の所爲を

考察するに、世間一般人民の行動する緣由を標準として論ずるときは、必ずや之を了解することを得ざるべし、何となれば世人一般の行動奔走する所以は、一身の名利にあるものなり、若し自己の身に利益もなく、名譽もなきときは、一擧手一投足の勞をも取らざるなり、彼れの手を動すは、金錢之を使ひ、彼れのを動すは、評判之を促す、總て皆此の如し、金錢にもならず、評判にもならざるときは、一指だも動さず、蓋し又彼に取りて動す理由なければなり、神に取りては然らず、彼れ人間の爲に降る、彼れ人間の爲めに死する、果して何の利、何の譽か之ある、彼は人間に要する所、一物もなき者なり、彼れ却りて凡ての物を人間に與ふる位地に立つ者なり、是に由りて之を觀るときは、耶蘇基督にして若し果して神にあらざとせば、其行動は狂愚の沙汰と云ふより外に思はれざるべし、何となれば其行動する理由毫も之なければなり、然れども此は是れ狭小なる利己心に左右せらるゝ凡人の見を以て論ずるとなり、縱令澆季の今日世は私利を以て公法の如くに言做すと雖、數多き人民の中には、猶且私利の爲のみならずして、國家の公益の爲めに行動する者鮮からず、其心の高崇雄大なると

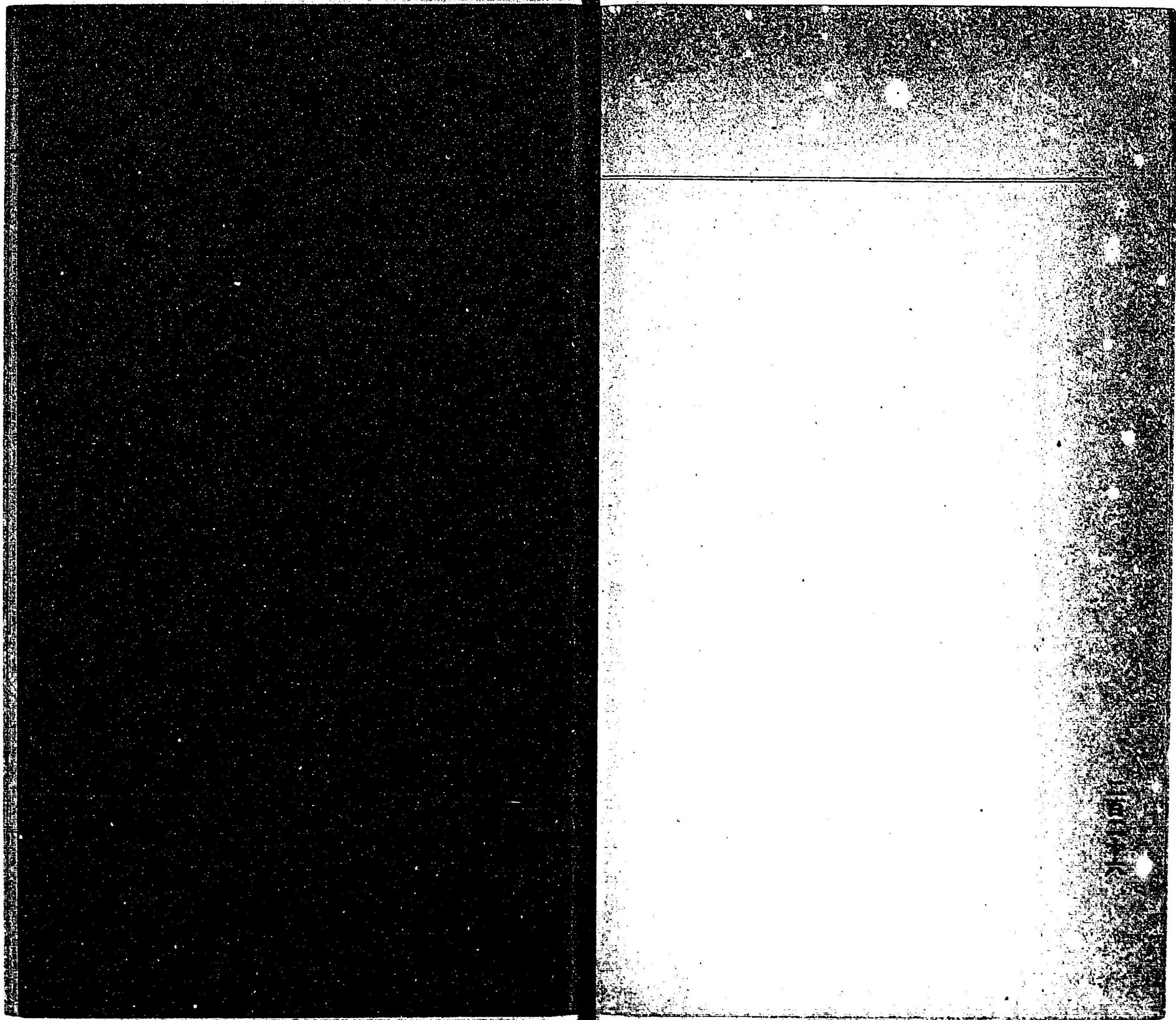
亦實に茲に基くなり、心の狭小卑賤なる者は、事皆一身の私利の爲めに吸集して、他人の爲めには一錢を投ずるとだも爲さず、而して彼は尊大ならんが爲め、高貴ならんが爲めにも、斯く萬事を一身に吸集せざるべからずと思考す、然れども眞個に高崇雄大なる者の心は、毫も此外物の要求をなさず、事有らば、有るを以て満足し、無んば、無きを以て亦満足す、彼は取らんよりは、寧ろ捐てんと欲す、受けんよりは、寧ろ與へんとを望む、一朝緩急あるときは、己れの生命をも與へて惜まず、一言を以て之を云へば、己れの樂む善を他人にも樂ましめんとを以て樂みとす、古哲の金言に曰く、「善は本來分給の性を帶ふ」と、勿論世間には此心を以て心となす者は、甚だ僅小にして晨星雷ならざるなり、否皆無と云ふも誣言にあらざるなり、是を以て人々は全然私利の分子を離脱したる渾身凡て是れ善なる者に對しては、其存在をも信する能はざるなり、又是を以て人の偶々寛大の心、慈善の心を以て、捐投棄捨する者あるときも、彼等は必ず其人の私利ありてのとならんと推測す、而して其推測は不幸にして往々事實に當るなり、此の如く利己心は凡ての人の胸中に蟠屈す、然れども若し眞個に義俠

寛大の心を以て行動惠施する者ありて、一點利己の心なきを公明正大に證する者あるを見るときは、彼等は余りの喫驚に打たれて、喫驚を拂はざるに至る、何となれば彼等の爲めには此人は人間にあらず、人間以上の人間と思はるればなり、是に於てか義士の稱出で、人傑の名起り、其國又遂に之が爲めに石標を建て、寺社を設くるに至る、若し夫れ極微極小にして狹隘なる範圍の中に息する人間にありながら、猶且斯の如き義俠寛大の心ある者ありとせば、況んや此の慈善寛大の心を人に賦與したる神其者に於てをや、人をして斯くせしめたる者、己れ斯くならずと云ふを得るや、必ずや其慈善寛大の聖徳、神に相應するものあらん、即ち其聖徳限りなく、窮りなかるべし、然り而して神は此の無限無窮の聖徳を如何なる標示、如何なる事實を以て發表揮推するを得たりとなす、人間に在りて其慈善の事業の極點は、替言せば、其仁愛の究極する所は、其愛する人々の爲めに、自己の生命を犠牲に供して、出來得る丈け己れを虛無塵埃に歸せんとするにあるべし、然り、人は焉より上に至る能はず、焉より外に爲す能はず、他人の幸福の爲めに自己の心命を賭す、是れ實に其大仁大義の絶頂なりとす、

神に於ても亦之と同じき仁愛の情は、其被造の人民に對して行はる、神も同じく已れを忘れ、同じく已れを犠牲に供すべかりしなり、神の人間に對する仁愛は、神をして出來得る丈け虚無に近き人骸を受けしめて、自らを虚無に歸せしめんとすべかりしなり、而して此事實際に出來したり、事實の上に行はれたり、其偉能、其權勢、其尊榮は、一小微弱なる嬰兒の形影中に埋没したり、神は實に貧困なる工匠となりたり、人間中の極卑極賤なる者となりたり、其義、其聖までも侮蔑せられて、惡逆と混同せらるゝに至りぬ、何となれば公街に大盜と共に、十字架に並釘せらるゝに至り、彼のバラツバの如き謀反の巨魁も、基督よりも恩典に浴するを得たればなり、人若し斯の如き卑賤微小の極端に於て、如何にして眞誠の神を認むるを得るやと云はゞ、余は答て云はん、宛かも世界の美觀に於て認めらるゝが如く認むるを得と、今夫れ吾人にして天の大觀を仰望し、思想を廻らして茫々たる空間を測度せんときは、吾人の精神は其廣大無邊なるに驚動して、一大至重の盤石の下に壓屈せらるゝが如き感をなす、隨て自然頭を垂れて神の威能を拜し、造りたる物にして既に此の如し、之が造主たる

者果して如何と云ふ嘆聲を發するに至る、蓋し天は其光榮を歌ふ云々と云ふが如く、神の限りなき威能は、其手腕の作物によりて、吾人に發揮せられ、見ゆる宇宙の造出主宰等によりて、吾人に啓示せらるゝを以てなり、神が無上至尊の玉體を棄して、卑賤狭小なる人骸を受けたる前に咫尺して之を觀望するときは、吾人の精神は又々喫驚の念に打たれて、一大重味に壓せらるゝが如き感あるなり、然れども此に在りては、彼に於けるが如くにあらず、彼に於ては神の全能、此に在りては神の全善、吾人を感驚せしむ、彼此の間に全能と全善の區別はあれども、其全善の吾人に發揮せられたる道は、其全能の吾人に發揮せられたる道と、吾人の感動を惹起するに於て、毫も異なるなし、何となれば神の假借したる人骸、神の被服したる身分は、神が其尊體を低屈し得る最極度なり、焉より以下には神と雖下降し得ざるなり、然りと雖吾人は斯る極卑極下の身分を見ても、廣大無邊なる天地の美觀を望むが如くに、頭を垂れて拜伏せざるを得ざるなり、蓋し前者に在りても後者に在りても、神の無限は均しく發揮せられ居ればなり、嬰兒の中にも、天地の間にも、神の無限は均しく認めらるればなり、一

方に在りては威稜能力の無限なり、他の一方に在りては仁愛慈善の無限なり、後者の吾人の智識に測度すべからざるは、前者に於けると異なる事なし、然れども後者の信認せられざるにわらざるは、又前者の信認せられざるにわらざると均し、何となれば是れ唯だ同一なる神の異様なる觀望に外ならざればなり、此同一なる神の全善と全能には大小優劣の差別なし、彼此均しく無限なり、是故に如何にして神が人となるを得たるやは、吾人知了するに由なしと雖、一たび神が其全善によりて人となりたるを知認するを得るときは、其極端の下降は、感嘆の聲をこぞ發せしむるなれ、怪訝の念は起さしめざるなり、何となれば正しく無限の愛に適する下降なればなり、斯の如くにして吾人は、遂に其の故意の下降の、廣大無邊なる神に不當不合ならず、却て焉より神の聖徳に應當適合せるものわらじと了解するに至るなり、神は開闢の當時、天地萬物を虛無より造出しぬ、降生の當時には己を虛無に歸しぬ、虛無より造出したる事業は、全能の固有の事業なり、虛無に歸したるの事業は、全善の固有の事業なりと謂ふべし、斯く觀察して論ずる時は、其降生を見るも、吾人の知能は毫も傾倒轉覆せられず、寧ろ却て慰勞安撫せられて、無限の快味を感じ、無上の満足を覺ゆ、蓋し此一大不可思議なる偉業を全く知了する事は得ざれども、神が斯く全善の舞理によりて下降したるは、決して卑賤の下降、陋劣の下降にはわらずして、全く神の神たる所以を證明發揮する一大高崇の下降なるを推知するとを得ればなり、是に於て乎吾人は感驚に打たれ、畏敬に打たれて、其下降の愈々益々低きに伴はれて、吾人の拜伏愈々益々深さを加ふるに至るなり。



事蹟以前以後之歴史

結論

世の無神論者が傲慢の一念に驅られて、福音書を眞實の歴史として採用せざる口實、他に亦之あり、何ぞや、基督の言論の中には、如何なる碩學鴻儒と雖得て領會すべからざる教訓ありと云ふ事、又其行爲の中には、如何なる聖人賢哲と雖得て行ふ能はざる事業ありと云ふ事即是なり、彼等は是を以て斷言す、曰く、斯の如き教訓にして眞誠なる事、斯の如き事業にして事實なる事は、到底信する能はず云々と、別言せば、彼等は傲然として「我は博覽強記の一人物、然れども斯の如き教訓は得て了解する能はず、蓋し人知の道理を挫屈するに非ずんば、信するを得ざるべければなり、夫れ我は一個の賢哲なり、物理學者なり、化學者なり、醫學者なり、然れども我才能技量を以ては、決して斯の如き事業を企つる能はず、蓋し斯の如き事業は未だ曾て聞見したる例なければなり、是故に斯の如き言動を採用せしめんが爲めには、縱令世界の輿論が

之を斷言すとも、我は決して之を承認する能はず云々」と高言壯語するが如く聞ゆるなり、之を要するに基督の教訓の中には、機密なるものあり、其行動の中には、奇蹟なるものあり、而して此二事は福音書の記して以て吾人に信用せしめんとする所、故に我は是に由りて同書の眞實ならざるを喝破すと云ふに在り、機密と奇蹟、嗚呼是れ實に我基督公教に向て日々投げつけらるゝ二個の大疑問、其實は我基督公教を排斥せんが爲に毎々提出せらるゝ二個の常例口實なりと謂ふべし、余は此二個の口實的詰問につき、日星瞭然たる明答を與へんと欲す、因て左に機密と奇蹟の二事果して福音書の眞實、隨て我基督公教の眞理を疑はしむる理由なるや否やを詳論細説せんと欲す。

第一 機密

機密とは何ぞや、人の領會するを得ざる不可思議の事是なり、皮想の見を以て之を見るときは、己れの領會するを得ざる事を信仰するは、如何にも道理に背戻するが如く思はる、然れども事實に於て果して然るや否や、博學多才の人と雖、果して己れの領會せざる事を信用し居らざるや否や、尙一步を進めて問ふ、己れの領會せざる所の多

くの事物を信用せざる時は、果して人間今日此世に生活し行くを得るや否や、蓋し余は事實の全く之に反對なるを認めればなり、之を證明するは決して難きにあらず、惟ふに知らずして信するは、人知を放棄するなりと唱道する論者は、未だ嘗て日常自己の聞見し使用する所の事物の中には、之が性質を定義し得るもの一も之なきことを省慮したるとなかるべし、請ふ先づ自身の存在を省慮せよ、彼等果して之を領會明知するを得るや否や、然れども彼等は其領會明知する能はざるものを日々信用使用しつゝ、毫も道理を放棄すとは思考せざるなり、然らば則ち彼等それ自身も、知らずして信する事(所謂機密)は、決して道理に背反せざるを證しつゝあるなり、抑々事は設令自己の知力を以て領會するを得ざるも、人の信用するが如く果して斯く存在すと云ふ事確定したる以上は、之を信するも決して道理に背反すとは謂はれざるなり、請ふ余をして機密の二字に明裁の定義を下さしめ、且之に就き數者の例證を列舉せしめて、以上の言論の決して誣ならざるを明證せしめよ。

余は再二茲に同一の問を提出す、機密とは何ぞや、哲學は之を定義して曰く、二者の

思想を個々別々に思考するとき、吾人の知識は明瞭に之を領會するを得れども、二者を相接合して觀察するときは、其如何にして兩々相接合し居るやを知了するを得ざる事是なりと、要するに二個の事物は個々別々にして明瞭、其相接して一事一物を形成するに至つて、初めて人知の窺ふを容さざる點を出すに及ぶ、而して機密なるものは正しく此點に存するなり、簡言せば、二個の明瞭なる事物を接合近配せしむる不思議の結目即是なり、例へば

人間の機密

茲に生動せる人間あり、萬目皆其人間の中に二個の物あるを目撃す、曰く肉身、曰く靈魂、人間の靈魂の性質に就ては、古來如何なる諸說學者の間に唱道せらるゝも、此紛々藉々たる諸說の中にも、萬口均しく一致する明瞭の點あり、即ち靈魂は生命の本源なる事、又人間の生死は此靈魂を有すると失ふとに在る事、是れ皆人の熟知する所なり、蓋し靈魂肉身の如く知れ易きものはなし、靈肉の二字は、吾人日常口にする所なり、(靈魂の存在を否定する論者と雖、生命の存在は否定するを得ず、何となれば肉身を生動せしむるものは、日常之を眼前に目撃し居ればなり)、然り、靈肉の二物は人

皆之を知る、然れども靈魂が如何にして肉軀に配合しあるや、如何にして肉軀の全體を活動せしめ、如何にして四支五體、一指一足に至るまで自由自在に之を運用せしむるを得るや否やに及んでは、人得て之を解説する者なし、試に生動せる肉軀を看よ、如何に活潑輕快なるや、之に反して死者の肉軀を視よ、如何に頑冥不覺なるや、而して是等の事は人皆之を知る、蓋し焉より睹易きものなければなり、然れども轉じて靈魂の肉身に接する點、肉身の靈魂に合する道を考へよ、誰か能く之を知る者ぞ、嗚呼是れ實に人知に隠れたる所、而して人間の機密なるものは正しく此點に存す、然りと雖此機密は人皆之を信ず、蓋し人皆此機密を以て生動すればなり、此機密よりも吾人の身に接近するものはなし、蓋し吾人々間の内部に行はれつゝあればなり、嗚呼吾人は吾人の機密を領會せずして、而かも猶且之を信じつゝある事此の如し、不思議なる結目は解くを得ず、然れども其結目の存するは人誰か之を拒否するを得ん哉。

動物の機密

禽獸草木の生命に至りても亦此の如く思議すべからざる機密存す、然れども其外部を一見するとき、此二物より明なるものはあらず、何となれば禽獸草木につき、其生

育するものと生育せざるものとの區別は、人皆直に之を看取し、三尺の童子と雖亦能く之を知了するを得ればなり、生命ある草木は養成し、生育し、發花し、結實す、然れども一朝生命の之を去るに當りてや、忽ち枯稿し、萎凋し、乾落し、朽頽す、夫れ生命と草木とは、吾人の明に看取識別するを得る二物なり、吾人は此二物の精確なる思想を有す、然りと雖此二物如何にして相接合し居るや否やに至りては、吾人得て之を知る能はず、是れ暗所なり、結目なり、而して草木の機密なるものは此點に存す。礦物の凝結に至りても亦不可思議の結目なくんばならず、試に一の石塊を取りて考察せよ、吾人の明かに知了する所のものは、此石塊が幾多の分子の結合より組織せらるゝ事と、又此幾多の分子が密接に相結合して、殆ど一物一塊の如くに見ゆと云ふ事是なり、然れども借問す、斯く密接に相結合せしむる所の力は果して如何なるものぞ、近代の科學は此方を指示するが爲めに一の新熟語を發明す、曰く分子間の引アットラクション力なるものは是なりと、然りと雖も人若し此熟字を以て解釋を含有せりと思ふは大なる誤なり、此二字は何をも解釋せず、單だ一物の千萬無量なる分子が、相共に引結せられて、吾

礦物の機
密

人の眼前に現れつゝあるを示すのみ、されど斯かる千萬無量の分子は如何なる力によりて引結せらるゝか、引力其物ありと云はゞ、其所謂引力なるものゝ性質は果して如何と云ふに至りては、科學は黙々たり、今又之を反對にして考ふるに、此千萬無量の分子を温むるときは、漸次分離し、流融し、飛散するに至る、而して何故に斯く分離し流融し飛散するに至るやと云ふに、吾人は得て之を知る能はず、科學も亦之が満足の答をなす能はず、嗚呼二個の物質相結合する所と、其相融離する事とは、亦是れ一の機密とせざるべからず、勿論二百年以來、尊崇すべき學者世に出で、種々の發明をなして、昔人の未だ嘗て知らざりし多くの事物の原因を解釋するに至りたるは事實なり、例へば雷電、颶風、及び泉水中絶の原因等是なり、然れども爲に凡てを解釋し去りたりと謂ふべきや、否、有機無機の事物日に月に知了せらるゝに至るも、機密は決して減少せず、依然機密として繼續す、世の進歩は決して機密を無に歸する能はず、其容を變換すると或は之あらん、其換りを立つる事或は之を能くせん、然れども機密を解釋し去ると、機密を機密にあらずとするまで進歩するとは、斷じて之なかるべし、

吾人の見を以てせば、世の進歩は却りて機密をして一層深からしめ、一層遠からしめたりと謂はざるべからず、吾人は嘗て凡ての事物を解釋するに四元素(土風水火)、若くは五元素(水火木金土)の説を以てしたり、今日に至りては六十有餘の元素を以てするに至りぬ、近代の科學は勿論昔人の學說より進歩したるに相違なし、彼は此より尙一層造詣したるや明なり、然れども物質の組織は爲に一層領會知了せらるゝに至れりと云ふを得べきや否や、無論物質の組織は古今其道を異にしたるが如く見做されたり、機密の如き亦隨て其處を代ふるに至りたりと謂ふべし、然りと雖も元素を結合する所の力、物質の特性をして斯く異様ならしむる所の力に至りては、今人に於けるも古人に於けると同じく未だ解釋せられざるなり、將來又永く解釋せられざるべし、人知如何に發開し、學術如何に進歩すと雖、事物の最後の理由は深遠にして捕捉すべからず、自然として愈々益々遠退高飛するが如く然り、是に於て乎一大知識の有名なる格言出づ、曰く

「人知の最も高遠深遠なるものと雖、一の石塊に對戰しては、一敗挫屈せざるべからざらん云々、」(蓋し如何なる哲士と雖、一個の石塊の性質をも知る能はざればなり、哲學者の髓腦は一の石塊に當つて摧くと云ふ、亦此意なり。)

其れ此の如し、半熟學者、若くは昨初めて學問世界に入門したる者、若くは眼光豆よりも小にして、事物の皮想のみを目撃して、其内部に徹底する能はざる學者輩は、往々自己の才學に誇りて、傲然一世を睥睨し、心中竊に萬事を解釋して、百般の理由を知悉するが如く自負すと雖、眞誠の學者、然り、萬事を徹底したる老練の學者は、全く之に反し、謹慎にして且極めて謙遜なる者なり、蓋し造詣愈々深く、事物の理を究むると益々高遠なるに従つて、機密と云ふ不可思議の城塞に衝突すると愈々益々頻繁なるを以てなり、是を以て眞誠なる學者は學術進歩の今日に於ても、猶ほ彼のソクラトの時代に於けるが如く、往々自ら謙遜して曰く

「我は一事を知る、毫も知る所なしと云ふ事はなり。」

今又歩を進めて、機密を機密其物より、若くは吾人の知了する方道より觀察して、一般に之を論究せんに、先づ機密に三個の區別ありと謂はざるべからず、曰く凡ての人

々の眼前に日々目撃せらるゝ機密、即ち是れ人間ありてより以來今日に至るまで、絶へず繼續し來れるものなり、曰く或は古代或は近代、所謂或年代に於て發明せられたる機密、今日單に之を學問上の發見と言ふ、曰く人間一個の知力のみにては到底發明するを得ざる機密、即ち是れ神の啓示なきときは、吾人永遠知了する能はざるもの是なり。

第一種の
機密

第一種の機密は絶へず吾人の眼下にあるものなり、吾人日夜に之を使用しつゝあり、又も生活するが爲めには是非使用せざるべからざるものなり、此種の機密は剩りに吾人に親近し居るが故に、吾人は常に之に留意注目せず、之を使用するの頻繁なるが爲め、遂には日常不斷の事なりと思考す、去れば吾人は知らずして之を使用すと云ふ事を知らんが爲には、頗る深き注意を要するなり、例せば一粒の米より苗莖青々として生じ、穂となり、花となりて、遂に同一の米粒を實ると百倍するに至るは、人の皆目撃しつゝある所、之を見て不思議と思ふ者は、蓋し一人もあらざるべし、又彼の一椎子を地に投ずるときは、同所に一大喬木鬱々として發生する事も、人の皆知悉する所、

一粒の米
の椎子
に宿る
機密

之を見て驚嘆する者は、亦敢て一人もなかるべし、然りと雖も今假りに人あり、三十前後の年齢の時初めて此世に出で來れりとせん、彼は未だ世の何事をも知らざる者なり、吾人之に示すに乾枯無覺なる米の一粒を以てし、是れ此石の如き米粒の中には、生命の根源潜伏しつゝあり、今や姑く糶を以て裏まれて、白顆の中央に眠り居るのみ、斯の如く一年間眠り居るなるべし、然れども明年春夏の候に之を水田に投ずるときは、此生命は忽ち醒め起り、其狹隘なる囹圄たりし糶を破りて、首を擡げ、遂に青々たる綠草に變化して、豊なる養料の實を吾人に收穫せしむるに至らん云々と語らば如何、尙又此人に小指よりも小なる椎子を示し、此椎子の中には森々たる樹影數十人を覆ふに足る喬木潜伏す等の事を語らば如何、其人必ず抱腹絶倒して吾人の言を笑はん、又如何に吾人が之を斷言確證すと雖、彼自ら其眼前に事の眞否を目撃せざる間は、決して吾人の斷言確證に信を置かざるべし、夫れ一粒の米、一顆の椎子と雖、斯の如く不可思議なる機密を存す、但だ吾人は日常之を眼下に目撃するが故に、毫も怪む所なき自然の事と見做し、却つて之を見たる上ならでは斷じて信せず抔と云ふ前記の人を以

て奇怪の人間となし、彼は普通の常識もなき者と思料するに至るなり、何となれば彼が之を信せざるも、事は實際斯く行はれ居るものにして、事の眞否は毫も彼れの信不信に係らざるを知ればなり、又吾人自らは彼若し吾人の言を信せば、決して眞理に背くが如き患なきにと、心中竊に彼れの誤謬を憫憐するなるべし。

若し吾人の日常通用しつゝある言語に至りては、猶一層不可思議の機密を有す、今茲に甲乙の二人あり、否寧ろ二個の精神ありとせん、何れも形状容態のなき者、又何れも肉骸と云へる堅厚なる城壁に閉塞せられつゝある者、然れども彼等は各々相思考し、各々相欲望す、又相共に謁見面知せざるも、其城壁を踰へ、囹圄を脱して、自他の思考欲望を交通せしめんと欲す、是に於て乎、相共に一の共通物を採用す、意味を通ずる音即ち言語なるもの是なり、是に於てか言語は初めて彼等の意志を包む封状となり、交通の道既に開けたる後、甲の精神は其肉骸の囹圄の中より、口舌の使者を以て、勢込めて其言語を發射するや否や、言語は急矢の如く空を切つて飛流し、直に乙の耳底に達す、乙は豫て其耳底に待ち居たるもの、如く、直ちに之を受け、言語の中

吾人の言
語も亦是
れ機密に
屬す

より一々其意を抜取り、又忽ち一時の猶豫もなく、同一の道を以て、甲に返當す、而して此應答の神速容易なるは、殆んど思慮を要せずして、甲乙二精神の間を往來するなり、其間に肉骸と云ふ二個の城塞囹圄あるも、毫も之が爲めに妨げられず、其日常交通の頻繁なる爲か、更に力を費さずして相往來し、交渉數刻に至るも、敢て疲勞の體なきが如し、嗚呼是れ實に吾人の言語の機密なり、若し吾人にして日常之を使用聞見するなくんば、誰か此無形無體なる二精神が、坭土の肉骸の中に包含せられながら、斯の如き不可思議なる方道を以て、斯の如く複雑難澁なる事業を、斯の如く單純神速に施行するを信する者あらんや、然れども人々の日々言語するを見れば、事實は打消す可からず、又「領會するを得ざる事は我之を信するを欲せず」と唱道する人と雖、他の人々の如く、如何にして其言語を形成しつゝあるかを領會せずして、而かも日常之を通用しつゝあるを忘るべからず、蓋し彼等も矢張り吾人の如く知らずして語りつゝある者なればなり、嗚呼夫れ「語る」と云ふ事は、斯くも珍しき機密に屬す、然れども吾人の日常の生活に於て、語ると云ふ事より明瞭且自然なる事はあらず、然り、語

るは自然の事なり、吾人の語り居る事實は、明瞭にして打消すべからず、然れども記せよ、此明瞭自然の事の中にも、二個の劃然たる區別あるを、何ぞや、事實と方道即是なり、事實は甚だ明瞭なり、何となれば吾人は人と相語る際に於て、耳朵に響く音と精神の解する意との二事を明かに識別すればなり、然れども其方道に至りてや、得て之を知る能はず、何となれば如何にして斯の如き音を發し若くは聞くときに、精神直に之を了解するを得るや否や、更に見知する能はざればなり、而して機密は正しく此知見する能はざる結目に存す、即ち意と語の相接する點亦是れ一の機密なり。

第二種の
機密

日蝕月蝕
の原因

第二種の機密は先づ有數の學者より發見せられて、(其發見の苦心經營の餘に出でたるか、將た一時偶然の結果に出でたるかは、余の問ふ所にあらず)、後に天下の人々に啓發教示せられたるものにあり、例せば日蝕月蝕の原因の如き是なり、上古の民は之が原因を知らざりき、今日にありても之を知らざる者、野蠻未開の人民中多く之あり、然れども今日文明日進の國に於て、稱して天文學者と云はるゝ者は、明かに此現象の原因を知りし、千年以前より何年何月某國某所に於て、日月の蝕あるを見るべしと斷言

して疑はざるなり、又彼の蒸氣の如きも、斯の如き偉大の勢力あるものとは、古の民の夢想せざりし所、然るに今日となりては、海に陸に及び凡ての事業器械に之を利用して世界の凡ては宛んど蒸氣力に動かされつゝあるに至れり、彼の電氣の特質、光の効用の如きに至りても亦然り、吾人の一舉一動が光線の作用に由りて、玻璃板上に歴々と映射せらるゝが如きは、實に古人の未だ曾て夢寐にだも視ざりし所、二友東西數千里の遠きに隔離しつゝも、電氣の効力、鐵道の媒妁を以て、管に其思想を相通するのみならず、言語の應答まで自由自在なるを得るが如き、亦是れ上代の民の未だ嘗て想像にも浮べざりし所、然るに今日となりては寫眞、電信、電線等は日常の通用物となりて、其不可思議なる作用現象は、人視て以て毫も奇異の念を起さざるに及びぬ、然り、右等の發明は實に今日の世界に於て、普通日用の事物となりて、怪む者こそ却りて怪まるゝに至れりと雖、爲に是等の機密は一般の人民に明解詳説せられて、全く機密たるの跡を消するに至れるやと云ふに至ては、余は未だ之に首肯する能はず、試に思へ、天文學者の斷言を確信して、斯々の月日、云々の地方に於て、翹首伸領して天

の一方を觀望しつゝある雲霞の如き人民中、自ら測量精算して、之が原因を知悉する者果して幾人ある、晨星雷ならずと言ふも、豈誣言ならんや、又去つて彼の日々南北東西に旅行奔走する無数の人民に問へ、卿等が乗する所の汽車は、如何なる學者より發明せられたるや、彼の蒸氣力なるものは如何様に應用利行せられつゝあるや、其之を應用利行する機關は如何に運轉せられつゝあるや否や、能く之が答をなす者は蓋し鮮少ならん、乃ち乗者の多くは知らずして汽車の風を以て東の一端より西の一端に飛ばされつゝあるなり、彼の寫眞の人物を撮影し、電信電話の意想言語を通信するが如きに至りても亦然り、能く之が理屈を知る者は、寂々寥寥たり、夫れ是等の事物は、吾人日常眼下に目撃しつゝある所、而かも之が原因を知悉する者の僅少なる事實に此の如し、然りと雖吾人は之が原因を知悉せざるも、之が存在は固く信じて疑はざるなり、蒸氣、寫眞、電信等誰か之を否定する者ある、然り、人皆之が實在を信ず、蓋し日常之を使用して、毎度其恩澤を慶賀しつゝあればなり、然らば是等の事物果して信じ易きものなるや、今日に於ては、無論信じ易かるべし、然れども去つて之を百年以

前の人々に問へ、人あり來つて彼等に語つて曰く、我は釜中の水を熱して、數十の列車を馬なく運轉せしめんと云ひ、又は我は鐵線の一端を探りて、我思想言語を世界の極端まで知らしめんと云はゞ如何、百年以前の人々は必らずや視て以て之を狂漢となし、直に瘋癲病院に入院せしむる手續に及ぶなるべし、唯夫れ今日にありて是等の不思議なる事業は、實際眼前に行はれあるを以て、之を拒否して信せざる者こそ却りて狂漢と見做さるゝに至れるなり、嘗て之を聞く、印度に一の王あり、偶々歐洲より公使來り、之に語つて曰く、我邦には江河凍りて、大軍其足を活さずして水上を歩するを得る時期ありと、王之を聞き其狂及ぶべからずとなし、抱腹絶倒の餘り遂に死去せりと、鐵道發明以前の人々にして、人なく馬なく數十の列車を疾風の如く駛行せしむるを得るの事を語る者あるを見ば、誰か印度の王の如き感を起さざる者あらんや。余は是に於て余の宿論を確定せんとす、曰く、此の如き偉大なる發明を知悉せずして之を信じ、領會せずして之を使用する一般人民は、果して爲に道理に反背すと謂ふを得べきかと、然く思ふ者は恐らば一人もなかるべし、彼等は單に學者の知識學問を難

有く頂戴して利用し居るに過ぎざるのみ、勿論之が原因を知らざる彼等は、之を知れる學者に及ばざるや明なり、然りと雖彼等如何に愚昧なりと雖、汽車の馬なく馳せ、光りの自力を以て形影を撮し、電氣の千里懸隔の地に音信を通ずる現象事實を知了せざる者ならんや、而して是等の現象事實の知了既に充分なり、是れにても満足するを得、是れにても感嘆するを得るなり、此中にも樂あり、益もあり、必用の際には之を利用施行するとも得るなり、若し之に反して、汽車の如何にして駛行し、電氣の如何にして通信するや否やを知了領會せざる故に、我は之を信せずと語りつゝ、汽車にも乗らず、電報をも受けざる者あらば如何、今日の人は其者こそ知識なき没理漢、癡狂院を要する狂愚漢として、嘲笑せざる者はなからん、何となれば一事を信じ、一物を用ゆるに於ては、此事此物の實存實在を知了するのみにて足る、又斯く知了して之を信用するも、誤るの恐は毫も之なし、勿論吾人自ら之が理由原因を會得するを得ば、更に一層の満足、一層の愉快を感じるなるべし、然れども吾人之を會得せざればとて、發明者の學問知識が、吾人の才學を毀損したりと云ふを得ざるなり、寧ろ前者の學力

は吾人の知能を扶助補缺したりと思ふて、感謝すること正當奇れ、若し然らずして是を以て吾人の才能挫屈せられたりといはゞ、全く事理を睹るの明なき者と謂はざるべからず、發明者の知識は吾人に大益を與へて、一小損害をも加へず、又何んぞ吾人の才能を凌辱したりと謂ふを得んや、夫れ斯の如く吾人は日常他人の言を毫も疑はず、全く之に信を置きて、自ら領會せざる多くの事物を採用しつゝあるなり、蓋し必要により、習慣により、是非採用せざるべからざるなり、若し之を採用せざらんか、文明的の生活は一日も味ふ事を得ざるべし。

第三種の機密は、吾人々類が自身一個の知力を以て發明する能はざるものにあり、蓋し此種の機密物は、吾人の窺ひ知る能はざる高天、吾人の試験の達せざる雲上に位すればなり、余は是に於て神の存在、詳言せば、天地萬物の造者主宰たる獨一無二の神靈の實在を承認せる人に向つて論ずるものなるを諒せられたし、此有形世界に棲息して、單に物質的の事物をのみ見聞せる吾人が、一躍無形界に飛揚して、神靈的の事物を知了する能はざるは、毫も怪むに足らざるなり、有形界の住民にして、有形界以上

第三種の
機密の
同機密の
信認し得
べき證論

に行はるゝ事を知らざるは、蓋し當然の事と謂ふべきなり、是故に若し天上より人來りて、吾人に之を啓示教誨するわらずんば、吾人は雲上の事物を永遠窺知するの期なかるべし、設令其幾分を窺知するを得と云ふも、其所謂窺知するを得と云ふものは、往々推量臆測に止るなり、然り而して既に無形の神靈在りとし、又此神靈と共に無形の世界存在すと前提せば、(是亦古今東西の人民の固信する所なれば、疑を狭むべからざる事と見て可なり)、同無形世界に於て、吾人の窺知する能はざる事、領會する能はざる物の多々之のわるは、辯を待たざる所、何となれば吾人今日の棲息聞見しつゝある物質世界に於てすら、吾人の明解詳説するを得る事物なき事は、前條に述ぶるが如くなればなり、尙茲に一二例を擧げんか、日々吾人の眼前に炳然赫出して、三千世界を隈なく照し、森羅萬象を遺りなく遍照する所の日光は、一見甚だ明かなれども、然かも、其明かなるものゝ性質は、吾人得て之を知る能はざるなり、天文學者は之を定義して曰く、一番明かにして一番暗きものは光なりと、然り、焉より明瞭なるものはなし、然れども其性質如何に至りては、學者之を解する能はず、彼の電氣の性質、彼の

温さの性質に至りても亦皆然り、是等の作用、現象、効能等は吾人明かに之を知るを得、然れども其性質の如何に至りては、大學者の知能も亦之を領會する能はず、去れば被造の萬物が斯く不可思議の結目ありて、之が造者主宰たる天主には、秋毫も吾人に解釋せられざる所なく、吾人の棲息聞見する有形世界が往々思議すべからざる機密に充塞して、吾人の未だ曾て棲息聞見したる事のなき無界世界には、毫末も機密の點なしと云ふこそ、却りて奇怪なる機密的の言論と謂ふべきにはわらずや、人間の中には他人の知能の企及する能はざる事物を知了解釋する學者日々輩出するを得れども、人間萬物を造りたる造物主なる神は、人間の知識以上の事物を知悉領會するを得ずと謂ふとを得べきか、又此世の發明者が、物質的世界の秘密を發揮して、之を吾人に示すときは、吾人直に之を承認し、且之と同時に其發明者の功勞を謝して、深く之を尊重敬慕するを得と雖も、高天の造物主なる神が、自己の事若くは其在住する無形世界の事物を啓示して、吾人に之を知らしめんとするときには、吾人は斷然之を排斥拒否するを得と謂ふを得べきや否や、嗚呼若し果して有形世界に於て、天地萬物の秘密を發

揮闡揚したる學者の功勞にして、人類の一大恩澤と謂ふべくんば、何爲れぞ無形世界の機密を默啓教示したる造物主の仁恩のみは、之を恩惠視する能はずと謂ふや、前者にして若し之を大恩と見做すを得べくんば、後者は尙一層の大恩と稱すべきにわらずや、何となれば物質的下界にても、之を知らば効益ありとするものあらば、神靈的上界には、尙更之を知て効益あるべきものあればなり、蓋し此世界の吾人に樂しき所以は、吾人今日茲に棲息し、又も數十年茲に棲息すべければなるべし、然りと雖未來の世界は如何、吾人終焉の一大運命の繋がる所、永遠幸福の係る所にして、現世の歡樂快味の得て比較する能はざる榮境樂域なれば、之を知るの樂みは尙一層深かるべきは喋々を待たざる所なり、然らば則ち物質世界の事物にして、之を知るべしとなさば、無形世界の問題は、一日も忽諸に附すべからざるや明けし。

是に於て余は立言せんと欲す、若しも此世界の事物に關して、世の子弟が其師の言に基き、自己の領會解釋する能はざる多くの事柄を信するも、子弟は爲に其知識を放棄したりとは云はれず、却りて師の知能の光りを假りて、之を照し、之を磨きつゝありと云ふべくんば、……又若しも人民の多數が、自己の發明する能はざる文明的事物を信認採用するも、是が爲に其知能屈辱せられたりとは云はれず、又是が爲めに道理に背反したりとも云はれずして、却りて此發明物を信認採用しつゝあるが爲め、得々文明の民なりと自稱して、未だ之を知らざる人民に對しては誇るを得、頑然之を排斥せる人民を目しては野蠻未開の陋民奈何ともする能はず云々の語を口にするとせば、何故神と云ふ良師の言を信するは、人知を拋棄する事なりと謂ふか、何故其啓發教示したる真理を採用するは、卑屈沒理の沙汰なりと謂ふべきや、人ならば之を爲すを得、神に至りては能はずと云ふ理何くにある、人にして之を爲すを得べくんば、神は猶更之を能すべきにわらずや、嗚呼人の教示發明する所は、設令自己の知能を以て了解する能はざるも、欣んで之を信認採用しつゝ、神即ち人間以上の力ある神が教示發明する所は、人知に領會するを得ざるが故に、之を放棄排斥すべしと言は、此言こそ道理に背反する言、所謂沒理的の言論と謂ふべきにわらずや、否耶。

加旃ならず、福音書中に記載せられ、提出せらるゝ機密は、神靈の上界に關するが

故に、物質的の下界に存する機密より、高遠幽邃なるは論を待たざれども、其吾人の精神に提出せらるゝ方道、別言せば、吾人の知識の之を承了する方法に於ては、彼此二界の機密毫も異なる所なきものなり、何となれば彼此何れも二物の思想明かに識別せらるれど、唯だ其相接合する點に至りてのみ、領會する能はざる暗所あるものなればなり、今茲に福音書中に記載せらるゝ機密を逐一引證するの違なければ、單だ其中の最も重なる機密二個を擧げて之を證せん。

三位一體の機密

第一は三位一體の機密是なり、吾人は知識の上に於て、天主と三位と云ふ二個の思想を瞭然識別す、即ち聖父と聖子と聖神は是れ三位なり、然れども此二個の思想（天主と三位）の如何にして相接合するやに至りては、得て知る能はず、暗所は茲に在り、而して是れ所謂機密なり。

聖子降生の機密

第二は天主聖子降誕の機密是なり、天主第二位は降生して人間となりたりと云ふ天主的人間の機密を謂ふなり、人間とは如何なる者ぞと云はゞ、吾人皆能く之を知る、何となれば吾人即ち其人間なればなり、天主聖子とは如何なる者ぞと云はゞ、吾人は直に是れ天主第二位に在らせらるゝ者なり、神なる方なり、隨て無形なる事吾人の靈魂の如き者なり云々の事を明言するを得、（勿論其大小、完不完に至りては、吾人の靈魂と大に異なり）、然りと雖如何にして此神なる方が、靈魂肉身を以て成立てる人間に配合するを得たるやに至ては、吾人得て之を領會する能はざるなり、嗚呼此神人相合して、單に一位の者となりたりと云ふ方道こそは、實に思議すべからざる結目の存する所なり。

以上二個の大機密は、我基督公教の最も玄妙不可思議なる奧義にして、吾人の知能の到底企及する所にあらずと雖、略ぼ之と類似せる機密の例は、吾人自らの中にも存するを記せざるべからず、請ふ省て吾人自らを檢せよ、以上の二大機密の如く高遠幽邃ならずとするも、吾人の知能にては到底窺ひ知る能はざる機密は、兩々相並んで二個存す、何ぞや、

吾人は人間の一個一位なることを明に知悉す、而して此一個一位の人間は劃然區別ある二個の物（靈魂と肉身）によりて組織せられある事、是又明に知了す、肉身のみは人間

三位一體の機密の類例

にわらず、靈魂のみも亦人間にわらず、靈魂と肉身の二つを備へて、茲に初めて人間となる、是に於て乎人間は此靈肉の二物を自由自在に使用して、全く自己の所有物の如くす、彼は其靈魂を稱して我靈魂と云ひ、其肉身を指して我肉身と云ふの權利を有す、又彼は此二物を以て二様に行動す、即ち靈魂を以ては無形的に、肉身を以ては有形的に行ひつゝあるなり、然れども斯る場合にも、靈魂を以て無形的に行ふ者も、肉身を以て有形的に行ふ者も、均しく是れ一個一位の人間の業と謂はるゝにわらずや、嗚呼それ人間自らも日々此の如き機密を荷へつゝありて、而かも未だ曾て之を省慮熟考する者なきは奇ならずや、吾人に於ける機密と、耶蘇基督(天主なる人間)に於ける機密の區別は、吾人に於ては同一の位は靈魂と肉身の二物を以て成立すれども、耶蘇基督に在りては同一の位は三個の物を以て成立す、曰く靈魂、曰く肉身(此兩者の配合せらるゝものを指して人性と言ふ)、曰く神性はなり、斯の如く同一の位が人性と神性とを以て成立ち、一位同時に兩性を備具するが故に、眞誠なる天主なると同時に、又眞誠なる人間と稱せらるゝを得る所以なり、それ同時に神且人なり、是を以て二種

の事業を任意に行ふとを得、即ち神性を以ては神の事業、人性を以ては人間の事業を行ふと、全く其意の如くするを得、故に人間となりたる天主即ち耶蘇基督は、地上に於て労働受難すると同時に、宇宙萬象を主宰するをも得たるは、毫も道理上怪むべき所なし、吾人は世の人間に徴して之を知るなり、吾人々間は何れも皆死すべき者にして、又之と同時に死せざる永遠不滅の者たり、或は他の方面より立言せんに、吾人は足を以て地上を歩すると同時に、思を廻らして茫々たる高天に達するをも得、而して是等の事は吾人見て以て毫も奇怪なりとせざるときは、豈獨り基督に於ける機密を以て道理上容るざる事の如く反叫するを得んや、但し彼と此との機密には、大小優劣の區別あるは言ふを待たず、彼此の機密に區別ありとせば、唯だこれ此點に在るのみ。

三位一體の機密に至りては、無論降生の機密よりは一層高遠幽玄なるに相違なければ、之を端睨せしむる機密、少くとも此機密を拒否するを得ざらしむる機密は、幸に吾人自らの中にも亦之あるなり、何ぞや、吾人各々は皆一個の人なり、然り、一個の

人にして二個の人にはあらざるなり、然るに此一個の人なる吾人にして、何故日常多數の人の如き言動をなすつゝあるや、試に看よ、吾人は身躬ら己れに語り、身躬ら己れを責め、身躬ら己れに諮詢しつゝあるにあらざるや、吾人は一人にありながら、或は時に満足し、或は時に不快を感じ、或は時に自身それ自らに賛成を表し若くは譴責を加へ居るなり、一言以て之を蔽へば、吾人日常の言動は宛も吾人自らに三人あるが如きを表示す、甲は語り、乙は聞き、丙は賛成を呈す、然れども斯の如く三個の區別したる人間あるが如しと雖、實は一個の人間たるに外ならず、語る者も、聞く者も、又賛否を呈する者も、皆是れ同一の精神のみ、之を天主の三位一體に比するは、固より其當を得たりと言ふ能はず、吾人の靈魂を以て天主に比するは、火片を以て太陽に比すると同一なるべし、然りと雖斯の如く日常吾人が知らずして行動する所を見ても、三位一體なる神の中に行はるゝ機密は、幾分か之を推知するを得るなり、人間は三位一體なる神の小影と云ふ、過言にあらざるなり、神に於ても語る者と、語らるゝ者と、又賛するものとあり、唯だそれ神性は吾人々間の性よりは限りなく完全なるが故に、此三

個の區別ある者を稱して三位とは言ふなり、是に至るまでは明かに知るを得、唯此三位が如何にして同一の神性に合同し居るやに至りては、是れ機密、吾人の得て知見すべき所にあらず、此際吾人の知見するを得るは、此三位一體の機密は、天主それ自らの交際に外ならずと云ふ事はなり、退て吾人自らを省るに、日常の試験は、聖人君子自ら心に應答言語して樂むより樂しきはなしと教ふ、別言せば、己れと己れとの交際、是れ實に天下の至樂なりと云ふ事は、吾人日常之を我心中に試みて知悉する所なり、果して然らば、吾人は是を以て完全幸福なる天主に於ては、此「己れが己れとの交際」の必ず無くんばあらざることを推知するを得るなり、否らずんば天主は吾人よりも完全ならず、吾人よりも幸福ならずと云ふべし、此至樂を味ふ吾人人間を造出せる天主にして豈に此の如き理あらんや。

それ此の如く、福音書に記載せらるゝ二大機密、即ち吾人の稱して三位一體の玄義、救主降生の玄義と云ふものも、吾人人間の身上に其類例（固より適當の類例とは謂ふ能はざるも）を有するが故に、縦令之を明かに領會するを得ずと雖、吾人自らを省慮

するときは、決して之を背理なり、没理なり、不能の事なりとは謂ふを得ず、却りて吾人の身に比較して其高崇幽玄なるを認めずんばあらじ、其他の機密に至りても亦皆此の如し、余に若し時あらば、好んで之を逐一詳論細説すべけれど、此事今や題外なりと思考す、何となれば茲には神の啓示したる機密を信ずるとは、決して背理の沙汰にあらざることを論ずるに止まればなり。

要するに凡そ己の領會せざる所の事物を信じても背理の沙汰なりと云はれざるには、二個の條件あれば足る、曰く之を教示する者明に之を知了せる事、曰く彼れ之を教示するの際、人を欺かんとの意毫も之なき事即是なり、然り而して耶蘇基督が福音書中に於て吾人に教示したる機密は、皆優に此二條件を備具するものなり、何となれば耶蘇基督を神にあらずとせば、人間而かも欺騙詐誑の人間なりと謂はざるべからず、然れども若し耶蘇基督を稱して欺騙詐誑の人間なりとせば、須らく先づ福音書は如何にして今見る如くに記録せられたるや、欺騙詐誑の師が十二人の愚庵なる弟子と共に、如何にして此の如き偉大なる真理の思想、彼が如き偉大なる道德の觀念を案出すると

を得たるや、又格別彼れ基督及其弟子の使用したるが如き方道を以て、如何にして此福音を先づ同國同時の人々に、次に天下後世の人民に、真理の寶典として信認拜誦せしむるを得たるやの不可思議なる事柄を解釋せざるべからず、蓋し耶蘇基督を以て果して神にあらずとせば、其福音書、然り、今日世界萬民の手中に握られて、到底其存立を拒否する能はざる福音書は、耶蘇基督の神なる事よりも、尙一層不可思議なる機密となるものなればなり、されば今日の無神論者、若くは唯物論者、若くは懷疑學者が、耶蘇基督の眞誠の神、眞誠の人と云ふ理由を領會する能はざると口實として、其神たる事を拒否せんと欲するときは、忽ち他の機密、而かも尙一層領會に苦む機密に遭遇せざるべからず、即ち是れ機密を排して機密に移るにあらずして何ぞや、されば彼等は如何なる口實を設け、如何なる僞辨を逞ふするも、領會する能はざる機密の存在は、到底之を否定する能はず、彼等の百の議論は此點に於て毫も益せず、機密の存在は是非白状せざるべからざるなり、然らば則ち耶蘇基督の神なるを承認せんか、乃ち其言を信ずるは毫も背理ならざるを知るべければ、余の宿論益々鞏固となる、何とな

れば彼れ既に神ならば、一方より人に教示するの際、之を欺かんと欲するが如き惡意なきとは、申す迄もなし、又他の一方より彼れの人に教示する所を明かに知了せる事も、又是疑を狭む能はざればなり、別言せば、彼れは彼れ自からを知り、自ら如何なりし者なるか、何處より來れるか、又何の爲に來れるか等を悉く承知納得せるや明かなり、去れば其言の眞理なるか否やを檢するが爲めには、他の證據を要求せざるも、其福音の一書を繙かば是れ又足る、讀者若し注意着目して、彼れが福音書中に無形界の事柄を語るの道を見れば、初めて偉大なる天文臺を見物したる者の如く、必ず奇異の感に打たるべし、蓋し初めて此偉大なる器械、不可思議なる機關に接して、驚歎せざる者はあらず、然れども徐ろに此大鏡に近いて眼を寄するに當り、赫々たる日中にも尙千萬無量の星辰あるを天の一方に觀望するに至りては、一層奇異の念を起すに至らん、肉眼を以て見る能はざるも、此大鏡を動かして窺ふときは、世界に又無數の世界あるを認むるが故に、心身悚然として、驚歎の念全身に徹底するが如く思はる、天の偉大なる美觀は實に此の如く俗人の心胸を驚殺せしむるものなり、然りと雖日夜此美觀に飽

きつゝある天文學者に至りては、毫も異様の感なく、毫も喫驚の體なし、蓋し日用の常物として之を觀望し居るなり、彼れの之を覽者に解説するの易々たるは、宛も學校教員が算術若くは文典の初歩を其生徒に教ゆるが如し、彼れの茫々たる空天、日月星辰、及び其不可思議なる運動等について語るは、宛んど庭園の主人が自家殖栽の花木、及び其花木の四時開發する事柄に就て語るに異ならざるなり、彼の天文學者が此の如き偉大なる問題を擧へて論談するの平調平易なることは、寧ろ人をして一層驚歎絶叫せしむるに至るなり、曰く彼人は尋常の人間にあらず、蓋し偉能の人物なりと、然り而して耶蘇基督が無形の世界に就き、及び其世界の秘密に就きて語るときも、亦全く此の如し、否寧ろ一層驚歎すべきものあり、由來平調と平易は眞誠なる學問の特質なり、而して耶蘇基督に於ては此特質最も明に發揮せらる、彼れの神に就て語るや、子が其父に就て語るが如し、彼れの神靈世界に就き、及び同世界に行はるゝ事に就きて語るや、子が其父の家に就き、其家に行はるゝ事に就て語ると毫も異なるとなし、彼れの未來に就き、天使に就き、世界の終局に就き、及び人間萬物の運命目的等に就て語

るを聞くに、宛も尋常の人間が明旦行ふ事に就て語るを聞くが如く然り、否焉より甚しきものあり、尋常の人間は明日の事と雖、明に之を預定する能はず、彼れ基督に至りては未來永遠の事と雖、之を現在にして其眼前に觀望し居るなり、是を以て彼は吾人の知らんと欲するも知眼の達せざる事物に就て語るときも、其言公明正大にして日星の如く炳然たり、此の日星炳然たる公明正大の言を稱して、神の啓示と謂ふなり、其中に一點不可思議なる暗所の在るは、是れ止むなし、吾人の學ぶ所の凡ての學問の如きも、亦皆領會すべからざる結目を存す、蓋し吾人は此物質界の一事一物を知らんと欲するも、必ず思議すべからざる機密の暗礁に衝突せざるなければなり、然らば則ち此啓示即ち神の公明正大なる言語を採用し、設令其中に不可思議なる暗所黒點存するにも係らず、之を確乎不拔の金言として信ずるは、決して道理に背反するの沙汰にもあらざれば、人知を凌辱するにも當らざるなり、寧ろ爾か言ふ者こそ沒理の言を爲すと謂はざるべからざるべし、何となれば前記せる天文の大鏡を覗ふは、吾人の眼の用を放棄して、自身に凌辱を加ふるに當ると謂ふに毫も異ならざればなり、勿論此大鏡

を使用して觀望するも、天文の事總て皆知悉領會し得たりとは謂ふを得ず、日星の性質、大小、及び其距離等に至りては、必ず知るを得ざるべし、然りと雖吾人の肉眼を以て見るときは、之が存在だも想像するを得ざる事物も、此大鏡を運轉して覗ふときは、歷々として明に之を眼前に目撃するを得るに至る事は、是又決して否定するを得ざる事實なりとす、神の啓示に就ても亦然り、彼れの吾人に教示する所總て皆之を明瞭ならしめて、一點領會せられざる暗所なきに至らしむる能はざるは言ふを待たず、吾人の知能の茲に達する能はざるは、吾人の肉眼の茫々たる空天に徹底する能はざるに異なるとなし、然りと雖、此啓示に據るときは、神に就き、吾人の靈魂に就き、及び人間終焉の目的等に就きて、同啓示を知らざる者より一層精確なる、數層明瞭なる思想を有するに至るとは、争ふべからざる事實なり。

第二 奇蹟

反對論が福音書の眞實を攻撃するが爲めに提出する第二の口實的難問は、吾人の所謂奇蹟なるもの即是なり、曰く福音書には奇妙不可思議の事蹟を記載す、故に我等は之

を信する能はずと、是れ實に彼等の我基督教に對する常套の言なり。

今日世人が我基督教の何物なるやを知悉するに従つて、往昔の如く之れを罵言する者益々其數を減するに至る、即ち耶蘇基督を目して權謀欺騙の奸人なりと叫び、其教を稱して風紀道德に有害なる邪教なりと呼ばる者は、漸次其跡を絶つに及びぬ、寧ろ却つて多少の智識を有し、多少の誠意を有する者は、新約聖書を一閱して、耶蘇基督の言動に顯はるゝ高崇偉大の徳行を感嘆し、(設令其徳行の中には、法の勢力を有する先入的思想に適せざる者ありとするも)、又其教の古今東西の諸宗教に超然卓越するを自白せざる者なきに至れり、(設令其教は多少の點に於て、從來信奉し來れる自國の宗旨に反對する者ありとするも)、是れ實に世界人民の智識其程度を高めたる兆として賀せざる可からず、然りと雖福音書を繕て之を感驚する學者の中にも、今尙之を眞誠の歴史、即ち斯々某々の土地時代に於て、實際出來したる事實を記録したる通常普通の歴史と見做ざる者多し、是れ實に怪しむべきの至りなり、吾人就て其何故なるを問へば、曰く福音書は奇蹟と稱して、奇々怪々の事業を誌録すればなりと、乃ち知る、

奇蹟あるものは、彼等を蹟かしむる所以なるを。

然り、奇蹟なる語は機密の二字と同じく、一見吾人の心頭に怪訝の念を惹起す語なり、然れども是れ畢竟するに此語の意味する所如何を知悉せざると、又凡て奇蹟の二字を以て現出する事を研究調査なく絶對的に排斥拒否するは、果して合理的の沙汰なるや否やを未だ考察せざるに坐するのみ、實際に於て奇蹟の二字は果して如何なる事を意味すとす、之を歴史的の眼光を以て觀察するときは、果して他の事蹟と異なるあるか、余は毫も其異なるあるを知らず、請ふ余をして之を縷晰せしめよ。

請ふ先づ歴史の常に語る所如何を考察せよ、凡そ人間社會の間に行はれたる事蹟を捕促して、之を當代當地の人民の目に視、耳に聞きたる儘に誌録するは、即ち是れ歴史なり、而して斯の如く目撃耳聞したる者が、一たび之を史上に記載するときは、後代の人々之を讀んで、毫も疑はず、事宛も己れの眼前に行はれたるが如く思料す、今これ吾人の稱して奇蹟と云ふ神妙不可思議なる事蹟の如きも、其外容に就て視察するときは、秋毫も右歴史的事蹟と異ならず、其行はるゝ方道は彼此全く同一なり、後者の

歴史の性質

奇蹟は歴史的事實に異なる所なし

出来も矢張前者の如く人間社會の間に於てす、之を當代當地に於て目撃耳聞したる者は同じく記して以て之を後の子孫に證明するを得るものなり、試に今ラザル蘇生の例を擧げて云はんには、當時十萬餘人の人民猶太の首都ゼルザレムに集合せり、此等の人民悉く其視聽を失ひたりとは謂ふ能はず、適々富強なる者死して石棺に葬らる、其死其葬毫も他の人々に異なるなし、死後四日を經過し、親戚朋友其墓所に相集るに、屍既に腐朽し臭氣紛々として鼻を衝けり、而して其紛々たる臭氣は、他の人々の屍より生ずるものと、更に其性質を異にせざりしなり、然るに此親戚朋友の群集せる處に、耶蘇基督即ち是れ又他の人間と毫も異ならざる者來りて、其墓前に近づき、大聲呼んで曰く「ラザルよ、出で來れ」と、衆皆目に此人を視、耳に此語を聞き居たり、而して死者は直に出で來りぬ、手足布に縛り、巾に裹まれて、是又衆人の皆目撃したる所にして、一點隱秘の所なし、其死者の蘇生し來れる狀の怪む所なきは、宛も吾人夜來の衣衾を被りて、朝起き出るに異ならざりしなり、基督衆に命じて其巾を釋かしむるに、四日以前に死したる者は直に出で、歩き、語りて、其親戚朋友と會談を始めぬ、

當時の人皆之と語るとを得たり、當時の人皆死して蘇生し來りたる者は、ラザル其者にして別人にあらざるとを固信したり、それ此の如し、是れ豈日常出來する歴史的事實と異なる所あらんや、若し果して歴史的事實を目撃耳聞したる者にして、之を書に筆して以て天下後昆に證明するを得べくんば、同事實と同一の方道を以て行はれたる奇蹟を目撃耳聞したる者にして、之を福音に書して以て天下後世の人々に信用せしむるを得ざるの理は萬々之あらざるなり、然らば則ち何故天下の人は歴史的事蹟を聞ては直に之を信用し、奇蹟の事業を聞ては容易に之に信任を置かざるや、曰く以あり、請ふ之を言はむ。

奇蹟に於て吾人の區分して考ふべきもの二つあり、曰く事蹟、曰く原因、事蹟其物は奇蹟の外形にして、目以て之を視、耳以て之を聽き、手以て之に觸るゝ等のことを得るものなり、今其事蹟のみを考ふるに、福音書に記載せらるゝ奇蹟を否定したるものは未だ曾て之あらず、耶蘇基督と同時の人先づ之を否定せざりき、何となれば彼等は實際眼前に目撃したるのみならず、基督が奇蹟を以て癒したる病人、及び其蘇生せし

奇蹟に二事あり

其事蹟を否定する者は一人もなし

めたる死者等現在彼等の中に棲息し居りたるを以てあり、次に基督教に最も反對したる仇敵セルス、ジュリアン、ヒエロクレス等も尙且之を否定せざりき、何となれば彼等の時代は奇蹟の行はれたる時と餘りに接近したるが故に、之を否定せんと欲するも多數人民の反叫は之を容ざりければなり、爾來今日に至る迄、福音書の歴史には一言半句の増減もなし、坤輿球上の人民皆見て以て之を正史となし、法統連綿たる教會藏して以て之を寶典となし、完全無缺昔日在りし儘に之を後世に傳へたるを以て、現近の反對論者ルナンの如き者すら、且尙福音書中の奇蹟を否定するを得ざりき、蓋し歴史ありてより以來、耶穌基督の歴史(福音書)の如く、精讀確定せられたる者はなし、是故に彼の偉大なる天才バスカルは、有名なる言を以て之を證明して曰く「アレキサンデルの功業とセザールの死去は、人今之を疑ふ者なけれども、耶穌基督の事業に比しては、其證明頗る缺如たり」と。

其原因に就きて初めて是非の議論

故に事蹟の一事に就ては、如何なる反對論者と雖、到底之を拒否するを得ず、唯だ彼等が疑團を抱ひて、其不信の心を逞ふせんと欲する點は、奇蹟の原因に在るなり、此

論起る

神妙不可思議なる奇蹟は如何にして行はれたるやと、其之を行ひたる権能、勢力に就て論ずるに當りて、初めて反對論者は各自其解釋を區々にし、各自其假定を層積して、紛々籍々、孰れか是、孰れか非なるやを知らざるに至る、彼等の未だ奇蹟の原因を、捕促し得ざるの明證は、二千年來斯の如く空を攫み、雲を握りて五里霧中に彷徨しつゝ、甲論乙駁、自家撞着して、今仍は底止する所を知らざるに在るなり、斯く徒爾の辛勞を費すは、實に惘然に堪へず、事蹟は精確にして争ふべからず、之を疑ふの難きは日星の光を隠蔽するよりも甚だし、唯だ其原因のみは深殿に隠れ、幽邃にして窺知するを得ざる神秘に屬す、而して彼等は此神秘を捕促せんが爲めに、滿腔の心血を絞り、畢生の力量を傾けつゝ、あれども、憫むべし其苦心は毎回水泡畫餅に歸し去りたり、是れ他なし、彼等は求むべからざる處に之を求めんとすればなり。

若く之を求むべき處に求めんか、奇蹟の原因豈ぞ斯の如く冥晦ならんや、實際は事蹟其物の如く較明顯著なり、正理と誠意を聞く耳ある者には、原因近きに在り、豈遠からんや、然らば則ち果して何物ぞ、曰く凡て人力の得て行ふ能はず、性力の得て生ずる

其原因豈認め難からんや

能はず、其他如何なる被造物の勢力も得て來す能はざる較明顯著の事業は、人を造り、性を造り、萬物を造りたる神の能力に歸すべきや必然なり、乃ち知る、奇蹟の原因は萬能なる神其者なるを、然るに基督教の反對論者は正しく此「神」と云ふ萬能者を奉戴するを欲せざるが故に、空しく力を價にして勞を買ひつゝあるものなり、求むべきを求めずして、求むべからざるを求めんと欲す、其徒勞たるや必せり、基督と同時の「フアリセイ」人より現今のルナンに至る迄、彼等の案出したる假定説は層々積んで堆を成せり、今茲に逐一之を列擧して駁撃するは、餘りに閑散の業にして、且餘りに無用の勞なれば、唯だ其中に最も根本的の反對を試みたる近代の學者の説を擧げて駁論せん。彼等は傲然其學力を誇示して斷言すらく、凡る事神妙不可思議の性を帯ぶる者、別言せば、神の直接の合力を要する者は、絶體的不能の業に屬す、故に吾曹は直ちに之を拒否するを得と、彼等は此の如き根本的の破壊主義を唱道して、有らゆる奇蹟を絶體的に否定せり、故に初めより之が講究調査等をなさず、以爲らく有るべからざる事を研究するは徒勞なりと、此點に於ては現近の反對論者は昔時の反對論者よりも簡便なる

狡猾法を取れり、何となれば前人の奇蹟に就て無用徒爾に經營苦心したるに反對して、最も力の少なき道を發明したればなり、然れども此狡猾なる簡便法が誠意正心なる人を満足せしむるを得ざるに至ては、前人の自家撞着なる愚説と其軌を同ふす、何となれば彼等は如何に絶體的否定を試みんと欲するも、確立明定せる争ふべからざる奇蹟はあるなり、ラザルの蘇生の如き、其他福音書中に記載せらるゝ諸奇蹟の如き皆是れなり、是等の奇蹟は堅牢不拔にして、之を當時に就て考ふるも、之を今日に於て考ふるも、到底拒否する能はず、蓋し精確なる歴史なるものありて、日星の如く之を證明すればなり、而して此歴史は、二千年來世界萬民の堂中に存するを以て、今や之を埋没せんとすると頗る難事なり、記して茲に到れば、同一の難問復た起る、曰く萬能なる神の合力なくんば、如何にして此事蹟實際に行はれたるや、若し實際に行はれざるものを、福音書が之を實際行はれたるが如く書き誌したりとせば、借問す、何故世界萬民は同福音書の事蹟を信じて基督教徒となりたるや、何故正しく此事蹟の行はれたる土地時代の民が率先之を信じて、基督教會の義者聖人となるを得たるや、基督教の猶太に

創始したる事は事實なり、同教の世界萬國に弘布せられある事も又事實なり、同教が古來聖人君子を雲霞の如く輩出したる事も又復た事實なり、敢て問ふ、反對論者は何を以て此較明顯著なる事實を解釋せんとするや、若し果して福音書に記載せらるゝ事蹟を以て公明正大なる奇蹟にあらざとせば、之れを信じて世界萬民の基督教化したる美善の結果は、尙一層偉大なる奇蹟にあらざや、然り、吾人は福音書に記載せらるゝ奇蹟と同日の論にあらざる一大奇蹟なりと言はんとす、今日の反對論者は如何に根本的の破壊手段を取らんとするも、現在眼前に目撃せらるゝ世界の局面を如何せんや、基督教が世界の全面を一變したる事事實ならば、彼等は如何にしても奇蹟あるを白狀せざるべからず、何となれば福音書の奇蹟を奇蹟にあらざと云ふときは、此奇蹟わらずして全世界の局面の一變したるは、尙は一段の奇蹟なればなり、然りと雖此事蹟の如何にして行はるゝを得たるかと、又神の合力なくんば如何なる性理によりて行はるべきかの事は、姑く之を反對者の解釋するが儘に任せ置き、余は余の宿論を確立せんが爲に、果して奇蹟は行はるべからざるものなるか、別言せば、果して神は此世界に於て

奇蹟の有
り得べき
證論

毫も事を直接に行ふを得ざるか、尙は語を切にして言はゞ、果して神は其管内(世界)に於て、人間の其領内に於けるよりも自由なく權力なしと云ふを得べきや否やを講究せんと欲す、余の茲に斯く立論するは、神の存在を前提して論ずる事なるは言を待たず、神とは永遠萬能の神靈にして、天地萬物を無何有の郷より造出して、今尙其萬能の手を以て之を主宰しつゝある者を謂ふなり、果して斯の如き者なりとするときは、神は宇宙の外に超然獨立し、萬物の上に一箇別在して、全く個體的の生存をなし、天地萬物と劃然區別あると、宛も作者の作物に於けるが如く、地主の領地に於けるが如き者なりとす、斯く事を確定して立論するときは、奇蹟なるものは果して如何なるものとなるべきぞ、他莫し、神の事業即是なりと一言するを得るなり、隨て奇蹟は果して行はるべきものなるや否やを尋問するは、神は事を行ふを得るやを尋問するに異ならず、之が答は洵に易々たり、否言ふ迄もなきなり、若し果して神にして生存する者ならば、又全能全知なる者ならば、其意の欲する所に隨て事を行ふとを得るの自然なるは、猶ほ吾人々間が其力量に應じて任意に事を行ふを得るの自然なるが如きなり、別言せ

ば、人間が人間的事業を行ふが如く、神が神的事業を行ふは、當然の事にして毫も怪む所なし、斯の如く論じ來るときは、奇蹟と云ふも畢竟世界の常事なりと謂はざるべからず、吾人々間日々意の向ふ所に任せて、道を往來しつゝあるを見て、人誰れも之を怪しとせざらば、神が其聖意の欲する所に随ひ、萬能の手を以て人間を自由自在に行動せしむるも、豈以て怪事とするに足らんや、然らば則ち奇蹟あるは毫も不思議にあらずして、奇蹟なきこそ却て不思議と云ふべけれ。

加旃ならず、吾人は日夜眼前に目撃して毫も怪まざる一大奇蹟萬古存在す、それ之をしも怪まらずんば、孰れをか怪まんや、請ひ問ふ其一大奇蹟とは何ぞ、世界の存在即是なり、蓋し神の行ひたる事業、否行ふとを得る事業の中、最も偉大にして又最も公明なるものは、彼が無何有の郷より此一大世界を造出して、萬古之を主宰する事なるべし、試みに俯仰天地の一大美觀を視察せよ、秩序整然、法則確立して、四時行はれ、萬物育す、尙ほ仔細に之を考察せば、禽獸の生死、草本の榮枯等、毫も其期を失はず、又毫も其則に違はずして、千秋萬古其不可思議なる奇蹟を繼續反覆す、是れ豈に福

世界の存
在は一大
奇蹟

音書に記載する奇蹟と日を同ふして語るべきものならんや、其幾百千萬倍不可思議なるや得て言べかざるものあらん、世界は實に萬世繼承持續する一大奇蹟なり、之が存在は公明正大なるを以て、人之を否定する能はず、又之が原因は神を認めずんば、他に指定すべき者なし、是れ實に奇蹟中の奇蹟と言ふも過言にあらず、神は開國の初めに之を造出したたり、蓋し其行動を外に發揮せざりせば、其全能全知の力は世に顯然たらざればなり、此點に就ては神と吾人の靈魂とは同一轍に出づ、靈魂は無形の質、肉眼の得て見る能はざる者、然れども彼は言行を以て自己の存在を表白し、又自己の性情を發露す、神も亦然り、天地を造出し、萬物を主宰して、其存在と其盛徳を發表し、今仍ほ發表しつゝあり、彼れの内部に隱蔽せらるゝものは、其事業を以て吾人に啓示せられたり、乃ち吾人は其事業を視て、彼れの何物なるやを推知するを得るに至りぬ、世界と云ふ一大事業は、神の萬徳萬能を吾人に紹介するものなり、然るに吾人が之を觀望して、毫も喫驚感嘆の念を起さざるは、日夜常に之を眼前に目撃するに由る、此一大奇蹟の萬古に繼續するは、愈々以て奇とすべきに、日々之を驗するの習慣は、吾人を驅つて

之をしも奇とせざるに至らしめたり、是に於てか吾人は惰性に支配せられて、事業を
 目撃しつゝ、其原動者を忘却するに及びぬ、被造物の中央に棲息しつゝ、造物者の思
 想を毫も其念頭に浮べざるは、不思議千萬なる次第なれども、其事業の千秋萬古同一
 に繼續する事は、終に人間の感覺を鈍からしめて、事皆自然なり、當然なりと思量せ
 しむるに至れり、是を以て神は吾人々間の視聽を惹起せんが爲めには、常理に反した
 る法道を以て、直接自己の力を發揮するの已むを得ざるに及びぬ、是に於てか奇蹟な
 るもの起る、而して此常道に反したる奇蹟を目撃耳聞するときは、不注意なる吾人の
 視聽は、宛も霹靂の一聲に打たるゝが如く、悚動震起して、昔時埃及の魔術者の叫び
 たる如く、「嗚呼神の手腕茲に在り云々、」(出埃及記第十八の十九)の語を白狀するに至
 る、然れども神の上より之を觀るときは、奇蹟は易々たる自然の業なり、萬物の上に
 位して之を造出し、之を主宰せる全能全知の神ならば、事茲に出づる、何の怪むべき
 とかわらん、一家の主が其子弟婢僕に命令して、自己の威嚴權能を顯はすを見るも、
 吾人は自然の事として毫も之を怪まざるにわらずや、況んや斯かる臨機應變の事業は

之を神が世界萬物の上に絶へず行ふ所の事業に比して、涓滴の海洋に於けるが如きに
 於てをや、試に彼此の一二を比較し見よ、年々地上に草葉を繁殖して、優に億兆の人
 民を養はしむる事は、五個の蒸餅を以て五千人に食ましむるより、數百千倍不可思議
 なる事業にはわらずや、唯だそれ後者は稀れに、前者は絶へず行はるゝが故に、此れ
 の吾人を驚嘆せしむるは、彼れに及ばざるに至れるなり、事皆總て此の如し、吾人の
 稱して奇蹟と云ふもの、豈に夫れ信じられざる程の奇異なるものならんや、其事柄た
 る一小瑣事のみ、唯だ其行はるゝの稀れなるによりて、吾人は見て以て奇怪の念を懐
 くのみ。

然れども或は曰はん、奇蹟にして若し果して斯の如く單純簡易なるものならば、何ん
 か故に飽く迄奇蹟の不能を唱道して、福音書に記載せらるゝものを論難攻撃する者斯
 く多きやと、論難攻撃の理由、詳言せば、或一部の論者が奇蹟を信せざらんが爲めに
 斯く迄經營苦心する原因は、一目瞭然たり、請ふ余をして遲疑なく之を語らしめよ、
 人は皆自然に神を畏るゝ者なり、昔人は嘗て「神を見たる者は生さる能はず、」(列王傳

奇蹟を否
 定する者
 の心事

六の二十三句)と思惟したり、縦令歴然神の眞體を見ざるも、其現存威嚴を告ぐる兆を見て、既に悚然震驚して、其心畏怖の念に満たさるゝに足る、若それ罪ある惡人に至りては、神の威嚴の兆に顯はるゝを想記するだも、其心に無限の苦惱を感ず、彼等惡人は出來得べくんば神の無からんを欲す、然るに彼等は神を無視する能はず、又神の任意なる行動をも禁ずる能はず、何となれば神は餘りに彼等の上に超越すればなり、是に於てか彼等は少くも己れの意志を強ひて安心せんことを欲するが故に、その爲め飽く迄神の威嚴を示す事業を攻撃し、口を事常理に反して出るに藉き、滿腔の心血を絞り、畢生の能力を傾けて、之が原動者は神にあらずと自信しつゝ、己れの罪惡の心を撫せんことを務むるものなり。

而して現今の學者の此點に就て發明したる所は、全く自己の中心を撫するに適當せるが如し、何となれば彼等は初めより絶體的に凡ての奇蹟は不能の一事、實際有り得べき事にあらずと假定するを以て、不可思議なる事蹟について、毫も顧慮する所なきに至ればなり、然れども茲に少しく考察する所なくんばあらず、彼等は初めより絶體的に

絶體的に
奇蹟を否
定する論
者の説は
古今東西
の輿論に
反す

凡ての奇蹟の不能を唱道して、自家の安心を装はんと欲すと雖、奇蹟の果して不能の事なるや否やは、宜しく彼等の考究すべき要點なり、之を究めざる時は良心を強ゆることを得べくも、安んずる時は能はじ、請ふ省慮一番せよ、何故奇蹟を以て不能の一事なりと絶體的に唱道するや、古今の歴史を繙て東西の人民を一々尋問せよ、奇蹟を信せざりし人民果して之ありたるや、之を信せざる人民今尚何くに住するや、勿論奇蹟の眞偽に就て誤りたる人民はあらん、奇蹟にあらざるものを奇蹟なりと信じたる者は必ず之ありたるに相違なし、然れども此事果して奇蹟不能の證據となすべきや、否決して然らず、奇蹟を信するに當りては留意を要す、一見直に之を信するときは往々誤りありと云ふ殷鑑を示す迄にして、奇蹟を信する勿れ、凡ての奇蹟は皆虚事なりと云ふ結言は、決して之を下さしめず、試に一考せよ、古來偽りの奇蹟ありて、奇蹟ならざる者を奇蹟なりと誤認したる人民ありたりと云ふ事は、直に取て以て凡ての奇蹟は皆偽、之を信するときは必ず誤りありと云ふ一般の斷言を下さしむべきものなるや否や、之に反して偽りなる奇蹟を信じたる人民を見て、彼等が奇蹟の有り得べきを終始

確信したる事は、却て一層明瞭に證論せらるゝにあらずや、若し古今東西の人民にして奇蹟は不能の一事なりと確信したりとせば、何を苦んでか奇蹟ならざるものまでを奇蹟なりと信認するをなさんや、余をして論せしめよ、彼等が奇蹟ならざるものまでも奇蹟なりとして信認したらば、眞實の奇蹟は如何程有り得べき事なりと確信し居たるかを知るに足る、是れ實に古今東西の人民の正意誠心なる確信なり、意見なり、輿論なりと見做すべし。

蓋し奇蹟の有り得べき理は、神の思想より自然演繹せらるゝものなり、古今東西の人民が神に就て誤りたりとするも、其誤りは毫も此點に關せず、彼等が如何なる者を神と崇め、或は天、或は日、或は川、或は海、或は山、或は動物、或は植物、或は又石像木偶を以て神としたりとするも、事毫も關する所にあらず、彼等の精神に於ては矢張り神なり、彼等は斯の如き事物を以て神となせるも、苟も神と云ふときは、必らず言動自在にして、其權能、勢力を意の儘に發現するを得る萬能者として信じたるや明かなり、若し彼等にして神には權勢なしと思惟せんか、乃ち是れ彼等が神を信せざり

し明證なり、何となれば權能を神より剝奪するは、(神に權能なしと云ふの意)、神を無視すると異語同義なり、權能のなき所には神の有るべき謂れなし、余は尙重複の言を重複ならしむ、曰く權能なしと云ふは、乃ち是れ神なしと云ふ所以なり、是に於てか一番の留意を要す、今それ奇蹟は不能の一事にして、實際に有り得べき事にあらずと斷言せば如何、他なし、是れ神なる者はなしと斷言すると毫も異ならざるなり、直接に奇蹟の存在を否定するは、間接に神の存在を否定する所以なりと知らずや、斯く論じ來るときは、現今の學者なる者は、奇蹟と神とを共に否定して、古今の輿論に反背し、誠心正意なる人民の意見に悖反する者と謂ふべきなり。

然りと雖吾人の奇怪なりとするは、神の存在を信じ、神の天地萬物を創造したることを信じ居るにも係はらず、神は一たび己れの創造したる萬物には、二度と再び手を入るゝ能はずと唱道して、神の自由權を全く否定する學者あるとなり、其説に曰く、神は宇宙を造りて之に一定不變の法則を設けたり、天地間の萬物は此法則に従つて萬古偸らず主宰せらるべきものなり、上は天上に懸る日月星辰より、下は地上を匍匐する

宇内の法
則を城壁
とする學
者の名説
を駁論す

徹虫に至るまで、皆此法則に服従す、而して宇宙の合調なる者は之に依て以て維持せらるゝなり、然るに今や手を差入れて此合調を變更せんとするは、取りも直さず宇宙萬象の秩序を紊亂せんとするものなり、天地の大匠なる神にして、其製作物を變更改革せんとするが如きは、偶々以て彼が其初め意の達せざりし所あるを證明するに當るなり、全知全能なる神にして豈此理あらんや云々と、此説頗る奇怪なり、果して此説の如しとせば、天地の造主、萬物の大匠なる神は、尋常一様の工匠よりも自由ならざるものと云ふべし、世の工匠は自家の製作物に手を入れて、勝手に之を變製改作するを得、木材足らずんば木材を加へん、粉飾足らずんば粉飾を添へん、取捨増減は全く己れの自由にあり、唯だそれ天地萬物の工匠のみは此自由なしとするか、然れども彼は世の工匠よりも權能ある者ならずや、蓋し彼は天地萬物を創造するが爲めに使用したる材料をも虚無より造出したる者なればなり、彼れの未だ天地萬物を造らざる初めに當りてや、彼は天を縦横自在に廻轉せしむるを得たり、梅花に命じて晩秋に開かしむるも、菊花に命じて嚴冬に咲かしむるも、事全く彼れの自由に在りたるにはあらずや、而して今や彼れ全く其自由權を失ひたりと云ふを得べきや、勿論神は不平なる婦人が其室家を乱すが如く、自儘勝手に宇宙の合調秩序を紊亂すべきにあらざるは言を俟たず、然れども奇蹟なる者は決して斯の如き性質のものにあらず、一の奇蹟を行ふは、萬物の合調を攪亂するの謂にあらざるなり、唯だ是れ世界の一端に、萬能なる神が手の觸れたることを意味する迄のみ、一端に觸れたりとて、萬物爲に紊亂せられたりと謂ふべけんや、彼は奇蹟を以て萬物の局面を改變する意にあらず、寧ろ却て其手を觸れざる事物をして、有の儘に萬古繼續し行かんと欲す、例せば彼が世の人間一人を蘇生せしむるも、世界万民をして死生の理に洩れしむるにあらず、其手の觸れたる一人は蘇生せん、然れども觸れざりし人間は皆依然として死に入るなり、且神が斯の如き意を起すは、從來の意を改變するに當るとは、猶以て謂ふ能はざるなり、萬物の上に非常の手を差入るゝの意は、彼に在りて決して新らしきとにあらず、萬物を創造するの意と共に永遠より存在したり、何となれば神は萬物を造る時に後日斯々の場合に斯々に行はんと云ふ事をも預定したればなり、蓋し神は理由なく奇蹟を行ふ者にあ

ずや、而して今や彼れ全く其自由權を失ひたりと云ふを得べきや、勿論神は不平なる婦人が其室家を乱すが如く、自儘勝手に宇宙の合調秩序を紊亂すべきにあらざるは言を俟たず、然れども奇蹟なる者は決して斯の如き性質のものにあらず、一の奇蹟を行ふは、萬物の合調を攪亂するの謂にあらざるなり、唯だ是れ世界の一端に、萬能なる神が手の觸れたることを意味する迄のみ、一端に觸れたりとて、萬物爲に紊亂せられたりと謂ふべけんや、彼は奇蹟を以て萬物の局面を改變する意にあらず、寧ろ却て其手を觸れざる事物をして、有の儘に萬古繼續し行かんと欲す、例せば彼が世の人間一人を蘇生せしむるも、世界万民をして死生の理に洩れしむるにあらず、其手の觸れたる一人は蘇生せん、然れども觸れざりし人間は皆依然として死に入るなり、且神が斯の如き意を起すは、從來の意を改變するに當るとは、猶以て謂ふ能はざるなり、萬物の上に非常の手を差入るゝの意は、彼に在りて決して新らしきとにあらず、萬物を創造するの意と共に永遠より存在したり、何となれば神は萬物を造る時に後日斯々の場合に斯々に行はんと云ふ事をも預定したればなり、蓋し神は理由なく奇蹟を行ふ者にあ

らず、忘恩なる人間が之を忘却し、之を無視するとあるが故に、時々非常の言動を現はして、自己の存在と威嚴と權能とを眼前に目撃耳聞せしめんと欲するなり、然り、是れ實に神が奇蹟を行ふ唯一の目的なりとす、豈これ敬して畏れざるべけんや。

天地間の法則に至りては學者往々誤る所あり、一種類の動植物が日々同一の方道に従て生育し、繁殖し、枯死するを見て、斯の如く發育繁生するは、動物植物の法則なりと唱道す、是れ事實なり、余も又首肯す、然ども彼等に反問するに、其所謂法則なる者は、何處に存するや、如何なるものなるやを以てするときは、彼等は頗る之が答辨に苦むなり、其法則は果して實在のものか、詳言せば、天地間には果して一種特別の者ありて、他の動植物をして皆己れに歸依服従せしむべきものなりやと云ふときは、彼等は答ふるに辞なきなり、其答ふる能はざるは怪しむに足らず、實際此の如き者は天地間に之わらざればなり、今動物植物礦物の種々の類を取て研究するに、見る所のものは、單だ個々別々の物のみ、而して其個々別々の物は己れに類似の物あると否らざるに係らず、各自其生命を有し、各自其性質を備へて、全く此世界に單獨孤立せる者の如く、相共に個々別々の生殖をなしつゝあるなり、彼の種類の「類」と云ふが如き者は、吾人の精神の外には實際存在するものにわらず、吾人は萬物の中に相似たる者を總合して、之に「類」と云ふ名稱を附したるのみ、されば吾人の精神を離れて類なる者わらじ、單だ相似たる個物のみ、其中に何故或者は或者と相類似して、同一の種類に屬し、同一の方道に服するやと問ふも、造物主なる神が斯く欲したるに因ると云ふより外に原因を提出すると能はざるなり、蓋し學者が天地の法則、萬物の法則杯と高言するも、其實毫も珍らしき者にわらず、唯だ是れ造物主の斯く欲して又斯く欲したる儘に繼行する所の意志のみ、此意志を離れて、天地萬物の法則なる者はなし、他に之を求めんとするも全く徒勞なり、他に之を解釋せんとするも全く空論なり、果して然りとせば、天地萬物の法則なる者も神の奇蹟を行ふを防ぐる理由はなきなり、此法則それ自らも、萬物の性質に應じて個々別々に之を主宰しつゝある神の意志の繼續に外ならざればなり、而して奇蹟を行ふには、萬古同一の方道に従て生殖枯死する森羅萬象の上に、神が或一個人の爲に一時例外を鈎出せば足る、人間の注目を惹起して

神の腕を認めしむるには、斯の如くして充分なり、又焉んぞ是を以て天地の法則を破り、萬物の秩序を紊亂すと云ふべけんや、一時例外の事業行はるゝも、天地萬物の法則秩序は毫も變更紊亂せらるゝものにあらず、何となれば此例外の一時に於ても、神の意志は他の同種類の事物に對して、同一に繼續し居ればなり、斯の如く分拆し來るときは、奇蹟なる者は毫も珍らしき事にあらず、其存否毫も萬物に關せず、試に一考せよ、萬民皆死生の理によりて支配せらるゝ中に、唯だの一人非常の道を以て死して蘇生せしめられたりとて、何んぞ此大なる世界に關せんや、實際に就て考ふるときは、斯の如き出來事は、天地間に行はるゝ他の珍らしき大業に比して、涓滴の大海に於けると一般、其遺跡を認むるだも苦むなり、唯だそれ此特殊の事跡は、神の手腕を示して、或種の人間の弱點に堪へ忍ばれざるが故に、彼等は此神の思想に反對して、自家を防護せんが爲め、企圖に企圖を重ね假定に假定を加へ、務めて神の思想を此世界より追放せんとするものなり、然れども萬物の法則を城壁として神と戦ふは、餘りに兒戯に類す、萬物の法則なるものは想像の城壁のみ、毫も神の行動を妨ぐるものにあらず、前述の如く、神は萬物の造主にして又此法則の造主なるを見るときは、城壁自ら崩壊す、神と防戦するには須らく尙數歩を進めて、根本的手段を取らざるべからず。

造物主と被造物との區別を混同する名案を破却す

而して現近の學者中尤も博學多識を以て自任する學者は、之が名案を認めたりと信せる者の如し、其名案とは造物主と被造物との區別を混同するにありて、其實毫も名案にあらずして、極めて拙き愚案なり、彼等は造物主なる神の存在を否定せず、然れども神は萬物に異りて、劃然分立する者にあらずと主張す、是故に彼等の口と精神とに於ては、神と萬物は一物同體と見做さるゝなり、然りと雖彼等の説に據れば、萬物とは果して何物ぞ、神とは果して如何の者ぞ、此有形世界を解釋するが爲めに、彼等如何なる主義を案出して、之を斬新の哲理の如くに得々誇稱するも、萬物と云ふ語を以ては、到底此世界に存在する若くは存在すと思はるゝ物體の總合より外に示す能はず、然らば神と云ふ語を以て如何に解釋するやと云ふに、動物、植物、礦物等凡て天地間に有らゆる事物の中に徹底する、神妙不可思議なる一の力なりと云ふ、世界の一大靈魂は物體に配合して、今見る森羅萬象を形成したりと、尙彼等をして語を繼がしめよ、

曰く神は物體に配合して、頑冥無覺の物體に於ては引力となり、感温受光の物體に於ては温且光となり、植物に在りては生育發開し、動物に在りては感動痛痒し、而して萬物の靈魂たる人間に在りては知覺欲望自由自在なり、人間は實に萬物進歩の絶頂極點なり、吾人の天地萬物と稱するものを形成したる者は、物體に配合したる神是なり、其配合は人靈の肉體に配合したるに異ならず云々と、如何にも斯の如く考ふるときは、奇蹟なるものは有り得べきものにあらず、何となれば神は萬物を離れて超然劃立する者にあらざればなり、されば若し奇蹟ありとせば、萬物是れ奇蹟なりと謂はざるべからず、何となれば萬物皆神なればなり、隨て人間は神を恐怖すべき理なし、蓋し彼れ自身も是れ神なればなり。

斯の如き主義を詳記するは乃ち是れ辨明するなり、蓋し其主義の存する所を眞率明快に叙述し來るときは、其不合理の點一目の下に瞭然たるが故に、百の辨論は全く無用に屬するに至ればなり、試に思へ、誰か宇宙萬物を以て、一靈魂に活動せられつゝ、ある一物體なりと想像するを得るや、天地の萬物は其數幾百千種あるやを知るべからず、

而して是等の物は皆種々異様、個々別々にして、各自固有の存在をなし、或は相戦闘し、或は相吞噬し、或は相破却しつゝあり、是れ果して一大動物が自ら變遷し、自ら噬嚙し、自ら併吞する現象なりと云ふを得べきか、地球上の人間其數又鮮少なりとせず、而して是等の人々各其性情を異にし、意見を殊にし、又其云爲行動を區々にす、是れ果して一物同知の外異に内同じき顯象なりと云ふを得べきか、果して然りとせば、肯定する者も否定する者も、攻撃する者も攻撃せらるゝ者も、殺戮する者も殺戮せらるゝ者も、皆是一物一體の相食、同人同士の争闘なりと謂ふべきか、事茲に到るときは、誰れも哀求し、反抗し、告訴するの權利なからん、人皆善徳の云爲をなしても功勞なく、罪惡の行動をなしても責罰なき結果に至らん、何となれば是等の言動をなす者皆是れ一人なればなり、一人は乃ち是れ萬人にして、萬事をなす者又是れ一人なりと謂はざるべからざるなり、嗚呼天下に斯の如き不合理千万にして、又斯の如く不道徳至極なる説を想像し得べきか、尙一步を進めて云はん、若し果して神は人間の頭腦に在りてのみ知覺明快の者とならば、何故物質世界に斯く規定ある、斯く秩序ある、又斯

く合調なる事物認めらるゝや、是等は皆一大知能者の存在するを前提するものにして、而かも人間の思念は之を感驚するにだも到達せざるなり、若しそれ世界萬物の存在と其秩序とを以て偶然の結果、若くは盲力の成果なりと爲して、知らず識らず變遷進歩して、茲に至りたりとなさば、是れこそ實に空前絶後の一大奇蹟にして、福音書中の諸奇蹟よりは幾億萬倍も不可思議千萬なる奇蹟と云ふべきなり、嗚呼憫むべき學者よ、汝は萬事を價に供して神を此世界より省き、其片影をも留存せしめざらんことを欲して、汝自らは全く道理の明を失ふ盲者となりたるを知らずや、奇蹟の有り得る理は一目瞭然の眞理なり、不合理の言論を案出せずんば、到底拒否する能はざる事實なり、神と世界とを一視混同する汝の恐説は、不合理の絶頂にして吾人の精神は之を思考するだも疲勞を感ずるなり、汝如何に譎辨を逞ふするも、世の常識と正意は終始造物主と被造物との區別を絶叫す、曰く彼と此とは全く相異なるものなり、被造物が造物主の紹介なると、猶工業が工師の紀念物なるが如し、吾人の眼前に横る宇宙は、神の知能を發顯する日常の標柱にして、留意の人物は此標柱を見て忽ち神を識認す、近代の科

學を創設したるケプレ、リンチ等の如き大人物を見ても知るべし、唯だそれ未だ留意の足らざる者、若くは眼光の豆よりも小なる者に至りては、右の標柱餘りに偉大に過ぐるが故に、神の思想を直取するに適せず、是に於てか神は人間の弱質を憫察して、他の標表を示しぬ、即是れ奇蹟の起る所以なり、神が此非常の方道、臨時の手段を以て、長夜の眠を貪りつゝある人間を警醒し、情性に支配せらるゝ一部の人間に特別の注意と感心を惹起したり、勿論奇蹟其物より觀察するときは、固より單純なる一事蹟に過ぎざれども、事弱質なる人間の思想に一層適切なるが故に、愚夫愚婦の腦を打つには一層激甚なるを覺ゆ、例へば彼のナインの寡婦を見て知るべし、彼は其子の死して葬送せらるゝ時、突然途中に於て棺内より蘇活し出でたるを見て、欣喜の餘りに叫んで曰く「一大豫言者吾儕の中に起りぬ、神は其民を訪問しぬ、」(ルカ傳七の十六)と、蓋し正意誠心の人々は、奇蹟は眞個に神の威能を發顯する非常の手段なりと堅く信すればなり、現今の學者は如何に譎辨を逞ふして愚俗の耳を驚かさんとするも、彼等の正意誠心は容易に此譎辨に首肯せず、此點より考ふるときは、學者の譎辨は毫も損益する所

なければ、余は殊更茲に喋々の言を費すに及ばざるが如し、然れども我公教會が奇蹟として吾人に信せしむる一條に於て、如何なる方道を取るかを茲に一言せざるべからず、同教會は凡て奇怪新珍なるものを見て、尋究稽查なく直に之を奇蹟なりと信認せしむるものにあらず、若し公教會の實狀を知らば、此點に於ては同教會の如何に周到綿密なるかを知らん、同教會が斯の如き事跡に就て採用する所の方道、要求する所の證據、消費する所の歲月を見て、一驚を喫せざる者はなかるべし、蓋し其方道の周密なる、其證據の多々なる、又其歲月の長久なる天下に比類なければなり、然れども斯の如く研究の上に研究し、證論の上に證論したる後、果して争ふべからざる事實なりと認め、果して萬物の造主なる神の力を前提せずんば、解釋すべからざる事蹟なりと断定するときは、正直眞率なる道理は、同教會の断定と近代學者の誦辨を取捨するに於て毫も遲疑躊躇せざるなり、蓋し前者を取るときは神の直接なる手腕を認めざるべからざるの畏怖ありと雖、後者の不合理不道德なるを信するよりは遠く優るを知ればなり。余は世の愚説に反對して叟々の議論を費すを欲せず、請ふ是より歩を福音書に轉じて

奇蹟は基
督の神な

るを證明
するに必
要

論究せん、耶蘇基督が世に降生して、當時の人民に其神より遣はされたる事、否寧ろ己れ自ら神なる事を證明せんとするに當りては、須らく之が證據となるべき事を行はざるべからざりき、然らざるときは一人も彼れの天職を帯びて降生したるを信する者なかりしならん、然り而して人が其己れの神より遣はされたるを證明する唯一の證據は、實に神の名に藉りて、神にあらずんば爲し能はざる奇蹟を行ふにあるなり、此事の眞あるは古來の凡ての欺騙漢が時俗を欺かんとするに當りて、毎度其手段に依頼したるを見て知るべきなり、勿論彼等は實際眞實の奇蹟を行ひたるにあらず、然れども民の信用を釣りて之を自己の目的に左右せんとするには、奇蹟最も必要なりとしたるが故に、己れの事蹟を飽く迄奇蹟視せしめんとを務めたるなり、耶蘇基督が己れの天職を證明するに至りても、他の道に出づる能はざりき、勢ひ神妙不可思議なる事業、所謂奇蹟なるものを行はざるべからざりき、然れども基督の行ひたる奇蹟と、欺騙漢のとの間には一大相違あるを知らざるべからず、彼れの奇蹟は眞實なり、彼は欺騙の目的を以て降來したる者にあらず、實際に於て欺きたるとは一回もなかりき、道理に

於て又實に欺くを得ざりしなり、彼が行ひたりと記述せらるゝ奇蹟は、彼れ真に之を行ひたり、而して彼れの之を行ひたる方道は、明かに是れ神の全能に因りて行はれたるを證するなり、何となれば當時の人民皆之を信用したるのみならず、彼れ先づ自ら其奇蹟の疑ふべからざるを示したり、彼は己れの言の眞實無妄なるを證せんが爲め、公然其奇蹟を擧げて答へたり、曰く「若し爾等我言に信せずんば、我事業に信せよ、」(ジョアン傳十の二十八)、是れ實に彼れの奇蹟に就ては、彼れの言の如く、當時の人民皆之を信じて疑はざりしを表明するなり、而して其奇蹟は極めて公明正大なりしが故に、福音書中に屢々記述せらるゝ如く、時の人民は之を見る毎に、必ず「光榮を神に歸したり、」(ルカ傳十八の四十三)、加之ならず彼れの舊怨宿敵に至るまで、群衆の眼前に於て行はれたるを見ては、之を否定拒絶するを得ざりき、彼等仇敵は到底之が事實を打消す能はざるが故に、笑止千萬なる見解を以て之を埋没せんとを務めたるに過ぎず、乃ち彼等は斯る卑劣なる策を取て、人民の腦中に基督の奇蹟の銘刻を防止せんと欲したり、今其一例を擧ぐれば、一日基督公然暗啞の鬼を患る者を驅逐せしに、鬼出

基督の公明正大なる
反對する
能はざる
所はざる

で、瘡者忽ち語るを見て、衆咸之を奇とし、感驚して基督の身邊に圍繞す、時に彼の仇敵「ファリサイ」民に語て曰く、是れ彼が鬼王「ベルゼブツ」に藉りて鬼を逐ふなり、神の名に藉りてにはわらず云々と、然れども基督は其意を知り、忽ち彼等の愚論妄説を喝破して曰く、若し我れ鬼王に藉りて鬼を逐はば、是れ鬼自ら己れと相分争するなり、然れども記せよ、凡そ國自ら相分争するときは必ず墟となるを、若し果して鬼自ら相分争せば、其國何を以て立たんや、之に反して我れ若し神の腕を以て鬼を逐はば、即ち是れ神の國(權)爾等に臨めるなり云々、(ルカ傳十一章參看)、基督の答は實に直截なりき、然れども彼等仇敵は正しく此直截なる答辭にある神の權が、基督によりて人民の中に行はるゝを怖れたるを以て、飽く迄頑固なる抗抵を試みんと欲したるなり。

(備考)基督の時代及び基督教創立の當初に於ては、患鬼の人間許多ありて、基督の權能を發揚するに、最も好機會を與へたり、彼が奇蹟を行ひたるときは、其如何に魔鬼の上に權勢を有したるか知らるゝ、當時魔鬼は到る所に尊拜せられて、

全く人類の上に位する神の如く見做されたりしが、基督來りて、其權能を發顯するに當りては、彼れ自らも基督の神の子なるを告白して、勢ひ之に服従せざるを得ざるに及びぬ、蓋し基督自身も魔を驅逐したれど、其弟子にも又自己の名に藉りて之を驅逐するの權勢を與へたるが故に、耶蘇基督の神の子にして人間の救主なるを表明する證據中には、魔鬼の其言に應じて服従したるの一事は、頗る勢力ある證據となりたり。

然りと雖仇敵の頑固なる抗抵は、毫も基督の奇蹟を防禦するを得ざりき、又彼等如何に牽強附會の辨論を逞ふするも、民の正意誠心は決して此に満足せざりしが故に、彼等は到底群衆の基督の跡を慕ふて、之に依歸するを制止する能はざりき、福音書を閱するに良民の正意誠心は彼等仇敵の曲論僞説よりも、如何に勢力ありたるかを見るに足る、試に彼の生れながらの盲者に就て一考せよ、彼は基督の奇蹟によりて其明を得たる時、基督の仇敵の之を曲解せんとする者に向ひ、絶叫して曰く、彼れ(基督)既に我眼を開きたるに、卿等尙彼れの何れより來るやを尋問するは奇怪千萬なり、人にし

て生れながらの瞽者の目を啓きたる者は、世の元始より以來未だ曾て聞かざる所なり、彼れ尙し神より出でたるにあらずんば、焉んぞ能く此に至らんや云々、(シヨアン傳九章參照)、是れ實に曲論の正意に抵抗する能はざりし所以なり、然れども仇敵の最も瞋目嫉視したるは、基督がラザルを復活せしめて后、セルザレムの城門に近かんとするに在り、是時猶太國の内外より、踰越の祝祭の爲めに、都城に雲集霧合したる群衆、皆歩を向け踵を接して、ラザルの住所なるベタニヤに來りしに、四日間墓内に葬られたる奇怪ある人間は、果して基督に蘇活せしめられて、平常の言語舉動を爲し居たり、之を見て衆咸感驚の念に打たれ、到底事の公明正大なるを拒否する能はざりき、憎惡嫉妒の情念に驅られたる彼等仇敵、若し事一點疑はしき所ありたらば、焉んぞ之を攻撃するの機を逸せんや、然れども事實は餘りに公明正大なりき、此事實の日星炳然たるに對しては、流石の彼等も背後に瞳若たりき、されば彼を攻撃せんとする念慮だも起らず、失望落膽の聲を放つて曰く「斯人多くの奇蹟を行へり、若し我等彼を置いて理せずんば、衆人必らず之を信せん、」(シヨアン傳十一の四十七、八)と、而して彼等は之

を處理するが爲め如何なる方道を取りたるや、方道は他にあらず、唯だ一のみ、彼を死地に陥る事是なり、是に於て乎彼等は無慘にも彼を殺戮せんとの奸策を廻らしたり、嗚呼彼等は遂に斯の如く憎惡と嫉妒の情念に驅られて、一切人類の救主たる神を殺さんとはなしぬ、然れども如何なる惡逆無道の人間と雖、單に自家愛憎の念の爲に、無完無缺なる善人を殺戮したるは、古來未だ曾て見聞せざる所、彼等仇敵の基督を殺戮せんとするに當り、須らく茲に熟考せざるべからざりき、而して彼等は茲に熟考したり、熟考の末遂に名案を提出しぬ、其名案とは何ぞ、他莫し、愛國の美名を以て愛憎の私念を覆ふに在りたり、是れ實に彼等が民の前に於て己れを義とする唯一の名案にてありき、然れども其實は民を欺き併せて己れを欺く一大奸謀なりしを忘るべからず、事甚だ奇怪なれども、爾來二千年後の今日に至る迄、我基督公教の世界到る處に攻撃せられたる所以は、不思議にも皆此に出でざるはなし、歴史備さに存す、何んぞ余の喋々を要せん、蓋し之が口實の開祖は實に基督の當時の「ファリゼイ」人にてありぬ、即ち當時彼等は叫んで曰く、「若し我等彼を置いて理せずんば、羅馬人必らず來りて、我地

反對者
の美
愛國の
名を假
て基督
の奇蹟
を打
務め
さり

及び我國を滅亡せん、(「ジョン傳十一の四十八)、彼等は斯の如く自家の私心を覆ふに、愛國と國益との口實を以てせり、此口實の虚なるとは論を俟たず、然れども何れの代の民も此美名の響には忽ち耳を傾くるものなり、當時猶太の人民も又遂に茲に欺かれたり、泰西の歴史を繙きたる者は必らず知らん、後日果して羅馬人來りて猶太國を滅亡し、人民を四方天涯に離散飄流せしめたることを、然れども此は決して同國民の基督を信じたる結果とは謂ふ能はず、何となれば彼等は實際之を信せざればなり、良し信じたる者ありとするも、その甚だ少數の人民なりき、而して自餘の民は遂に仇敵の奸策に與して、基督を磔刑に處するに及びぬ、されば其地其國の羅馬人より滅亡せられたるは、全く彼等が基督に信せずして、之を磔刑に處したる天罰と云ふべし、彼等は斯の如く美名の口實を設けて、民を欺き己を欺きて、遂に自國を滅亡に歸せしめたり、然れども彼等は今日の吾人の爲には、段鑑となりぬ、耶穌基督の行ひたる奇蹟の眞實無妄なるを表明するに於ては、彼等實に争ふべからざる證明者たり、何となれば彼等は基督を死に陥るを以て、彼れの奇蹟を埋没する唯一の手段となしたるも、到底其目的

を達するを得ざりければなり、今彼等の心事を開剖するに、甚だ憫むべきものあり、奇蹟を解釋するには、是非神權を前提せざるべからざるは、炳然として日星を睹るより明かなるは、彼等は耶蘇基督に於て此神權のありたるを飽迄否定せんと務めたるが故に、第一之を鬼王に歸せんと欲して失敗し、第二基督を死地に陥れて又々失敗し、而して此失敗は遂に基督の神の子たる事、其奇蹟の争ふべからざる事實なる事、及び其教の天授神立なる事を明かに表白したり、爾來二千年後の今日に至るまで、彼等と心事を同ふする曲學阿世の徒は、雲霞の如く世に起りたり、今尙雲霞の如く世界の各方に散亂しぬ、是等は皆左の論理的結言に反對せんと欲する者なり、曰く基督の歴史(福音書)若し眞ならば、彼は果して神なり、彼れ果して神ならば、其教は神の教なり、其教果して神の教ならば、是非とも之を遵奉せざるべからず、然れども之を遵奉するは、彼等の傲慢心と腐敗心との容さるる所、是に於てか基督當時の仇敵と同じく、種々の口實を設け、種々の曲論を逞ふして、基督の歴史(福音書)を埋没せんと務むれども、彼等も又「フアリゼイ」人と同一轍に歸して、屢々失敗の歴史を重ね、而して彼等が

基督の奇蹟
の奇蹟
の區別

失敗の歴史を重ねる所以は、即ち是れ基督の歴史の眞實無妄(福音書の眞實)なるを證明する所以なり、斯く觀察し來るときは、我基督公教の仇敵を有するは、有害の仇敵を有するにあらず、却て同教の眞理を世に發表する有益の良友を有するに該當す、彼等の爲めには憫然なるべけれども、同教の爲めには至幸至福と謂ふべし。

今又福音書を繙て奇蹟を行ひたる方道如何を考ふるに、左の觀念は自然吾人の心頭に浮び出づ、假令神人間となりて、人類の中に神的事業を行ふありと假定するも、決して耶蘇基督の取りたる方道の外に出づる能はざる事是なり、耶蘇基督を以て、我自ら斯々の不可思議なる事業を行ひたりと誇示する古來の欺騙漢に比するは、餘りに彼れに恥辱を加ふる事なり、何となれば彼此の間には毫も類似の點あらざればなり、試みに彼此の心事を検せよ、人の常に自ら奇蹟を行ひたりと誇示する者あるは、其目的全く自家の利益の點にあるなり、彼は先づ初めに人の感驚を惹起し、次に金錢を得ん事を企圖す、一言せば、名利即ち是れ彼れの唯一の目的なり、彼れの使用する手段方法は、常に秘密なり、迂回の道に出づ、困苦の跡見ゆ、時には笑止千萬にして、不道德極ま

るものあり、其所謂奇蹟なるものも往々自家自らを以て證明者となし、良し他に證左となる者之ありとするも、そは僅々たる同臭一味の朋輩のみ、而して其奇蹟の結果如何に至りては、決して人の智識を發開して、人を善人たらしむるにあらず、寧ろ却て人心を攪亂して、正理の容れざる迷信的恐怖を惹起し、終には人をして良心の許さざる行爲に出でしむるを常とす、要するに不合理と不道德即ち是れ偽奇蹟の究極する所なり、今福音書を開て基督の奇蹟を検するに、斯の如き事は一點も之なし、基督の行ひたる有らゆる奇蹟を逐一分析するも、彼れが己れを尊からしめ、己れを益するが爲め行ひたるものは一もなし、福音書を讀む者も斯の如き事は夢寐にだも想起せず、基督の名利の觀念に遠かりたる、實に斯の如し、彼が唯一の目的とする所は、上は己れを遣はしたる天父の光榮を發揚し、下は己れに際會したる不幸薄命の者を救助するにありたり、彼は是れが爲めに毫も自己の事業を世に公示せらるゝを冀はず、勿論彼は病者を癒し、死者を蘇する等の不可思議なる奇蹟を山に、河に、市に、邑に、道に、到る處に行ひたるには相違なけれども、彼は之を行ひたる度毎に、其事業の世に公にせらるゝ

を欲したるにあらず、却て屢々人を制して之を黙々に附せしめたり、現に之を目撃し居たる證人の員數少きときには、絶體的の言を以て堅く之を人に語るを禁じたり、彼れの奇蹟を行ふ手段方道に至りては、極めて單純平易なりき、一意、一言、一行にて萬事を行ひたり、例せば彼が癩者を癒したるを見るに、「彼れ手を伸べ之を撫して、我肯へり、爾潔まるべし」と曰へば、其言の畢るや否や、癩即ち除きて其人潔まれり、「マルコ傳一の四十一、二」と云ふが如き、毫も困難勞苦の跡見えざるなり、盲者に向て、「目を啓けよ」と曰へば、其目忽ち啓け、死者に向て「汝起きよ」と曰へば、忽ち起き出で、海に向て、「黙して靖まれ」と云へば、風即ち止みて海波忽ち平息するが如き、(マルコ傳四の三十九)、蓋し焉より易々たるはあらず、彼が天に祈りて奇蹟を行ひたるは、唯だ一回のみ、而かも彼れの之を爲したるは、環立の民をして己れの果して天より遣はされたる事、及び神の名に藉りて之を行ふ事を知らしめんが爲にてありたり、嗚呼實に彼れの言動の單純平易なる、宛んど人意の表に出づと謂ふべし、而して其言動の斯く單易なるにも拘らず、其權の偉大なる事、又是人の意表外に出づ、彼れ是れを以て萬

事に命じ、萬物に向ふときは、病者も、死者も、風も、波も、天も、地も、有らゆるもの皆平伏して之に服従したり、殊に注目すべきは、彼の魔鬼すらも此神權を公認したる事是なり、余の前記せる如く、當時鬼に憑れたる者頗る多かりき、其原因何れに在りしやは、生理學者醫學者の宜しく講究すべき所、余は唯だ歴史的に觀察して、此事の争ふべからざる事實なるを認むるのみ、蓋し當時の人民も皆是れ鬼に憑れたる者なりと確信したればなり、當時魔鬼は到る處に神拜を受け、種々の名義の下に祀られ居たり、而して其尊拜は全く眞誠の神の尊拜に代りて、時の天下を押領したりしを以て、魔鬼は遂に「此世の王」と云ふ名稱を得るに至りき、然るに耶蘇基督の一たび此世に降來するや、第一着に眞神の思想を地上に蒔て、之が尊拜の道を定めん爲なりしが故に、須らく魔鬼も其神權に服して、基督の弘布する神は、眞に造主主宰にして、彼等も萬物と同じく、其支配を受けざるべからずと云ふ事實を公然知らしむべかりしなり、今茲に患鬼者の性質を究めて、魔鬼の人類の上に逞ふしたる權柄如何を論ずるに違わらず、是又本編の主旨にもあらざるを以て、暫く之を措く、唯だ茲に吾人の注目

すべき事は、基督及び其弟子の患鬼者に對して行ひたる奇蹟は、如何程當時の人民の感驚を惹起したるか、隨て眞誠なる神の尊拜を偶像教の敗類の上に建設するに於て、如何程與つて力ありたるかを歴史的に知悉するに在るなり、本編の目的に於ても亦是れにて足るなり、今基督が一言を以て萬物に命するや、萬物直に其命に服従したる事蹟を見るに、神が開關の當時に、一言を以て萬物を虚無より造出したると同一の權能ありたるにあらずんば、決して茲に出づる能はざりしを認むること難からざるなり、勿論之を吾人々類の眼を以て見るときは、全く人力の企及すべからざる不可思議なる、事業には相違なれども、之を神の上より觀察するときは、蓋し平常易々の事業のみ猶ほ吾人が從順なる婢僕に事を命じ、若くは足を以て道上の小石を轉するが如きのみ、故に基督の周邊に環立して、此事業を目撃したる者は、直に神の權を認めたり、聖經に曰く「衆見て之を奇とし、直に榮を神に歸す、蓋し其の此の如き權を以て人に賜ふに因るなり、」(マテオ傳九の八)、又以て見るべきなり、基督の仇敵と雖之を知らざりしにはあらず、然れども彼等は基督に對して、憎惡と嫉妒の情念に燃されたりしが故に、

他言を以て間接に之を證したり、曰く「我儕の行ふ所毫も益なし、舉世皆彼に従へり、宜しく彼を殺さんのみ云々、」(シヨアン傳十二の十九參看)、是に至り一の難問必ず讀者の念頭に浮び出でん、基督の仇敵が若し果して其奇蹟を目撃したりとせば、何故之を信せざりしやと云ふ事はなり、見ると信ずるとは、相異なる二事なり、基督の奇蹟を見るも、之を信ずると信せざるは、人の勝手なり、彼の仇敵は基督の事業を目撃したるには相違なし、然れども其事業の下に神の全能の發揮せられぬを認めざりしなり、切言せば、認むるを欲せざりしなり、蓋し彼等は基督が神の權能によりて奇蹟を行ひたりと云ふことを明かに知了したりとするも、人の自由は抜くべからず、之に歸依すると之を嫌棄するとの撰は、依然として彼等に屬したり、是れ毫も怪むに足るものなし、彼等猶太人が基督の奇蹟に對せるは、猶ほ今日の人々の世界の造出と云ふ一大奇蹟に對するが如きものなり、凡ての人は此世界萬物は神の事業なりと云ふ事を屢々耳聞して明かに之を信認すると雖、此一大事業を行ひたる神を尊拜して之に奉事する者は、甚だ鮮少なり、多數の人々は神の思想をも其念頭に浮ぶるを欲せざるなり、或る一部

の人間は愛憎の私情に驅られて、直接神に反抗し、宛も神が人間と同じく痛痒を感じるかの如く思惟して、畢生の打撃を之に加へ、出來得べくんば之を死地に陥れんと企圖するや年既に久し、而して此事現に猶太人を以て行はれたり、何んとなれば神が人の形體を受け、悲喜を感じる一個の人間となりて降生したるとき、彼等は忽ち其憎惡の念を晴さんが爲め、之に死の打撃を加ふるを猶豫せざりければなり、神若し今日に於て再び斯の如き形體を假りて世に出づるならば、或る一部の人間は又必ず猶太人の所爲と同一轍に出でん歟。

人或は曰はん、耶蘇基督若し果して全能の神なりせば、何故斯の如き凌辱打撃を蒙りて、遂に磔刑に處せらるゝが如き卑怯に陥りたるや、何故人を救ふより自ら救ふことを爲さざりしや、何故十字架より飛下して其權能を顯さざりしや、何故仇敵を一撃の下に粉塵して、一大快事を試みざりしや云々と、斯の如く立論するは、餘りに人間的の語調なり、勿論人間にして斯の如き權能ありとせば、其所爲必ず茲に出でん、何人なりとも若し唯だの人間なりせば、基督の境遇に立て、基督の如く忍辱甘受する者は

基督の卑
なる死
法なる
却て是
は一大奇
蹟

一人も之なからん、必ずや卑劣なる群衆の凌辱殘忍に石光電火の打撃を加へ、猶太國の内外よりゼルザレム都城に雲集霧合せる人民の眼前に、偉大なる威能と隆々たる光榮を發顯して以て快哉を叫ぶなるべし、余は再言す、若し人間をして基督の地に立たしめば、其所爲必ず茲に出でんと、特に知らず、其所爲の茲に出でざるは、乃ち基督の基督たる所以にして、其神たるの證據は正しく此點に在るを、神妙不可思議なる一大堪忍を以て、罵倒嘲笑の下に泰然として立ち、辱をも苦をも且死をも堅忍甘受するは、嗚呼是れ實に人間以上の神にあらずんば能はざる所なり、先づ初めに己れを死地に陥らしめ、萬事休して敵の誇揚せるに當り、忽ち意外の復活をなして、光明赫々たる威嚴を發射するは、到底人間の夢想する能はざる所なり、蓋し己れを知るの篤く後を見るの明なる者にあらずんば、事決して茲に出る能はざればなり、己れに抜くべからざる權能ありて、將來任意の時に蘇活自在なるを明知したる基督にして、初めて之を能くするを得たるを見るなり、加旃ならず基督は己れの斯く凌辱罵詈を蒙りて死するは、決して其卑怯柔弱なるが爲めにあらざるとを、吾人々類に知らしめんが爲め、正し

く此死期に當りて繇宇掀寰の大奇蹟を行ひたり、彼の無神論者ルーソーが、神の奇蹟なりとして信ずに要求すと語れる所の一字一畫まで、遺漏なく之を遂行實施したるは實に此時に當れり、其要求すと語れる所如何、他莫し、白晝に當り、衆民稠立の前に一人萬物に命令して、萬物直に其命に拜服するの一大奇観なかるべからずと云ふ事是なり、而して此一大奇観は正しく基督の死期に當りて、白晝萬民具瞻の下に出顯したり、即ち基督の磔刑に處せられたる時刻は、正に是れ明皎々たる白晝、然るに日光忽ち光を包んで、天地晦冥となりぬ、言ふを休めよ、時日蝕に屬せりと、此時は正に是れ満月の時、日は天の一方に在りて、月又他の一方に在りたり、日蝕固よりあり得べき時にあらず、然るに暗夜の黒幕は忽ち天地を鎖したり、猶太近傍の諸國は冥々として咫尺を辨せざるに至りぬ、而して彼れ基督の玉魂を絶ちたる正三時に當りては、大地震動し、巖石破摧し、死者其墓を破りて蘇活したるが故に、此一大悲劇を目撃したる者は、毛髮悚然、全體恐怖の冷水に浸されて、往々胸を打て悔悟したり、中にも基督の磔下に在りたる百夫長は、成りし所の事を見、絶叫して曰く「誠に是れ義人なり

き、」(ルカ傳二十三の四十七)「眞個に是れ神の子たりき、」(マテオ傳二十七の五十四)、神の義怒は斯の如く歴然たりしなり、基督の死を吊したる奇蹟は斯の如く顯然たりき、是を以て余は曰ふ、奇蹟を行ふ權能は、基督の死期に隱晦せざるのみならず、此時却て一大活氣を添へたりと、基督自らも嘗て己れの口より「人生命を我より奪ふ能はず、我自ら之を捐つ云々、」(ジョアン傳十の十七)と明言したる所を、此時初めて遂行したり、何となれば彼は其生命の必要を認めたる間は、永く之を保ちたれども、時既に來りて事皆預言の如く行はれたるに當りて、初めて「萬事茲に休す、」(ジョアン傳十九の三十)と云ふ最後の絶叫を揚ぐると同時に、「父よ我靈を以て膝前に托す、」(ルカ傳二十三の四十六)と大聲揚言したればなり、而して彼は斯く大聲揚言したる後、靜かに頭を傾けて氣を絶ちたり、乃ち知る、彼れの卑怯に死したりと思はるゝ事は、正しく是れ神妙不可思議なる一個の奇蹟なるを、斯の如く基督の死生の場合よりして、終始赫々たる眞理の光明發射せるを以て、事の現象を實際に目撃したる彼の百夫長と相距る一千八百年後に至り、無神論者の巨魁なるルーソーすらも、其不信の心は事の實際に

打克つ能はざりけん、昔時の百夫長と同一の證言を吐くに及びぬ、曰く「若しソクラテスの生死にして賢者ならば、基督の生死は確に神なりと謂はざるべからず」と、嗚呼是れ實に彼此同一の場合に際して、勢ひ異語同義の言を吐かざるべからざるに至りたる所以なり、後の福音書を読む者も、又之と同一の感を懷かざる者はなけん、縱令之を口にする勇氣はなくも。

余は、福音書中に記録せられたる奇蹟と、其此に記録せられたる方道とに就て詳論明叙したること實に以上述ぶるが如し、然れども若し以上述べ來りたる證據にして、尙は未だ或る一部の論者を承服せしむるに足らずとせば、他に亦顯著較明なる一大奇蹟ありて存す、此奇蹟や凡ての奇蹟中最も公明正大にして、又最も確乎不拔の一大事實に屬す、何となれば今尙は吾人の眼前に行はれつゝある所にして、凡ての奇蹟を或は前提し、或は含蓄し居るものなればなり、此奇蹟今や天地に滿ち六合に溢れ、世界到處に充塞しつゝあるを以て、到底之を拒絶否定するを得ざる一大事實となる、請ひ問ふ是れ果して何者ぞ、曰く基督公教の存在是なり、彼は實に世界萬國に充満しつ

基督公教の成立は凡ての奇蹟中最も公明正大にして最も確乎不拔の者

あるなり、而して余は此一大事實如何にして成立し來りたるやを溯究せんと欲す、換言せば、同基督公教は如何にして創立せられ、次に如何にして弘布せられ、又如何にして今日まで繼續維持せられ來りたるやを講究せんと欲す、蓋し基督の行ひたる他の奇蹟を悉く否定する反對論者と雖、此一大奇蹟は到底否定するを得ざるべければなり、今や基督公教の存在と繼續とは、片々たる一國の宗教史に係らずして、世界萬國人民の一大歴史を形成す、隨て之を講ずるは一層の快味あるを覺ゆるなり、今日基督公教は既に已に文明國民の一大宗教となりて、其十字架は東西到る處に人類の尊拜を受け、如何なる都城、如何なる村落にも、赫々たる光輝を放ち、終には一國の元首なる帝王の冠冕の上にも屹立せらるゝに至りたれど、吾人は是等の事を日常眼前に目撃しつゝあるが爲め、同教の存在を自然の結果の如く思ふて、敢て之を異とせざるに及びたれども、其實は天地の存在と同じく、思議すべからざる一大奇蹟に屬するなり、今此の一大奇蹟なる事實を確證明知せんが爲め、須らく先づ同教の創設せられたる當時に溯源して、其如何にして成立し來りたるやを考究せざるべからず、請ふ先づ頭を回らして、同教

の創立の時勢如何を追想せよ、當時羅馬帝國、即ち是れ泰西諸國を代表する老大國は、牛耳を執りて歐州各國の霸王となり、其權勢の強大なる、飛鳥を墜下せしむるの語も決して誣ならざる程なりき、同帝國の一大宗教は、同帝國を自らにして、羅馬と云へる國は乃ち是れ萬民の尊拜すべき神なりき、蓋し宇内を帶卷して、各國人民の尊拜したる神佛をも併呑したればなり、同國の帝王は國家の政權のみならず、宗教の主權をも掌握したり、國家的觀念、否國家的虛傲心は、九天を衝き四海を睥睨したりしを以て、凡そ羅馬人にあらざる者は、皆是れ野蠻國民と見做し、唯た一の希臘國民を除くの外、他は皆人間にあらざるかの如く思惟したり、一方には技藝、文學、哲學等隆昌の絶頂に達したれども、他の一方には思想の腐敗と道德の紊亂は、又實に今日の人民の意想外に出てたりとは、當時人民の過半全く奴隸の境界に沈淪して、少半數の人民より獸畜の如く使役せられたるを見ても、其一般を知るべきなり、同國人民の最大歡樂は、人の血を流して死するを見るに在りたり、角力的武士の如き者は是れが爲に養はれ居たり、人間の情慾而かも其最も耻しき所のものは、凡て皆神の名と形とを被

りて、公然宗教的尊拜を受けたり、時の祭典の如きは、往々是れ人間の情慾を祭るに在りたり、而して是等の事は皆永年の習慣となり、一定の恒例となりて、宛んと羅馬帝國それ自らと一物同體の如くなり了はんぬ、蓋し學者の傲慢之を認定し、人民の痴情之を欲望し、而して又皇帝の尊嚴之を裁可したるを以てなり、嗚呼斯の如き時勢に際し、當時初めて世に出現したる基督公教の宣教師は、果して底事を企圖したりしや、他にあらざりき、往々當時の人情に背反し、公然當時の風俗に悖反したる嚴格の宗教を全國に弘布し、延て之を宇内萬國に公布せんと云ふ事はれなりき、是れ豈奇怪千萬の畫策にあらすや、此畫策にして成効せば、眞に是れ一大奇蹟と謂ふべきなり、當時の人民に向つて四海兄弟説を教へ、他人を我身の如く愛せよと説き、奴隸を獸畜視する勿れと禁じ、童男童女に貞徳を守れと云ひ、一夫一婦には忠實を竭せと語り、婚姻は終生一回、一結不離なるべきと教へたる事、是れ實に當時基督公教の宣教師が世に唱道したる主要の件にてありぬ、今日に在りてこそ其事業の難易知るべからざれ、當時より之を見れば、是等の事を唱道して、時の人民に之を遵奉せしめんとするが如きは、

泰山を狹て北海を超ゆるよりも難かりしなり、是れ尙ほ易し、若し夫れ同國の神、然り、同國の神聖犯すべからずとなせる神、叡聖文武なる皇帝と一稱同祀せられたる神、祖先が國の創立者維持者として尊拜し來りたる神、而して時の人民に取りては誠に都合好き仁慈寛大なりし神（蓋し當時の神なる者は皆是れ人間にして、弱き人間と同じ情慾、同じ罪惡に汚れたる者なれば、民の敗徳汚行の如きは、毫も關する所にあらす、寧ろ之を賛して獎勵したるを以てなり）を排斥して、之に代ふるに徹々たる一邑に生れたる基督、工匠を以て業となしたる基督、學問に従事したるとなき基督、近頃まで現に生息し居たる基督、隨て年代の經過によりて尊嚴を加へたる者とは全く異なる基督、十字架に釘せられたる基督、所謂極惡大罪なる奴隸の酷刑に處せられたる基督、而かも同帝國の知事ピラトより、國法の權を以て、盜賊二人の間に殺されたる基督を以てし、之を唯一の神として尊拜せしめんとするが如きは、自負の極度と謂はんか、狂愚の絶頂と謂はんか、抑も又人を愚にするも程ありと謂はんか、實に之が形容にも苦むならん、然れども基督の門弟が當時羅馬の神を排斥して、之に代へしめんと企圖した

る神は、實に斯の如き者にてありたり、此神を以て尊拜せしめんとする既に至難、況んや當時の人情にも、風俗にも、歴史にも、常理にも全く正反對せる教理と共に、之を兩立併行せしめんと企圖したるをや、其至難亦想ふべきなり。

然り而して斯の如き意想外の企圖を成効せしめんが爲には、如何なる方道手段を採用したるや、詳言せば、耶蘇基督は己れを唯一の神と拜せしめ、其教を世界萬國に弘布せしむるが爲め、果して如何なる人間を使用したるや、後年同教を護擁したるキリゾストム、オグステン、トマ、ダクエン、ボスエ等の如き偉大なる人物なりしや、否々事全く此に反しぬ、今日より思へば眞個に是れ奇怪の一事、彼れ基督が此意想外の事業を遂行せしめんが爲め採用したる人間は、知もなく、才もなく、術もなく、能もなく、又試験もなき無學文盲なる者にてありき、彼等は是迄網を編すると、魚を漁するより外餘事あるを知らざりし十一人の漁夫と、一人の税吏とにてありにき、其位置低く、其職業卑しと謂ふべし、斯の如き人間を遣はして、世界の局を一變せしめんとは、餘りに人を愚にすることならずや、尙ほ歩を進めて一考せよ、耶蘇基督は是等の人間

に完備したる書籍を授け、其中に教理を精しく詳に解説して、一字一句に就ても誤る所なからしむるの準備を爲し置きたるや、否々基督は斯の如き事は毫も想起せず、彼は一字一句をも書き遺したることなし、彼は此粗朴愚庵なる人間に終始譬喩を設けて、人知の窺知する能はざる高尚玄妙なる機密を語りたり、彼等弟子は之を領會するを得たるか、賢者も得て解する能はざるもの、彼等焉んぞ之を領會するを得んや、彼等自らも其領會するを得ざりし事を屢々白狀したり、今日福音書を繙いて當時基督の彼等に語りたる事を讀まば、彼等の之を領會するを得ざりしことの決して無理ならざるを見るなり、然らば基督死去後に至りて、彼等の知識發開して基督の言論を了解するに及びたるか、否々彼等の愚蒙は尙ほ未だ啓けざりき、縦令基督が彼等に天主聖神の降臨を約して、事の如何になるべきやを預言したりと雖、彼等は是等の事を聞く際にも、其意の存する所を解する能はざりき、縦令解するを得たりとするも、基督當時の言は毫も彼等の精神に感動を與へざりき、さらば彼等は無知無識なりと雖、一の勇氣ありて千難を排し、萬艱を冒すに堪へたる人間なりしか、彼等に勇氣なかりしにはあらずら

ん、然れども其所謂勇氣なるものは、決して斯の如く高尚なるものにてはあらず、無論下等社會の人民中に認めらるゝ強勇と、其他の感情とのみなりしや明けし、基督の在世中は、彼等多少の熱愛を呈して之に扈從したり、然れども此時に當りても、屢々其漁家に歸りて、年來の漁業を事としたり、時々は基督に歸依せんか將た其敵に従はんか、自ら決する能はずして、首鼠兩端を持したることあり、畢竟彼等の基督に隨信したるは、現在其恩恵に浴して、將來にも有望の前途を想像したりしに因る、彼等の性質は往々嫉妬憎惡深くして、相互の間にも爭論の紛起したること間々之あり、時々「我儕も同じく往かん、彼と偕に死を同ふすべし、」と云ふが如き忠誠感激の言を吐きたることもありたれども、一たび其師基督が法に觸れて、公權に處分せらるゝを見るに當ては、二人を除くの外皆蛛蠅を散らすが如く四方に散亂して、其形跡を止めざるに至りたり、彼等の中に最も有爲有敢の氣に富みたる者は、遙に其師の跡を慕ふて、祭司長の庭院まで臻り、役と偕に坐して事の結局如何を觀んと欲したりし（マテオ傳二十六の五十八）、福音書の此言既に彼が死を決しても、其師に隨從して一大信任を置かんとせるに

あらざりしを示すなり、而して彼は一婢女に、爾も又ガリレヤの耶蘇の徒なるか（マテオ傳廿六の七十）と詰問せられたるとき、三年來彼れ基督と偕に在りたることを公言するの勇氣なくして、一女子の前に耻しく虚言を吐いて、彼人を知らずと斷言したり、言畢るや彼は直ちに跡を潜めて、又再び出で見はれざりき、他の一人の弟子ジョアンは基督の死に侍したれども、此時は既に基督は十字架上に釘せられありて、惡黨は其鬱憤を晴らし、刑吏は其手を休めたる後なりき、基督既に死して墓内に葬られたるに至りては、彼等は最早事茲に休したりとなし、敢て一人其死後の事を考ふる者なく、敢て一人其墓内に近く者なく、皆相共に左の一事を考へ居たるものゝ如し、何ぞや、搜索せられんことを畏れて、速に身を隠さん事はなり、基督の死後三日の黄昏、二人の弟子其師の復活を知らずして、憂色を帯びて基督の事を語りつゝ、旅行せるを見るときは、當時他の凡ての弟子等も亦皆斯の如き感慨を浮べて其心事の無聊たりしを知るに足るなり、彼の二人の弟子は快々としてセルザレム城を去り、エムマオの一郷に行きつゝ、語て曰く、此は乃ち是れ我儕の望を屬して、イスラエルの人民を購はん者

と信任したる者なるに、事の成る今や既に三日云々、(ルカ傳廿四の廿一)、亦以て彼等の失望落膽せるの状を観るべきなり、斯の如くして彼等は終に其家に歸らんと決しぬ、曰く「我往て漁せん」、衆之に和して曰く「我儕も亦爾と偕に往かんのみ、」(ジョアン傳二十一ノ三)、之を要するに、ガリレヤの一工匠なる耶蘇基督が、自己の苦罰の紀念なる十字架の外、何等の武器をも與へず、何等の書籍をも授けずして、突然「爾等往て萬民に教へよ、」(マテオ傳二十八の十九)の言を以て、世界萬國に派遣したる當時の所謂宣教師なる人物は、實に斯の如き者にてありたるなり、是等の事柄を讀む者は誰か無稽の捏造説、有り得べからざる想像と思はざる者あらんや、蓋し常理常識を有せる人間には夢寐にだも想起せられざる狂言愚説と見做さるべきや必せり、世界の宗教界、精神界、道德界の局面を一變せんとするが如き一大畫策を遂行するが爲めに、斯の如き人間、斯の如き方道を採用する者は、恐らくは天下に之れあらざるべし、然り、疑なく之のあらざるなり、何となれば合理的事業の本來固有の性質とも云ふべきものは、手段を目的に適合比例せしむるにあり、目的不相應の手段を取つて事を行ふが如きは、

畢竟是れ狂者盲者の所爲のみ、此事は萬民皆承認して、一人も之を否定するものなからん、然らば則ち耶蘇基督の畫策なるものは、人知の眼光を以て之を観察する時は、眞個狂愚の絶頂と謂ふべきなり、苟も醒意を有する人物ならば、之を見て又狂愚の名を附して、齒牙に懸くるに足らずとなすべし、然るに吾人の最も奇怪となすべきは、此畫策の斯く狂愚なるにも係らず、實際に於て歴然遂行せられて、成效の好果を結びたる事是なり、此狂愚は常理に勝を制して、眞個に最後の勝利者となりぬ、此夢、此想像は果して實にせられて、世界の存在よりも顯明較著なる一大事實となりたり、基督公教、換言せば、磔刑に處せられたる一猶太人の宗教が、ガリレヤの十二人の漁夫を以て、世界萬國に充滿するに至りたりと云ふは、是れ實に人間の常理を以て律すべからざる事なり、此十二人の漁夫は其主基督の在世中、毫も其教を領會するを得ざりしにも拘らず、師の死するや否や割然悟達し、昨日までは愚狂の漁翁、今日忽ち世界の大家となりて、哲學問題の尤も高尚なるもの、又尤も主要なるものを一見了解するに至れるとは、實に是れ奇怪の至りならずや、彼等は乍ちにして人間本末の一大問

題を容易に解釋するに至りて、世の大知能、大人物をして背後に瞠若たらしむるに及びぬ、世の所謂碩學鴻儒、大聖至賢と仰がれたる人物も、是迄人生命運の一大問題に就ては、未だ確たる斷言を下す能はざりしに、何事ぞ彼等漁夫は毫も遲疑なく躊躇なく之を解説明言するに至るとは、ソクラテス、プラトンの黙々たりし所、孔子、孟子の黙々たりし所、漁業を職とせる伯多祿と若翰は、公然先生的に言論したり、而して彼等二人は其言論の眞理なるを確認し、其教理の神知より出でたるを篤信したるの太甚しきは、彼等が如何なる凌辱を蒙りても、如何なる責罰を加へらるゝも、打撃せらるゝも、鞭撻せらるゝも、囹圄に鎖ざゝるゝも、更に顧慮する所なく、公然斷言しつゝあるを見て知るべきなり、彼等及彼等に歸服したる隨信者は、狂と呼ばれ、愚と稱せられ、有らゆる恥辱を受け、有らゆる嘲笑を蒙り、一切の人類より嫉視せられ、世界萬民より排斥せられ、東西到る所嚴法酷罰に處せられたるも、彼等は神志悠々、顔色自若として、其行動の公明なると、其言論の眞理なるを公言し、如何なる大哲の教と雖、彼等の弘布する教に遠く及ばざるを證明したり、此點に就ては世の罵言嘲笑も、

峻法嚴刑も、更に損益する所なかりき、堅忍不拔なる彼等は、百難を排し、萬艱を冒して、苦楚危険の世間を自由自在に横行闊歩したり、而して狂愚なりと呼ばれたる彼等の言論は、高尚偉大にして一千八百年來世界到る所に熟讀せられ、玩味せられつゝあり、猶ほ焉よりも感驚すべきは、彼等の言論は凡ての人の精神に入り、凡ての人の口舌に上りて、能く之を解釋するを得る者は知者と稱せられ、能く之を引用する者は才子と呼ばれ、又能く之を實行する者は聖人と尊ばれ、大人物と仰がるゝ事是なり、而して尙茲に一の注目すべき事あり、彼等の基督と偕に在りしや、相互には往々異論争説ありて、毫も一致和合せず、今日世上の人々を離間する所の嫉妬、野心、利己主義等は彼等の間にも之ありて、屢々相互の心情を隔離したりしが故に、其師基督も時々之を制止して、彼等の間に秩序と和平とを維持せしむるに務めたることあり、彼等は基督の傍に在りては斯の如く其師の手を煩したり、然るに一朝其師の死するや、從來の悪感忽ち消失し、今迄吳人と越人の觀をなせし彼等、今や斷金の友となり、刎頸の交を結びて、利害の觀念も之れを離間するを得ず、利己の主義も其中心に入るを得

ざるに及びたる事、是れ實に吾人の留意すべき所なり、彼等は是迄其足未だ會て自國を出でたる事なき者、其口未だ會て方言の外語るを知らざりし者なりしにも係らず、乍らにして世界の舞臺に跳り出づる一大畫策を案想し、各自東西に離れて、單身萬民の中に入り、耶蘇基督と其教を宇内に知らしめんと企てたり、彼等は斯の如き基督と其教とを弘布する唯一の目的を以て、南北東西に出發し、口を開て初めて語り出るや、不思議にも其言は凡ての人民に領會せられたり、各國其言を異にしたるにも係らず、彼等の語るや萬民均しく之を了解するを得たり、彼等は東西に隔離せるも、其言動に毫も撞突矛盾の恐はなかりき、彼等は相互に謀じ合せて出發したるにあらず、又一定の書籍を掲げて宣教したるにあらず、然るに彼等の語る所は東西符節を合するが如く暗合冥投したり、ヒリップの亞細亞に於て語りたる所は、アンデレヤのスキト人に語りたる所と更に異なるなかりき、シモンの波斯に在りて教へたる所は、トマス、バルナバの印度に在りて語りたる所と毫も殊なるなかりき、ジョアンは小亞細亞に、ペトロ、マルコは以太利亞に、ポーロは尙其他の諸國に布教傳導したるなれども、其語る

所は彼此の間に秋毫も相違なかりき、斯くして耶蘇基督の姓行と其教とは、幾許ならずして彼等の爲めに世界中に知らるゝに至りたり、彼等は勿論百の艱難を嘗めたり、百の障害を蒙りたり、罵詈せられたり、嫉視せられたり、然れども彼等の堪忍は遂に耶蘇基督即ち猶太の一工匠を、唯一の神と仰がしめて、人間の私慾に反對せる其教を、世界多數の人民に守らしむるに至りたり、是に於てか十字架上の愚者は遂に天下を取るに及びぬ、狂愚なる十二人の漁夫は遂に最後の勝利者となりぬ、夢と想像説は歴然たる事實となりぬ。

然りと雖茲に一考を要すべきは、彼等漁夫は何を目的として斯の如き一大畫策を企圖したるや、其企圖する所を實行するに當りて、何の利益する所ありたるやの事はなり、彼等若し名利を目的としたりと云はゞ、或は在世中に之を求め、或は死後に之を求めんと欲するの意ありたるかと區分して論せざるべからず、在世中に之を求めんと欲したるか、然らば則ち何故彼等其希望に反對して、世の有らゆる嘲笑、愚弄、憎惡、嫉視、及び其他の虐遇酷待を甘受したるや、彼等にして若し現在の名利を目的としたりとせば、

實に一大拙策を取りて大失敗を招きたる者と云ふべし、何となれば彼等の喫したる苦楚艱險は、全く其希望の反對に出でたればなり、然らば則ち死後來世に於て別に希望したる所ありとせんか、然るときは彼等は天上永遠の神より、其不朽の靈魂の一大幸福となるべきものを仰望したるや明かなり、果して然りとせば、彼等は何を以て世界萬民を欺くが如き、奸策を廻したりと云ふべけんや、隨て彼等が赤身徒手にて、千難萬艱の中に投入して、而かも能く斯の如き一大企業を遂行成就するを得たるは、全く彼等が神の精神に活かされ、眞理の光明に照らされて言動したる證據は明々白々となるなり。

尙ほ上來記述したる所に就て考察すべき事あり、彼等は斯の如き大事業を天下に扶植するに當りて、其心事直に改變して、同僚忽ち相一致するに至りたる事はなり、是れ其原因果して何くに在りとすべきや、他莫し、彼等は其師の言の虚ならざるを明かに知認したるに因るなり、基督は其在世中彼等に斷然明言して曰く、我死して後三日目に必ず復活せん、又我爾等に訣別して昇天したる後、天より特殊の光(天主聖神の事)

を降して、凡て爾等の知らんと欲する所、及び人々に教ゆるが爲め知るべき所の事を悉く領會せしめ、之と同時に爾等がセルザレムに布教し、猶太に布教し、世界中に布教するが爲め、須要の力と勇氣とを與へしめん云々と、而して彼等は果して基督の死後三日の曉に蘇生したるを目撃したり、又果して天より一大知力を受けて、今迄愚庵卑怯なりし彼等は此時忽然變じて、博覽強記の學者となり、堅忍不拔の勇者となりぬ、請ふ彼等變後の状態を仔細に考察せよ、彼等は無知無能の人間にてありき、彼等自らも已れを稱して「土器」と云へり、然れども彼等は此土器の中に神の知能を享受したり、彼等の學力は學んで得たるにあらず、直接天より之を賜はりたるなり、故に彼等は世の學者の如く其學力を示して、世に誇るが如きことをなさざりき、世の所謂學者なるものは、一室に潜居して、高遠なる道理を空想し、形而上の事物を夢想したる後、忽ち世に出で來りて、傲然已れの發明を衆人の覽に供するを常とす、彼等は全く是等の學者の所爲に反對なりき、彼等は決して「我れ研究したり、觀察したり、推論したり」杯と力學苦心の結果を吹聴したることなし、彼等は推理したることなし、議論し

たることなし、彼等は焉れより一層正直なる、一層單純なる道を以て學びたり、故に曰く「我等は屢々目に見、耳に聞き、手に觸れたる所の事を卿等に布教す、」(シヨア前書の一の一)、基督の復活に就ては、曰く「爾等の殺したる所の者、神之を生命に復甦せしむ、」(使徒行傳三の十五)、其言論に於て毫も忌憚する所なく、又毫も遲疑する所なきを見るべきなり、彼等は其語る所の真理あるを知認せるの深きは、如何なる障害、如何なる艱險にも挫屈せざりしを見て知るべきなり、曰く「蓋し我等見る所、聞く所のものは、之を言はざるを得ざるなり、」(同書四の二十)、又曰く「神に聴くは人に聴くに愈さるにあらずや、是又義なり、爾等自審せよ、」(同書五の廿九)、彼等は何れも皆斯の如き確信と、斯の如き明知の下に持續して、一步も譲らず、死に至るまで顧ざりき、非道なる迫害に遭遇するも、敢て一人其道を曲ぐる者なく、敢て一人其布教を中止する者なく、殘逆なる刑罰に處せらるゝも、更に其不平を訴ふる者なく、更に其不義を怒る者なし、彼等の目に見たる所、耳に聞きたる所の真理は、彼等の心事を慰安して餘りありたり、彼等は此真理を胸中に懷き居たり、故に凡ての苦楚艱險の下

に立ちても、神志悠然、顔色自若たりしなり、鞭撻せられ、屈辱せられたるときは、欣然として歡喜の聲を放ちたり、感銘の涙に咽びたり、以爲らく我師耶穌基督の聖名の爲めに此苦を受く、感何ぞ極らんと、彼等一生の言動及び其死生の際に處したる心事は、實に斯くの如くなりき、而して彼等の死するに當りては、何れも皆致命の血を印して、其言論、其布教の眞實無妄なるを確證したり、吾人は是等の言動を見て、如何なる結言を下すべきか、金口若翰の言は優に吾人の言はんと欲する所を盡したり、吾人之に一辭をも加ふる能はず、其言に曰く「其愛す所の者の死したる後、日に月に之を忘却し行くは、人情一般の常なり、然るに使徒等は全く之に反しぬ、彼等は(其愛する所の)基督の在世中は、之を遺棄し、之を拒否したり、然れども其一たび磔刑に處せられて死するや、彼等は之が爲めに死するを悔いざりき、嗚呼是れ實に彼等が其師基督の復活したる眞理を實見したるの明證にあらずや、去る者は日に疎き人情の常事を捕捉し來りて、吾人の正しく結論せんとする一大眞理を證明し去りたり、快と謂はざるべけんや。

簡言を以て上來述べ來れる所を結論せば、十字架に釘せられて死し、死して三日目に、復活したるガリラヤの一工匠と、此事跡を世界萬國に報道したる同國十二人の漁夫は、即ち是れ今日六合に彌滿せる基督公教の外形的基礎なりとす、今單に之を一見するも、到底常理を以て律すべからざる事一目瞭然たるが故に、此常理を以て律すべからざる奇怪の事が、實際に於て不思議にも成効したるを追想するときは、如何なる人と雖此畫策を案出して、之が遂行を管理したる原動者如何を尋究せんと欲せずんばならず、斯の如き奇怪の手段によりて、斯の如く高尚なる目的に達せんことを欲するは、是れ果して何故ぞとは、當時の使徒等が第一着に其念頭に浮び出したる所にして、爾來機に際し折に觸れて、之を明言し、之を詳論せんことを務めたるものなり、蓋し今日の吾人が此事跡の歴史を讀んで喫驚する所、當時の使徒等は耳に之を聞て、吾人よりは尙は一層驚愕を喫したるなり、而して其驚愕決して無理ならず、何となれば吾人は今日に在りて、既に事の成効を見たる者なれど、使徒等は當時未だ其成効如何の事を毫も知らざりしが故、事愈々奇怪千萬に思はれたればなり、當時に在りて單だ其外部に顯は

れたる事のみを以て裁判する時は、眞個に彼等使徒の言動は狂愚と障礙と見らるゝより外なかりしなり、聖保祿は當時既に之を明言して曰く「我儕は十字架に釘せられたる基督を傳ふるを以て、猶太人に於ては礙となり、希臘人に於ては愚となる、然れども神の撰に當れる我儕に於ては、基督は却て是れ神の能なり、知たるものなり、」(コリント前書一の二十二)、同聖は尙ほ詳かに之を解説して曰く「蓋し世は神の智に由る、既に智に由るも、神を知らず、是故に神は傳道の愚を以て、諸信者を救ふを喜びぬ、」(同章の二十一)、然り、神は初めに天地萬物を造出して、其智能の大なるを人に表示したり、而るに人の頑冥なる、此一大智能の事業の結果たる宇宙を觀望しても、之が原動者たる神を認むるを欲せざりき、漸次に之を輕視し、之を忘却し去りて、終には之が代りに日月星辰、人畜草菜、甚しきは石像木偶を尊拜するに至りたり、是に於てか神は先づ之を遺棄して、其五感の傾く所に任じ、其敗徳の極まる處に放ち、其傲慢、其奸智、其想像等の誇稱し、曲論し、空説するが儘に放任したり、而して其敗徳汚行の極度に達し、虛傲空言の沸騰するに至りたるとき、神は再び己れの一大智能を

發顯せんとしぬ、是れ即ち人間の夢寐にだも想起するを得ざる手段方法を使用して、破天荒の一大事業を遂行し、頑冥なる人間と雖見て以て是非とも神の力を認めざるを得ざらしむるに至らしめたる所以なり、神は一大智能の結果たる宇宙を以て、己れの第一の發顯をなしたれども、人は此結果に對して其原因に感驚せざりき、是に於てか非常異様なる手段、一見狂愚千萬と思はるゝ方道を取りて、己れの第二の發顯を企てたり、何となれば十字架に釘せられ、盜賊二人の間に殺されたる工匠を、唯一の神として拜せよと云ふ奇怪千萬の事を世界萬民の前に提出したればなり、人は大智大能の結果に感驚せざりき、茫々たる宇宙、森羅の萬象は、人間の長眠を醒す能はざりき、是を以て神は狂愚の極度に卑賤の極度を加へて、人間長夜の惰眠を攪亂したるなり、雷に愚夫愚婦のみならず、雷に女子小人のみならず、世界の碩學鴻儒と仰がるゝ者にも、一世代の大智識と尊ばるゝ者にも、跪伏して磔刑に處せられたる神を拜せよと命令的に提出したり、而して之が提出者としてガリレヤの漁夫十二人を特撰したり、嗚呼是れ實に奇怪の道と謂ふべし、聖保祿は之を明言して曰く「神は世の愚者を撰で以

て智者を愧死せしめ、世の弱者を撰んで以て強者を愧死せしむ、(同章二十七)、世の愚者と弱者とを以て、天下の智者強者を愧死慙殺せしむとは、何ぞ其方道の奇々怪々なるや、尙ほ保祿をして其語を續がしめよ、彼は公然斷言して曰く「神の愚は其智人に過ぐ云々、」(同章二十五)、其故は何ぞや、人間の常理を以て律す可らざる方道を探りて、驚天動地の一大事業の目的を達したればなり、其方道の奇怪なる丈けそれ丈け、其目的の達せられたることは感驚に堪へざるを覺ゆ、目的に相當比例せる手段を採用して事を行ふは、尋常の事なり、自然の事なり、毫も感驚すべき奇蹟にはあらず、毫も注目すべき事業にはあらず、世の人間は皆此の如くなしつゝあるなり、神の事業の神の事業たるを知らしむるには、須らく非常異様の手段方道を用ゐざるべからず、頑冥無覺なる人間に之を知らしむるに當ては、猶更然るなり、目的相應の方法を探りて事を行ふは、神の固有本然の行動にはあらず、彼は元來方道なく直に目的に達する者なり、換言せば、其萬能力を以て、一言の下に無より有を生ずる者なり、此天地萬物、即ち是れ神の第一の發顯者たる一大美觀は、實に此の如く造出せられたり、神の第二の發顯

者たるべき基督公教も、亦此の如く創設せらるべきは、固より其分なり、後者の事業も、前者の事業の如く、無より有を造出するの偉観なかるべからず、別言せば、基督公教をして明かに神の事業なるを知らしむるには、手段方法なく創立せらるべかりしなり、而して事果して此の如く成就せられたり、基督公教の創立には手段方法は有れども無きが如くなりき、若し之ありとせば、其ありたる手段方法は、却て是れ同教の成立に一大障礙となるべき性質を帯びたるが故、愈々益々感驚すべき奇蹟となるなり、神の手腕によりて同教の築かれたる事は、是によりて一層明々白々となるなり、斯の手段によりて斯の大業成就せらる、誰か之を見て、事皆神の不可思議なる攝理に出でたるを識認せざる者あらんや、當時の使徒等は明かに此事を知悉して、深く神の深意の在る所に感激したり、故に彼等は又其教を世界に建設せんとするとき、世の手段方法等は全く無用なるが如く思考したり、聖保祿は猶太の學者の中より歸信したる者、聖書中に在りては第一等の記者たるべし、當時に在りても蓋し第一等の能辨家たりしなるべし、然れども彼は基督の教を弘布するに當りて、其學問の力、其辨舌の力を頼にはせざりき、蓋し耶蘇基督に對する信仰は、人間的の學力辨論に基かずして、單だ神の徳能に基くを知らしめんが爲めにありたればなり、彼は學術の故郷、技藝の林叢と稱せられたるも希臘に於ても、彼のコリント人に向つては、「我は磔刑に處せられたる耶蘇基督の外、毫も知る所なし、」(コリント前書二の二)と公言したるなり、彼れの弘布したるものは、十字架にてありき、彼れの口にし、胸にしたる所のものは、耶蘇基督のみにてありき、彼は凡て自家固有の智能を以て之を敷衍するときは、却て是れ基督の十字架を暗ますの基たりと思惟したり、其言に曰く、「智言を以てせざるは、基督の十字架を虚に歸せんを恐るればなり、」(同書一の十七)、智能を以て基督の教を弘布するは、其十字架を虚に歸するに該當すとは、嗚呼實に奇言と云ふべし、彼は此の如き意を以て、成るべく十字架を裸體にして、世に示さんことを欲したり、又實に十字架を世界到る所に植立して、萬民に其珍らしき勢を示すが爲には、之を裸體にして露出せざるべからざりしなり、裝飾的衣裳を被らせんよりは、裸體の恐ろしき眞理は、却て一層の勢力を有したるなり、蓋し神は常道に正反對せる方法を以て、自己を發露

を頼にはせざりき、蓋し耶蘇基督に對する信仰は、人間的の學力辨論に基かずして、單だ神の徳能に基くを知らしめんが爲めにありたればなり、彼は學術の故郷、技藝の林叢と稱せられたるも希臘に於ても、彼のコリント人に向つては、「我は磔刑に處せられたる耶蘇基督の外、毫も知る所なし、」(コリント前書二の二)と公言したるなり、彼れの弘布したるものは、十字架にてありき、彼れの口にし、胸にしたる所のものは、耶蘇基督のみにてありき、彼は凡て自家固有の智能を以て之を敷衍するときは、却て是れ基督の十字架を暗ますの基たりと思惟したり、其言に曰く、「智言を以てせざるは、基督の十字架を虚に歸せんを恐るればなり、」(同書一の十七)、智能を以て基督の教を弘布するは、其十字架を虚に歸するに該當すとは、嗚呼實に奇言と云ふべし、彼は此の如き意を以て、成るべく十字架を裸體にして、世に示さんことを欲したり、又實に十字架を世界到る所に植立して、萬民に其珍らしき勢を示すが爲には、之を裸體にして露出せざるべからざりしなり、裝飾的衣裳を被らせんよりは、裸體の恐ろしき眞理は、却て一層の勢力を有したるなり、蓋し神は常道に正反對せる方法を以て、自己を發露

し、常理を轉覆する事實を以て、之を萬民に信せしめんと欲したればなり、是故に使徒等の布教するや、決して議論の道を以てせず、單に其見聞したる所の事蹟を直言したるのみ、又其直言する所の眞理を證明するが爲めには、病者を癒すとか、死者を蘇するとか、其足跡の印する地到る處に、神妙不可思議の事蹟を行つて、反對論者をして一言も口にするを得ざらしめたり、彼等は區々の議論を費すよりは、歴然たる事實を示して、其師基督の遺言の遂行せらるゝを承認せざる時は、到底事の解釋を試むる能はざらしめぬ、其遺言とは何ぞや、「往て萬民に教へよ、我常に爾曹と偕に、世の末に至らん云々、」(マテオ傳二十八の二十)の事是れなり、彼等は此遺命を奉じて、世界萬國に出て、到る處に不信と戦ひ、憎惡と戦ひ、世權と戦ひつゝ、毎度勝を制したり、百の障害も此遺命の遂行を阻碍するを得ざりければ、果して神が歴然彼等と偕に在りしを知らしめたり、彼等が東西到る處に成効したる事は、他の議論、他の解説を要せずして、反對論者の口を欲して、其背後に啞若たらしめたり、是故に有名なる聖哲オグステンは、此事に就き決然斷案を下して曰く「基督教の初めて世に顯はるゝや、

一見信じ得べからざる事と見做されたれども、實際に於ては同教の萬民より信せられたる事は争ふべからざるに至りぬ、然らば則ち同教が或る點に於て信じ得べかりしものたるや明なり、而して彼は自然の道によりて信じ得べからざりしが故に、超自然の道、即ち奇蹟を以て信じ得べかりしものと證明せられたるなり、」(同聖の「神國」第二十二卷八章)、此問題に就ては他に解釋するの道なし、何となれば今日に至りては同教の存在は、拒否すべからざる事實となれり、而して同教の今日に存在せるは、昔時に於て必ず其創始したる時あるべきや明なり、何とあれば今日の存在は昔時の創始の繼續に外ならざればなり今、同教の斯く創立せられ、斯く繼承せられたる事を奇蹟にあらずと斷言せんか、即ち是れ一大奇蹟の存在を承認するにあらずや、奇蹟なく同教の成立して今日まで繼續し來りたるは、却て是れ一大奇蹟となすべき所以なればなり、然らば則ち反對論者の否定は、直に彼れ同教が眞理によりて扶植せられたる斷定となるなり、論じ去り論じ來りて此に到れば、奇蹟の存在は到底拒否する能はざるものなり、一の奇蹟を否定せば、他の奇蹟を認定せざるべからず、而して其否定は遂

に一大奇蹟の存在を承認せざるべからざるに至るとは、嗚呼又奇ならずや。

今日奇蹟
の数の成
少したる
所以

然れども尙ほ茲に一の難問留存す、是れ蓋し最後の難問なるべし、何ぞや他莫し、何故創立の當初に於て斯く許多の奇蹟ありて、今日に至りては寂然其跡を絶つに及びたるやと云ふ事はなり、先づ第一寂然其跡を絶ちたりとは云ふ能はず、今日に於ても基督公教會に在りては、其教を維持し、繼承して、其眞理を發揮しつゝある奇蹟は、今尙ほ依然として存するなり、何となれば耶蘇基督は其言を食みたること一刻半時も之なし、其遺言の如く世の終りまで弟子と偕に在り、又其弟子と偕に在るの事實を、奇蹟を以て屢々證明し、永く之を遺棄するが如き事は決して之なし、勿論今日に於ては同教創立の當時の如く、顯明較著なる奇蹟の頻繁を見る能はずと雖、此には蓋し理由あるなり、其理由とは他なし、今日に於ては同教は既に已に世界到る處に扶植せられたるが故に、奇蹟の必要殆んど之なきに至りたる事は是れなり、請ふ余をして之を詳論せしめよ、基督公教の目的とする所は、當初にありて極刑の具なる十字架を世界に樹立するに在りたり、而かも下等社會に屬する十二人の漁夫を以て、之を樹立せんとするに

在りたり、試に一考せよ、神が斯の如き賤民を以て、斯の如き刑具を、世界萬國に樹立せしめて、世の道徳界、宗教界、精神界の局面を一變せんと欲したりとするときは、其道果して何れに出づべかりし、非常の事業を行ふには、非常の道を要す、而して其非常の道所謂超自然の道は、唯だ奇蹟あるのみ、是れ實に初めて同教を世に扶植するに當りて、必要缺くべからざる唯一の道なりとする所以なり、然り、人民の迷夢を醒し、其視聽を聳動し、其注意を惹起するには、奇蹟の警鐘實に必要なりしなり、故に神は當時強く之を打撃し、長く之を鳴響せしめたり、時の人民は是が爲に往々長夜の惰眠を攪亂せられたり、此時に當り奇蹟の行はるゝ實に頻繁、東西到る處に種々異様の形體を被りて、公然現出したるを以て、遂には一人も之を知らざるものなきに至りぬ、而して此奇蹟は毎度歴史的に證明せられたるが故に、其結果明かに基督公教の天授神立の教なるを示したり、何となれば奇蹟は神の力にあらずんば得て行ふ能はず、而して奇蹟は偶然故なく行はれたるにあらず、基督公教の神によりて成立したるを證明するが爲にてありたり、然るに奇蹟の奇蹟たる所以は、既に歴史によりて明かに證

據せられたりとするときは、其取つて以て證明せんとする所の教の、神によりて成立せるものなるは、自ら推理せらるゝなり、夫れ既に一たび證明せられたる以上は、再三再四同一の事を證明するの必要はなし、基督公教は業に已に天授神立の教として世界萬國に扶植せられたり、今日に在りて又々之を證明するの理由なし、是れ即ち今日奇蹟の數の昔時より減少し來りたる所以なりとす、今茲に一大築造物を建立すと假定せよ、其基礎を据ゆるは唯だ一回に限るなり、其築造如何に高崇雄大にして、巍然雲を摩するに至るとするも、築造物の同一なる限りは、其基く所の土臺も亦依然として同一なり、基督公教と云ふ一大築造物に至りても亦然り、奇蹟と云ふ基礎は既に据へ附けられたり、同教が此基礎の上に建立せられたるも、又既に世界に知られて、天下萬衆の具瞻する所となりぬ、今日に至りては同教は世界萬國に扶植せられて、凡ての國の人、凡ての身分の人、皆之を信奉遵行するに及びぬ、然れども同教が當初に於て一たび基きたる土臺は、今尚依然として存立せり、歲月の經過するに従つて、築造は益々雄壯偉大となりて、今や將に發然として天を衝かんとす、然れども其土臺に於て

は毫も變更なし、彼は萬古依然たり、日々一階を一階の上に加へつゝ行く偉大の築造物は、此萬古依然たる土臺の上に屹立して、世の終末まで至らんとす、歴史は吾人をして同土臺の建立せられたる當時に溯源せしむ、建立以來今日に至るまで既に一千八百有餘年の星霜を經過す、然れども其間に毫も變更損益なくして、宛も昨日建立せられたるが如き觀あり、同土臺の上に築造せられたる基督公教に至りても、此一千八百有餘の長大なる年間を奔るに、同一の歩武、同一の比例を以てしぬ、彼は一猶太人の十字架と、同國十二人の漁夫の言語を立脚の地として、正々堂々の勢を以て、世界の萬事を風靡しつゝ、一大長足の進歩をなし來れり、羅馬帝國にも勝を制したり、野蠻人にも勝を制したり、毎世紀世に隱見出沒したる凡ての異教異説にも勝利を占めたり、一千八百有餘年來種々に反對し來れる人間の情慾にも勝利を占めたり、哲學者の議論にも凱歌を奏し、政治家の畫策にも凱歌を奏し、如何なる異論妄説起るも、直に之を闢て廓如たりしなり、如何なる黨與仇敵出づるも、忽ち之を打撃して一敗立つ能はざるに至らしめたり、帝國興廢し、王國更迭し、人民死生し、政治變改する間に立て、

同教のみは全然人間的扶持の外に屹立し、毅然として人事の凡てに反抗しつゝ、其教示する所の真理と共に永遠不滅、萬古依然たり、是れ實に吾人が同教の存在を以て世の終局まで繼行せらるゝ一大奇蹟とあす所以なり、萬能なる神の手腕茲に在るにあらざれば、焉んぞ此の如くならんや、寄語す、同教の反對論者よ、爾等福音書中の凡ての奇蹟を否定せんと欲せば、隨意に否定せよ、唯だそれ此歴然たる一大奇蹟に至りては、爾等の到底埋没する能はざる所なるを知れ、此一大奇蹟の唯だの一つにても、基督の神なる事と、其教の神立なる事を證明して餘りあり、而して之が講究は決して難きにあらず、眼を開て目撃し、目を閉ちて一考せば可なり。

事茲に到る、故を以て彼の有名なる不偏不黨の一法師は、距今幾んど一千八百有餘年前に當り、既に茲に見るありて、萬古味ふべき公論を吐きたり、今左に之を吐きたる場合と語句とを記さん。

耶蘇基督既に死し、弟子等が出で、其十字架を弘布せんとするに當り、再二國法の爲めに捕はれて、ゼルザレムの法庭に招致せらるゝ、時に司祭の長嚴然之に詰問して曰く

「我儕既に爾等に此名を以て布教するを嚴禁したるにわらずや、然るに爾等乃ち遍くゼルザレムに布教し、此人の血を以て咎を我儕に歸せんと欲する乎、」時にペトロ他の使徒と相共に答へて曰く「神に聽くは人に聽くより愈さる、我列祖の神已に爾等の木に懸けて殺したる所の耶蘇を甦へし、神且之を己の右に擧げて君となし、教主となし、以てイスラエルの民に悔改と罪赦とを得せしむ、我儕は即ち此事の證を爲す者なり、神の隨信者に賦與する所の聖靈も、亦證を爲す、衆之を聞て暴怒し、將に之を殺さんと謀る云々、是れ實に有名なる法師をして、萬古の名言を吐かしめたる場合にありにき、而して其名言に就ては歴史は左の如く記せり。

一フアリゼイ人あり、ガマリエルと名く、教法師にして衆民の尊ぶ所の者たりき、此時議會の中に立て、使徒をして暫く出でしめ、徐ろに語て曰く「イスラエルの人も、此數人を處分するに當ては、須らく慎重する所なかるべからず、蓋し前者はテオダスなる者起て、毎に自ら矜詡せるとき、約そ四百人あつて之に附く、然れども其誅に伏すや、從者散じて有る無きに歸す、其後登藉の時ガリレヤのジユタなる者起て、民を

誘ひ、多人之に従ひしが、彼亦亡びて、從者盡く散じぬ、今や我れ卿等に語らんとす、宜しく此人を遠けて之を容すべしと、蓋し其謀、其爲若し人に由らば、自ら毀れん、若し又神に由らんか、卿等は之を毀つ能はず、且恐らくは神に逆はん、衆其言を然りとす云々、(使徒行傳五章參看。)

嗚呼若し此賢明なる法師をして今の世に再生せしめ、當時唯だ其生出の歴史の初頁をのみ一見したる基督公教が、爾來神妙不可思議の道を以て成立し來りたる完備の歴史を讀ましめ、殊に彼の十字架が偉大なる殿堂の上に屹立して、世界萬民を制御するに至りたる實況を見せしめなば、彼れ將た如何なる言を吐くべかりしや。

余は思考す、彼れ若し今の世に在りて基督公教の實況を目撃するあらば、必ずや彼のペイルが正意誠心より吐きたる言と畧ぼ同一の言を吐て、今日同教に反對する凡ての曲學阿世の徒に、頂上の一針を加へんことを、其言に曰く

「福音は名聲もなく、學力もなく、辨才もなく、而かも到る處に酷遇虐待を受けて、全く人間的支持の道を離れたる人間より弘布せられたるにも係らず、幾許ならずして

忽ち坤輿球上に成立するに至りたるは、是れ實に争ふべからざる事實なり、而して神の事業たるを證明するものは、亦實に此事實に在るなり。」

然れども反對論者は此結論(基督公教の成立は神の手腕と云ふ事)を遁れんが爲には、畢生の精神を傾け、滿腔の熱血を濺て、極力極論殆んど遺失する所なきに至れり、彼等は福音書を一句々々づゝ酷讀して、難論詰問の材料を求めんが爲めに、半言隻句をも忽諸に附せず、歴史的事實に至りても、飽くまで其詳細を探りて、耶蘇基督及其弟子等の性行に反對する記事を見出さんとを務む、同教の教理に至つては、一ヶ條々々づゝ之を道理の裁判に懸け、何卒して健全なりと自稱する哲理に撞突する所を摘發せんとを努む、其最も太甚しきは、同教の信仰の定義、道德の原理より演繹せらるゝ結言に至るまで、一々之を講究して、個人の生活に取りては如何、一家の生活に取りては如何、天下の生活に取りては如何と、同結言の實施應用までも周到綿密に調査す、近代に至りては同教は科學に對して如何、哲理に對しては如何、技藝に對しては如何と云ふ事を頻りに喋々す、蓋し彼等が基督公教を排斥否定せんが爲に、其無理酷逆なる手

を觸れざるものは、天が下に一事一物もなきに至れりと言ふも決して過言ならじ、然れども今日に至るまで彼等の企圖は始終水泡に歸し去りたり、否、其結果往々彼等の望外に出でたり、蓋し眞理の性質たる、明玉寶石の如し、之を摩擦するときは、必ず光明を發射す、我基督公教も亦此の如し、反對者が他山の石を持ち來りて之を打撃するときは、其度毎に新らしき答辨を督捉し、新らしき解釋を惹起し、以て今迄潜伏し居たる眞理をして、好機の場合に赫々たる光輝を迸射せしむ、斯くの如くなるを以て、日々難論詰問の紛起するに従て、同教の證據も亦益々顯出し、攻撃せられつゝ日に月に其眞理を世に發揮するが故に、反對者の意は同教を人に信せざらしむるにあるにも係らず、其論は却て同教の信せざるべからざるの理由を公然表白するに至るなり、是故に同教が天授神立の教なりと云ふ問題は、一千八百有餘年來世に提出せられありて、代々に於て左の二個の結言を下ださざるを得ざらしむ、曰く若し基督公教神より制定せられたるにあらずんば、彼れが世界に神妙不可思議の存在をなすは、如何にして之を解釋すべき、若又彼れの神より制定せられたること明瞭なりとせば、何故之を信せ

ざると云ふ事はれなり、毎世紀世に生れ出づる反對論者は、種々に研究し、種々に議論すれども、其究極は始終以上二個の結言に歸着す、若しそれ事の真相を云はんか、同教は神聖なる眞理と嚴格なる道德によりて成立するが故に、彼等は容易に之を信するの義勇出でざるなり、果して然りとせば、反對論者は如何程研究に研究を加へ、如何程議論に議論を重ねるも、到底自他の心を満足するを得ざるべし、而して其事却て同教の眞理を發揮するに歸するときは、彼等は實に一舉兩失の勞を取る者と謂ふべし。

然りと雖眞を愛し義を好む義勇の人士に取りては、以上の問題即ち基督公教の天授神立の教たる事は、疾く既に解釋せられて、今や一點の疑ふべき所なし、昔者ダランペールはヘルヌーイの賛に於て語て曰く「同教を神の事業なりと認めたる大人物の名簿を示すことは、極めて易々たり、此名簿は同教を研究せざる前に於て、早や既に世の學者を感驚せしむるに足る、否少くとも反對論者の口を箝して沈黙せしむるに充分なり、彼等は嘗てパスカールの辨護し、ニウトンの信奉し、デスカルトの尊重したる同

教偉大の眞理に遭遇するときは、忽ち挫屈して反抗の力を失ふに至るものなり」と、然り、同教を信奉したる諸聖諸賢は、學力に於ても、聖徳に於ても、實に偉大の人物にてありき、今日其遺書を繙くときは、彼等の如何に學徳兼備の人物なりしやを知るに足る、吾人の稱して教會の祖先と云ふ者は、又是皆道理の祖先にして、其學其徳に比及する者は、恐らくは世に之をらざるべし。

今之に反して、同教の反對論者を擧ぐるときは、其中に認めらるゝ者は唯だ二種の間のみ、曰く第一未だ基督公教の教理道義の如何を知悉せざる者、未だ同教の歴史を讀みたる事もなき者、少しく之が心得ありとせば、同教の眞相を傳へざる者の書を見て學びたる者等是なり、是等の人間は自己以前の人々は基督教の如何を知らざりきと思考す、殊に知らず彼等却て之を知らざるとを、余として彼等の以前に同教を信奉尊重したる人物を列擧せしめよ、同教を擁護するに致命の血を以てしたる上古の聖賢、例へばジュステン、シプリアン、イギヤス等は姑く言はず、又教會の光り、知識の燈明と仰がれたるオリゼン、オグスチン、トマ、ダケン等の大天才の事も姑く言はず、唯

だ吾人に最も接近せる近代の學者のみを擧ぐれば、ボンチ、ユーレ、ケブレ、ライプニツ、クラルク、バスカール、ボツスエ、ニュトン、マレブランシユ、デスカルト、ベーコン等枚擧に遑わらざる程なり、是等の學者は皆一生の間同教を綿密に講究したる者なり、反對論者は是等の人物を以て同教の眞相を知らざりしと唱道するか、同教に就て誤解したりと主張するか、然れども是等の人物は其名聲今尙は赫々として、精神界の燈明と景仰せらるゝを知らずや、最近世紀に於て哲學、倫理學、算數學、天文學及博物學等に一大光輝を與へたるものは、正しく是等の人物なるを知らざるか、請ふ少しく反省せよ、自餘の學問に於て斯の如き博覽多識の人物が、唯だ宗教の問題に於てのみは大に誤りて、其知今日の學生にも及ばずと思料せらるべきや否や、勿論世は進歩したり、ホツスエ、ライプニツ時代よりは今日の世界遙に文明の域に進みたるに相違なし、然れども今日如何に人知開發して、文物隆盛に赴きたりとするも、以上の大人物の書を遺したる書を繙て、其意を解するを得と自稱するを得る者、今日の哲學者中果して幾人ありとするや、當代の學者と現今の學者とを兩々相并列して、其優劣を論ず

るは頗る興味ある事ならん、又此事柄は論究するに充分價する事ならん、然れども言題外に走るの恐あるを以て姑く之を他日に譲らん。第二種の反對論者は、同教の如何を知悉せざるにわらず、彼等は悪意を挾んで、飽くまで同教の缺點を摘發せんことを努むるが故に、研究の上に研究を加へ、議論の上に議論を重ねて、充分之を知悉す、然れども其之を知悉するに従つて、愈々益々同教を悪んで之が攻撃に従事するは、蓋し所以あるなり、何ぞや、他なし、同教は彼等の腐敗せる心に反對すればなり、彼等の弱點は同教の嚴格なる道義を受くるを忍ぶ能はず、是を以て彼等は飽く迄も之を攻撃して撲滅せん事を企圖するものなり、彼等の同教に反對する理由は、餘り明瞭に過ぐるなり、其性行云爲の暗黒なるや、自然正直なる真理の光を嫌惡するものなり、然れども余は剩りに彼等の急所に單力を直入するを好まず、彼等の良心一とつにても最早充分痛き白刃なり、さればこそ彼等は其良心の刺激を慰撫するが爲め、有らゆる方法手段を案出使用するなれ、彼等は既に自己の良心を黙々せしむるが爲に働くにも是れ日足らざるが如し、之を如何ぞ同教の直射する眞光と、其直入する鋭鋒とを堪へ忍ばん

や、一言以て之れを蔽へば、彼等の基督公教を嫌惡攻撃するは、其心事に暗晦なる所あるが爲め、其行爲に醜怪なる所あるが爲めなりと云ふに在るなり、有名なる道徳學者ラブルエールは疾く既に茲に見るありたるが爲め、吾人に事の真相を穿ちたる名言を遺したり、曰く「若し我れ基督公教の反對論者中に、能く同教の真相を知悉し、且自身も品行端正にして、眞個に道徳の標本となるに足るべき人物一人にても之あらば、余は其時必ず遲疑逡巡して省慮するを初めん、(同教の眞偽如何に就て)、然れども余は、未だ曾て斯の如き者あるを聞見せず」と、乃ち是れ同教に反對を試むる者は、皆是れ或は知らずして之を惡む者、或は道理の裁判の下に到底善人と斷定せられざる者にのみ限ると云ふ意なり、是れ實に反對論者の肺腑を刺りたる痛言なりと謂ふべし、而して余の以上記述したる所は、唯だ此痛言を敷衍したるまでに過ぎざるなり。

余は案外に長大なる議論を費したり、今や之が局を結ばんとするに際し、頭を回らして余の出發したる要點を追想し、一言以て其意の在る所を概括せんと欲す、余は「古事新論」と題せる一書を著して、既に之を世に公にしたり、同書は片々たる一小冊な

りと雖、實は本書と一大關係あるものにして、謂はゞ之が階梯たり、余は此小冊子の中に於て、世界の人民は同一の祖先より出で、同一の命運に達する一大家族の如きものなるを述べたり、東西各種の諸宗教も、均しく皆同一の本教より出で、到る處に同一なる我基督公教の眞理を保持携帶したりしが、唯だ土地と時代に依りて、之れに多少の變更を來したるに過ぎずと云ふ事を叙したり、一切人類は其隆盛の時代と衰頹の時代に在るにも係らず、終始同一の反對を呈し、同一の憫狀を示して、絶へず捕捉すべからざる同一の幸福に垂涎し、悲哀なる運命より脱出するが爲め、到る處に同一の方道（拜敬儀祭）を執りたる事、到る處に自己の救靈と未來幸福の希望を抱懐したる事、神人の間に立ちて和解の勞を執る救濟主の降來を仰望渴仰したる事等を叙述したり、本書に於ては其救濟主の降來は、開闢の當初より人類に約束せられたる事、其約束は預言によりて代々反覆せられ、其降來すべき救濟主の如何なる事を行ふべきや等周到綿密に報道せられ、其生其死の仔細場合に至るまで、明瞭に詳細に預言せられたるが故に、斯く仰望せられたる救濟主は眞個に二個の歴史を有して、一は其生前に、

一は其死後に記録せられたるものと云ふも証言ならざる事、遂に其待ちに待ちたる救濟主の世に降來するや、其生其死全く預言書に詳記明載せられたる不可思議千萬の事に照應投合し、又其天職の事業は全く人知の意想外に出で、上天の神ならでは人の夢寐にだも想像するを（況んや實際に遂行するを）得ざる畫策方道を以て成就せられたる事を論述したり、以上の諸項は實に前後相係合し、上下相關連せる一大築造物の須要なる木材の如きものにして、余は此木材を一々捕捉して、順次に之を證論叙述し來りつゝ、余ながらも頗る神の深意の在る所に感驚したり、故に余は拙著「古事新論」と本書の通篇を閲讀して、以上の諸事の相關連せるを知見する讀者に對しては、遲疑なく躊躇なく茲に斷言するを得、曰く

神の手腕若し此に在らずとせば、他に之あるべき所なし、
別言せば、神の眞理若し此に在らずんば、天下何れの處にか之あらんや。

然れども余は基督公教は神の事業なりと云ふ一大事實を證明するが爲には、有らゆる

證據を列舉し盡したりとは言はず、此一大事實に就ては古來よりの遺書汗牛充棟も置ならず、余は唯だ之に一指を觸れたるのみ、曷んぞ盡したりと言はんや、余は又以上の議は論を以て、人をして然諾を爲さしめ、是非之を信せざるを得ざるに至らしめたりと猶更思考せず、人は自由の動物なり、何者か其信服を強ゆるを得んや、正確にして争ふべからざる事實を示しても、明快にして疑ふべからざる證據を呈しても、之を信ずると信せざるは人の自由にあり、人は其已れに提出せられたる事を意志の自由を以て採否する者なり、是を以て基督に師事して日々其奇蹟を目撃したる者と雖、基督の神なるを信ずると信せざるとは、彼等自由の撰に在りたり、蓋し奇蹟は外部に顯はるゝ事業なれども、神體は隠れて見えざるものなるが故、人の信を絶體的に強取するを得ざればなり、されば余の議論も此點に於ては毫も益する所なかるべし、然れども余は爲に無用の勞を取りたりとは思はず、何となれば人知を啓誘して、之を信仰が其の端緒を開く點までに到達せしむるが爲め、且つ吾人の基督公教を信するの理由は、道理の裁判に懸けても、一點批難すべき所なきを表示せんが爲めには、余の以上に證論し

來りたる所充分其効力ありと確信すればなり、果して然りとせば、道理を廢棄して人知の光を無視すると云はるゝ者は、斯の如く證論せられたる理由に基いて基督公教を信する吾人其者にはわらずして、寧ろ斯の如き證論を知悉するにも係らず、故さら其眼を閉鎖し其意を頑固ならしめ、基督教は信すべからざる事を教ゆと絶體的に斷言する反對者其人にはわらざるなきや、余は彼等の爲に計る、斯の如き斷言をなすよりは、「我は基督公教を信するを好まず、之を實行するに吝しければなり、」と直言するの一層勇らしく且つ事實なるを、此の如き白狀をなすは、區々の議論を吐くより、却て其人の眞率と勇氣とを示すなり、加旃ならず、彼等が徒らに議論を戦はしめて、自己の不信を装はんとするは、彼等に取りて極めて拙策なり、何となれば「彼等斯くして(斯く議論を費しての意)陥る所の妄論謬説は、其恐怖する所の高尚なる眞理よりも成立し難く、且玄妙不可思議なる機密を信せざらんを欲して、一層不可思議なる謬説に踵を接して失墜するに到ればなり、」(ボスエ氏の言)、果して茲に到る時は、彼等如何に議論を費すも、何の益もなし、却て益々自ら己を苦しむるに至るのみ、故に余は

思ふ、若し世に我基督公教を信せしむるものありとせば、否寧ろ人をして萬事を明確に定義する所の同教に歸依せずんば、到底安心立命を得ざるものと思惟せしむるもの世に之ありとせば、彼等反對論者が同教を排斥せんが爲めに唱道したる不合理極まる妄論謬説を一見する事はならんと、今此事の眞偽を知らんと欲せば、五十年以來歐米に航行して、哲學の誤妄謬戾を管め來りたる洋學者、若くは十年以來日本に於て之を學びたる洋學者に就て尋問せば、必ず之が明答あらん、何となれば現今の世界には、懷疑の雲は萬事を圍繞して、甲論乙駁の説の外、他に毫も成立持續すべきものなきを以て、多くの學者は遂に眞理なる者の此世界に在るや否やを疑ふに至りたればなり、善ひ哉ダケツソの言や、曰く「信するよりは信せざるの一層困難なるを證明せんとする人の書は、實に好著なりと謂ふべし」、大人物の言誠に味ふべきなり、他の偉人物も亦之に和して曰く「我は耶蘇基督を信するより優れる事あるを見ず、是れアントアヌ、ド、ブツサル氏が凡ての哲學派の説を逐一研究したる後、事實に迫られて口外に發したる言なり、然れども是等の偉大なる人物は、斯の如き言を吐きたるが故に、道理

を廢棄したる者とは謂はれざるなり、余は斯の如き偉人物の言行を引用して、飽くまでも證論するを得れども、余の既に論述したる所は、「基督公教を信するは、毫も人知を放棄する所以にあらず、却て其之を信する理由を明かに知了するが故に、誤るの憂もなく、欺かるゝの恐れもなく、安心して以て同教に歸依するを得といふ事を證明するに充分なるを以て、茲に到りて又々證論を堆積するの要を見ず、且又他の一方より考察するに、知りつゝ之を信せざる反對論者の心を強て其口を箝する事は、到底能はずとせば、如何程議論に議論を累積するも、決して充分なりと云ふ期は之れなかるべし、蓋し知ると信するとは大に異なり、知るが爲には、眼を開きて學べば可なり、信するに至つては、先づ志を定めて意を決せざるべからず、而して又格別上天の祐助あらんを要す、然れども此祐助は謙遜して以て神前に其精神を屈し、其心を屈する者にわらずんば、往々降らざるを常とす、勿論這般の謙遜と服従は、之を行ふこと困難にして、幾分の苦味を有すれど、其報賞を考ふるときは、其間に又無限の美味あるを感するなり、何となれば人の理性は先づ同教を信する理由の公明正大なるに安心し、

次に同教が萬古人心に蟠屈する大問題を解釋して、之に明答を與ふるを見て、又復た安心するを得ればなり、大問題とは何ぞや、請ふ左の詩を見よ、

無限は我を驅つて苦慮に腦ましむ、

想ひ此に至るときは、畏怖と希望なき能はじ、

古來如何の説ありとするも、我理性は始終驚愕す、

之を理會するを得ざれど、之を避くると能はざればなり。

(アルフレド、ド、ムセ氏)

同詩人の感じたる此苦惱は、天下誰か之を感せざる者あらん、故に其日夜に講究せんと欲する所も、又同詩人と同一轍に出でるはなし。

若しも安然に棲息するが爲め、天を覆はざるべからずとせば、

此世界は果して如何なるものぞ、吾人の茲に生出したるは又果して何の爲ぞ、
獸畜の如く、其眼を單だ地上にのみ注射して此生を送り、

他は皆之を否定し去るは、果して幸福の生涯と謂ふべきか、

否是れ人間たるを失ふ事のみ。

嗚呼何ぞ其言の巧にして其事の眞なるや、眼光を地の一方にのみ注射して此生を送るは、人間たるの品性を失ふに當ると云ふ、然り而して我基督公教は、如何にせば無限に對して恐怖なく行動するを得、又如何にせば希望と愛慕とを以て、其眼を上天に放つ事を得るやを教ゆるが故に、同教こそは實に人をして幸福の境界に至らしむる秘計を有すと謂ふべきなり、嗚呼其効果亦偉ならずや、既に此安心と此和樂あり、茲に初めて其眞價の測度すべからざるを見るべきなり、基督公教に取りて他の證據なしとするも、此一事既に正意誠心の人をして、同教を排するよりは之を信するの如何に安然なるかを知らしむるに餘りあり。

事蹟以前以後之歴史 大尾

三十二
式

明治廿九年八月十九日印刷
明治廿九年八月二十二日發行

口述者

リギヨ

筆記者

前田長太

發行者

石川音次郎

發兌元

文海堂

印刷者

野村宗十郎

印刷所

株式會社東京築地活版製造所
東京市京橋區築地三丁目十五番地
東京市京橋區築地二丁目十七番地

新版廣告

佛人リギョール氏著

古事新論

正價八錢
郵税二錢

五月十五日發賣

國民之友批評

本書は一個の宗教論として價するのみならず、其中には多くの哲理を含蓄し豊富なる文學的趣味を貯蔵するが故に、讀者をして殆んど倦む所なくして、巻を終へしむるの妙あり。その哲理に至りては、悉く吾人の首肯する所にあらざるも、其立論の大にして警語に富み、諷刺に長ずるは、我邦に發行せる宗教家の著作として未だ曾て此編を見ざるなり。此書中引用せるものものは、羅旬、佛蘭西の哲學者及詩人の警句にして、皆多少の眞理を語るものなり。佛人リギョール氏著

愛國の眞理完

正價十錢
郵税二錢

近日出版

本書は我基督教と倫道、愛國心、析衷主義、教育、倫理學、近代の學問等との關係撞突を詳論明説したるものにして、一方には我基督教の主旨を發揮し、一方には曲學阿世の徒の妄論を辨駁し、以て國家の基礎的眞理を建設したる時勢必須の好著なり。

發兌元

東京市京橋區銀坐
三丁目十五番地

文海堂

72
25

D

